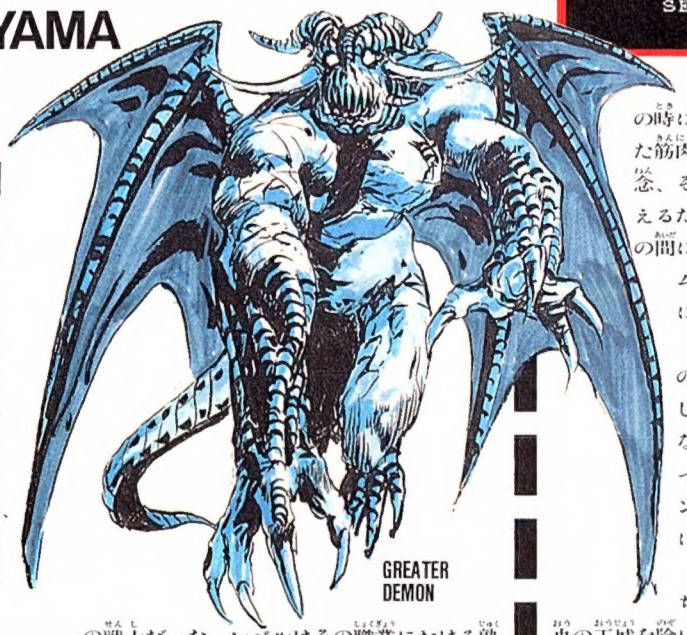
華麗な筆致でつづる剣と魔法の迷宮世界

小説ウィザードリィ

隣り合わせの灰と青春

by BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作 イラスト/末弥純


GREATER DEMON

SCENE 1

§1 GILGAMESH'S TAVERN

狂暴な君主として悪名高いトレボー王の城に隣接した広大な訓練場では、今日も日暮れ近くまでに10人程度の流れ者たちが、大魔術師ワードナを倒して魔除けを手に入れ、近衛兵にとりたててもらうという半ば賭け事じみた冒険の新参者として名乗りをあげていた。しかしそのほとんどが二、三日中に尻尾をまいて逃げ出すか、そうでなければ死んでしまう。おかげで、この城塞都市がどうしようもないほどの冒険者の大群に悩まされる、などという事態は起きないのではあるが。

スカルダが訓練場の一画にあるクラスチェンジの道場をあとにしたのは、その新人登録の〆切時刻である日没にさしかかる頃だった。クラスチェンジの道場とは冒険者が途中で職業を変更するための場所であり、ここを訪れた者が転職するだけの能力を持っていれば、8人いる各職業のマスターに短期間で極意を授けてもらえるのである。

太陽がはるか西方の山の向こうに完全に隠れようとした時、ようやくスカルダは城門をくぐるところだった。怪しい者が城内に入りこまないように二人の門兵がガードしているが、二人ともスカルダの顔はもう幾度となく見て知っているので、軽い会釈で通過できた。

彼は昨日まで——正しくは今朝まで——この城塞都市でも数少ない、レベル13に認定された歴戦の戦士だった。レベルはその職業における熟練の度合いを示す目やすのようなもので、13ともなれば魔法使いや僧侶は全ての呪文を身につける資格を持つ。いわば能力がそれ相応の位にまで高まった証のようなものなのだ。

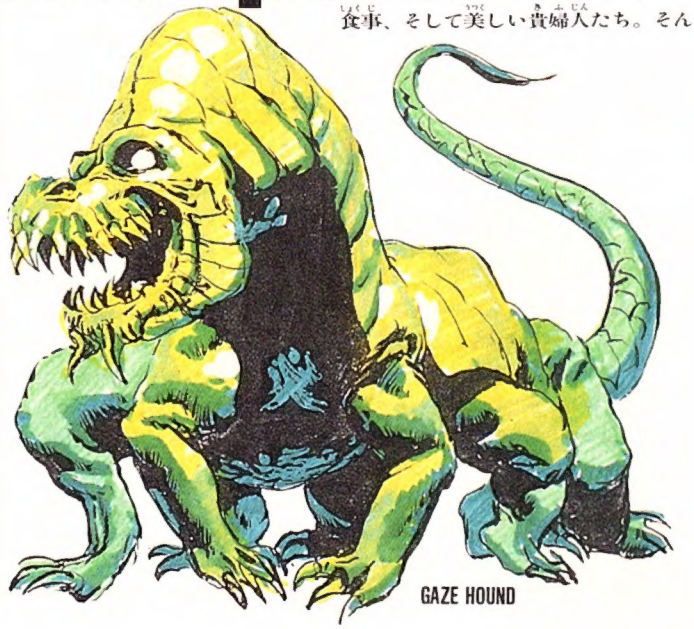
だが、今では一度も実戦を経験していないレベル1の侍となっていた。つい先刻まで侍の道場で転職の特訓を受け、侍の基礎となる能力を身につけてきたのである。戦士の時にはほとんど使うことのなかった筋肉の鍛練と、侍固有の戦法の概念、そして将来魔法使いの呪文を覚えるための初歩的学習。わずか1日の間に、実に5年分ものカリキュラムが実行され、スカルダの五体に叩きこまれたのだ。

そのせいか、どうもこれまでの肉体とは勝手が違うように感じられる。なじんでいないからなのだろうが、手足に鉛が詰まっているようで、戦士時代のカンも鈍っているようにスカルダには思えた。

城の中、といっても冒険者たちが自由に行き来できるのは中央の王城を除いた一般居住区である。夜空にそびえたつ王城の尖塔を見上げ、彼はふと足を止めた。いくつもある窓からは煌々と灯りがもれ、今夜も何かの宴が催されているのだとわかる。

——王侯貴族と近衛隊の住む城か。

この城塞都市に来た16歳の当時は彼も、近衛兵に成り上がってこの王城に入ることに憧れを感じていた。きらびやかな装飾と豪勢な食事、そして美しい貴婦人たち。そん


GAZE HOUND

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかり。善。
- ジャバ……パーティの一員。盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ベリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……謎の魔法使い。悪。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- ワードナ……悪の大魔法使い。

Wizardry

な暮らしか町外れの迷宮での冒険で手に入るかも知れないのだ。

しかし戦士として戦いを積み重ね、2年の月日を過ごすうちに、貴族の暮らしなどというものはどうでもいいことのように思えてきた。

彼はまず何よりも強くなりたかった。どんな怪物をも倒せる

戦闘能力を身につけたかった

のだ。

この町で冒険者として今日まで逃げずに生きてこれたのも、この思いがあったからなのだろう。そう考えて彼はまた暗い石畳の上を歩き出した。

城壁に囲まれた部分も大した広さがあるわけではなく、数分歩いただけですぐ冒険者のたまり場になっているギルガメッシュの酒場がある通りに着いた。夜になっても酒場やとばく場の集まるこの通りだけは昼にも増して活気がある。とりわけギルガメッシュの酒場は丸一日休みなしに営業しているので、冒険の仲間をつのる者が数多く集まるのだ。そのギルガメッシュ酒場の前で酒杯を片手に涼んでいる男がスカルダに気がついた。「いよう、スカルダ」男は近寄ってきて、「どこ行ってたんだよ」

「気がつかないか？」

「気がつかないってお前……そういや昨日に比べてずいぶん老けたように見えるな。とても18歳にゃ見えないぜ」

その男――ジャバは酒杯をあおり、大げさに目をこすってみせた。この男はスカルダの参加するパーティの前衛をつとめる盗賊で、力は弱いが罠を外す技能は町で右に出る者はいないとまでいわれている。ただ、余計で派手なジェスチャーが、繊細な作業を必要とする盗賊稼業に似つかわしくないとの声も少なくない。

「何か悪事でもしでかして一日強制労働でもやらされたか？　日に焼けると確かに老けるからなあ」

「それが長年パーティを組んできた仲間に対する言葉かよ。強制労働をくらったほうがはるかに楽なくらい厳しい修業を積んできたんだぞ」

スカルダはあごのまわりにうっすらと生えた無精髭をなで、顔をしかめた。

「と言うと？」

「血のめぐりの悪いヤツだな。俺は朝からずっと訓練場へ行ってたんだよ」

「じゃあクラスチェンジでもしてきたってのか？　こりゃたまげた」ジャバはスカルダの厚い胸板をドン、とたたいた。「どうりで5歳は老けてるはずだ。俺にまで内緒で行くなんて人が悪いぜ」

その時、酒場の中から一人の女が出てきた。これまたパーティの仲

間で、目下のところ最後の呪文を覚えるべく実戦を重ねているレベル12の魔法使い・サラである。

「ジャバってば、いつまで酔いざましてんの……　あーらスカルダじゃない。今日はまた一体どこに行ってたのよ？強制労働でしょ」

「前から一度聞いてみたかったんだが、キミは俺を何だと思ってるんだ」幾分ムッとしてスカルダは言った。

「まあね、からかいがいのある人だとは思うわ。熟練の戦士になんてぜーんぜん見えない。あーははは」

よく見るとサラの顔は真赤で足元もふらついている。かなり酔いが回ってる様子だった。

「なんでえ、俺を探しにきたような顔して自分が涼みにきたんじゃないか。あんまり人の邪魔にならないようにそっちの隅、ほれ、空いてる酒樽があるからそれにでももたれてろ。くれぐれも言っとくが暴れるなよ」

「はあーい」そう応えてサラはふらふらと樽に近づいていき、もたれかかったかと思うとずり落ちるように座りこんだ。

「おいジャバ、放っといていいのか？」

「確かに嫁入り前の娘にしちゃみっともない恰好だな。仲間として見るに忍びないんだが……」といいながらジャバはスカルダの背をかなり強く押して酒場の中に入っていく。「なにしろ今日はかなりの酔っ払い方だ。前にあいつが泥酔した時のことを覚えてるだろ」

「思い出したくもない」スカルダは首を振った。

もう半年以上前の話だが、サラはこのギルガメッシュの酒場で大暴れをしたことがあった。こともあろ

ギルガメッシュは人生

万一若い娘だって気がついたって例の騒ぎを覚えてる奴はまだまだたくさんいるからな。誰が好んでサラにちょっかい出すもんか」

そう言われるとスカルダも無理に店の中にサラを連れ戻す気にはなれなかった。

酒場の中は煙草のけむりでもやがかかったようになっている。吟遊詩人の歌声と客の笑い声が聞こえる中、二人はいくつものテーブルをかいくぐって角にあるテーブルに集まっている仲間たちのところへ向かった。

そのテーブルには二人の男が腰掛けていた。二人はスカルダと一緒に接近戦の要となっている戦士のガディースカルダも元戦士だけあってかなりいい体格をしているのだが、このガディはさらに2回りは大きい。巨体から生み出される破壊力は相当のものである。

そしてもう一人、あご髭をたくわえた僧形の中年男は全ての僧侶の呪文をマスターしたこの城でただ二人の高僧ベリアルだった。

スカルダたちを認めたガディが手を挙げて合図した。が、彼もベリアルも心なしかいつもの元気がない。

「サラはどうした？」ガディが口を開いた。

ジャバは足先に椅子を引っ掛けて引き出すと身軽に腰を落ろした。スカルダはまだ自分の身体にぎこちなさを感じながらも、同様に卓につく。

「外で涼んでる。あの様子ならじきに酔いもさめるだろうよ」ジャバは手にした杯に酒を注ぎスカルダに渡した。「まあ飲めよ。今夜は鎮魂の酒だ」

ジャバもいつもより暗い面もちをしているのに、スカルダはその時初めて気がついた。「留守中何があった？　鎮魂ってのはまさか」「そのまさかなんだ」ベリアルが額を押さえて、「カントのインチキ坊主どもがしくじってな。シルバーの爺さんはちりになってしまった」

「そのうえ1万ゴールド近い金をふんだくってやがる。金も銀も失くなったわけだ」ジャバが吐きすてるように言った。「金は惜しかないがよ」

シルバーとはサラと同じ魔法使いなのだが、レベルは15にもなっている最古参の冒険者だった。かなりの高齢だったため最近は体力の衰えを訴えていたのだが、昨日の戦闘で命を落としたため、城の番兵たちによってカント寺院へ運び込まれていたのだった。だが、ほぼ確実に死者を蘇えらせるといわれるカント寺院の僧たちは二度の蘇生術に失敗し、シルバーはこの世から完全に消滅してしまったのである。

「シルバーがか……」スカルダは言葉を失った。パーティの前衛を盗賊であるジャバが務めるうえに、自分が侍とはいえレベル1に戻ってしまった現在、接近戦の攻撃力は大きく不安が残っている。そこへきて呪文攻撃の中心であるシルバーを失ったとなると、パーティ全体の戦闘能力はガタ落ちしたといっていいだろう。

それにも増して、苦楽を共にしてきた仲間を失った悲しみは大きい。スカルダは無言で酒杯をあおった。

うに呪文を次々と唱えたのである。酒場を暗くしてみよう、などとぬかしてマモーリスを唱えたり、飲み逃げを狙ってかいきなりカティノをかけてみたり、しまいには文句をつけてきた冒険者の一人をハリトで火ダルマにしてしまい、しばらくの間酒場に出入りができなくなった。

「あの時はまだ良かったが店の中でラカニトでも唱えられてみろ。俺たちや永久追放もんだぜ」

「だけどあのまま座り込んでたら誰かにからまれるってこともあるだろ」

「大丈夫だって」ジャバは本気で面倒を見るつもりはないらしかった。

「魔法使いのローブのおかげでちょっと見には占い師の老婆のようにしか見えねえし、

の縮図にも似て…

「ところでスカルダ、俺を見て何か気がつかないかい」

ひとしきり酒杯を傾けたところでジャバが自分を指して尋ねた。なにぶんにも危険の多い冒険者たちのこと、シルバーの死を悼みはするが、悲しみから立ち直るのもそんなに遅くはない。

「さっきのお返しか。別にいつもと変わってるようには見えないがな。新しい剣でも手に入れたのか？」

ジャバの腰に下がった剣を確かめようと卓の下をのぞいたスカルダは、そこで奇妙なことに気がついた。

非力な盗賊が扱いきれる武器はせいぜい短剣が限度である。ところがジャバが下げている剣の鞘は優に長剣を収めるだけの長さがあった。何故今まで気がつかなかったのか

HUGE SPIDER

スカルダは不思議に思った。やはり少し判断力が鈍っているせいだろう。

「ちょっと見せてみろ」そういってわずかに剣を引き出すと、ギラッと見慣れた刀身の光が見てとれた。「こりゃあ切り裂きの剣じゃないか。何でお前がこんなもの下げてるんだ」

「血のめぐりが悪いぜ、スカルダよ」同じセリフでかたきを取れたので、ジャバはニヤッと笑ってみせた。

「ジャバは忍者にクラスチェンジしたんだよ」ガディが口をはさんだ。

「忍者？　だってこいつは中立の考えのはずだぜ。忍者になれるのは悪党――おっとと、俺やベリアルと反対の考えを持った連中だけだろうが」

「今日ボルタックの店にとんでもない掘り出しものが出てたのさ」ジャバはウインクして、「盗賊の短刀って品なんだが、武器としては大したものじゃない。ところがすげえ魔法がかかっていて、こいつを使った盗賊は誰でも忍者になれるってんだ。５万ゴールドだったが安いもんだろ」

「それじゃお前もレベル１に？」

「いや、その魔力を使う前にボルタックの親父に聞いてみたんだが、それまでのレベルがそのまま忍者の能力になっちまうらしい。まだ地下には潜ってないんで実戦では確かめてないが、どうも嘘じゃないようだぜ」

「スカルダ」ベリアルが急に口を開いた。「今朝からお主が居なかったのはやはりあれか」

「あ あ」スカルダはうなづいた。さすがこの僧侶は一目で転職を見抜いたらしい。

「侍とはまた思いきったものだ。お主にはロードになる資格もあるというのに」

「侍じゃなきゃダメなんだ」そうつぶやくとスカルダは何かを思い出したように黙り込んだ。

その時、酒場に入ってきた漆黒のローブを着けた人物が、なぜかは判らないがスカルダの目に強く焼きついた。

人物、といったのはローブのフードを頭にかぶっているばかりか口元にも黒い布を巻きつけているため、男とも女ともつかないからである。

ジャバもその人物に気がついたようで、すぐに立ち上がった。

「知り合いだ。ちょいと連れてくる」

ジャバがテーブルを離れると、ベリアルがスカルダに向き直った。

「盗賊の短刀のことだがな、お主も知っての通り盗賊というのは最も少ない経験で高いレベルへと成長していく。逆に忍者は倍近い実戦を積んでようやく成長するクラスだ。つまり忍者にそのレベルのままで変身できるのなら、盗賊としてしばらく成長を続けたほうがあいつにとっては都合がいい」そこまで言ってベリアルは酒を一口飲んだ。「だがシルバーはいなくなってしまった。そこで戦力を強化するために、あいつはあえて忍者になる道を選んだのだ。それを考えたうえで、あいつの話を聞いてやってくれんか。リーダーとしてな」

「何をする気かは知らんが」スカルダは何も考えてなさそうなジャバがそこまでパーティ全体のことを思っていることを知って胸が熱くなった。「レベル１になってしまった俺は戦力としては問題になるまい。よほどの話じゃない限り文句はつけないよ」

「うむ」

話の終わったところで、ジャバが黒いローブの人物を連れて戻ってきた。近くで見るとどうやら男だったらしい。眼だけをフードのすき間からのぞかせた風体は異様な圧力を感じさせる。

「紹介するぜ。今日ボルタックの店で知り合った男で、例の短刀を持ち込んだのもこの人なんだそうだ。魔法使いのバルカンだ」ジャバがパーティの仲間たち、というよりスカルダを見ながら男を紹介した。

——なるほどね、悪のメンバーを参入させるってのか。背に腹はかえられないからな。

「バルカンだ。魔法使いの呪文は残らずマスターしている」しわがれた声で男が自己紹介した。目だけでは判断はつかないが、相当年老いているようである。

——眼を見りゃ一発でわかる。こいつはかなりの悪だな。

スカルダはバルカンの眼をにらみつけてから、ジャバを見た。

「シルバーの代わりにこの男を？」

「どうだろうか？」ジャバはベリアルとスカルダ両方に問いかけた。「善の二人には気のすすまない話だろうけど」

とはいえ、ベリアルにはもう話を通しているらしく、あとはスカルダの返答次第である。

「俺はかまわないが、ここでいっしょに酒を飲む気にはなれないな。悪いがパーティを組むのは迷宮に入ってからだ。明日の朝迷宮の入口で合流でいいか？」

こくりとうなづくとバルカンはジャバと二、三言葉を交したあと再び店の外に出て行った。

「お前の気持ちも判るんだが、マロールやティルトウェイトを身につけた魔法使いというとなかなかいないんだ。しばらくこらえてくれよ」ぶ然としているスカルダをなだめるようにジャバが言った。

「そのくらいのことはお安い御用なんだが」

考えごとをするようにスカルダは続けた。「何かいやな予感がするんだ。あのバルカンってヤツは誓ってただの魔法使いじゃないぞ」

「そりゃ考えすぎだぜ」

ジャバがまた酒杯に手をのばそうとした時、ガディの手がその杯を押さえた。

「もう飲まないほうがいいと思うよ。俺もいやな予感がするんだ。酔っちゃここから逃げられないし」

「何で逃げるんだよ？」

「サラがまだ戻ってこないだろ」

あっ、と３人が顔を見合わせた瞬間、店の中に背中に火のついた数人のごろつき風の男たちが飛び込んできた。

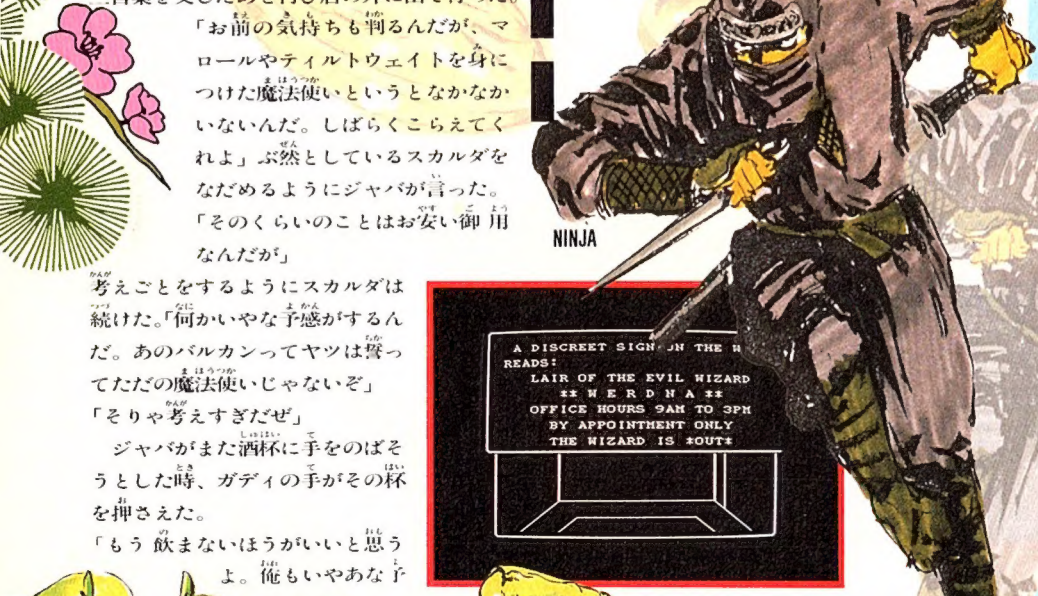
「熱ちちちっ！」

「水をくれ、水を…」

男たちが転げ回るのを茫然と見つめながらスカルダがつぶやいた。

「サラだ……」

「サラだっ!!」（つづく…かな）



●あとがきにかえて…

かくしてウィザードリィ小説第一回は、地下迷宮はおろか冒険者の宿にも足を踏み入れずに、何とギルガメッシュの酒場だけで終わってしまった。

でも、本来ゲームにはない情景描写をするとなると、どうしても原稿枚数が多くなってしまうのはやむをえないことである。例えばゲーム通りの描写をしたとすると、今回スカルダが酒場へ向かうくだりは、「スカルダは訓練場を出てギルガメッシュの酒場へ行った」でおしまいだもんね。

Bボタンと Aボタンを押すだけの動作にどうしてこんなに文章を使ってしまうのか？

この本のページ数が表紙も入れて128ページ。値段が250円だからページ当たりの単価は約２円になり、するとこの小説５ページは10円ぶんという計算になる。ゲーム中では一瞬の出来事でしかないのに10円もとられたなんて許せない！　なんて人はいないだろうが、とにかくガチャポンもできないお金で小説が読めるだけでももうけもんじゃない？　もしキミが活字離れといわれて久しい小中学生だったらお父さんお母さんにこのページを見せてあげなさい。もしかしたらホメられるかも知れないぞ。自信ないけど。

さて月イチ連載となったこの小説だけど、次回はいよいよ地下迷宮へと突入する。地下で合流した悪の魔法使いバルカンを引き連れ、スカルダのレベルアップのため一路地下10階へと進む一行の前に立ちはだかる巨大な影。果たしてパーティの運命やいかに？　そしてバルカンの真意は？

などといってはいるものの、果たしてそこまで進むのかどうか書いているボクも自信がない。もしかしたら冒険者の宿だけで二回目も終わっちゃうかもね。そしたらカンベンね。

●この小説の御感想・御意見がありましたら、ファミコン必勝本編集部「隣り合わせの灰と青春」係まで。

Wizardry

華麗な筆致でつづる剣と魔法の迷宮世界

小説ウィザードリィ 第2回

隣り合わせの灰と青春

By BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作　イラスト／末弥純

レベルを13にまで高めているにもかかわらず、戦士を捨てて侍へとクラスチェンジしたスカルダ。しかし訓練場からギルガメッシュの酒場へと戻った彼を待っていたのはパーティの魔法使い、シルバーの消滅という悲報だった。そこで仲間のジャバは怪しげな悪の魔法使いバルカンのパーティ参入を申し入れる。本来は悪と言葉すら交わしたがらない善の性格を持つスカルダではあったが、同じく善の僧侶ベリアルのロぞえもあってしぶしぶながら話をのんでしまう。が、そんなことを不安に思う間もなく、泥酔した女魔法使いサラの大暴れで一行は酒場を逃げ出す羽目になった…。

SCENE2

§2 ADVENTURE'SINN

「何にせよ使った呪文がハリト程度ですんでよかった。

スカルダは久しぶりに簡易寝台のベッドに横になって一息ついた。横のベッドではガディがあくびをしている。

ついさっきまでは二人ともぜいぜいと肩で息をしていた。というのもサラにからんで火だるまにされた男たちが転がり込んできたと同時にギルダメッシュの酒場から逃げ出し、まだ酒樽にもたれてブツブツと独り言をつぶやいていたサラをかついで一目散にこの冒険者の宿まで走ってきたのである。

サラをロイヤルスイートに放り込み、馬小屋で寝るというジャバ、ベリアルと別れて宿に入ってからずいぶんたって、ようやくスカルダが口を開いたのだった。

「これでまたしばらくは酒場に行けなくなっちまったなぁ。あいつの酒ぐせの悪いのにも困ったもんだぜ」

「サラはシルバーと同じ魔法使いだったからね」ガディは天井を見たまま言った。

「きっと俺たち以上にショックが大きかったんだろうな」

「ああ」

あおむけに寝ころんだスカルダの脳裏にはシルバーの死ぬ原因となった、一昨日の戦闘のことが浮かんできていた。

その日の地下迷宮の探索も、彼らのパーティは地下10階まで足をのばしていた。地下9階からシュートでしか行くことのできないそこは、他のフロアとはまるで違ったゴツゴツした厚い石壁に囲まれていて、見るからに彼らの目的地に近いことを示している。

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかり。善。
- ジャバ……パーティの一員。盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ベリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……謎の魔法使い。悪。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- ワードナ……悪の大魔法使い。

Wizardry

彼らがこのフロアに降りるようになってからもう一週間以上経過していた。はじめは出現するモンスターたちにかなり苦戦をしいられていたものの、スカルダとガディがいにしえの名匠カシナートの手による剣を見つけてからは、呪文のバックアップによってほとんど苦労もなく戦闘に勝利できるようになっている。

その日も3グループのモンスターを片づけていくつかの宝を手にし、ワープゾーンを使って次の玄室へと進んでいた彼らは、一時そこでキャンプを張り、体力の回復と今後の方針について話し合いをすすめていた。

「この調子ならもうワードナを倒すこともできるんじゃないか」とジャバ。

「向かうところ敵なしってとこだものね。挑戦するのも悪くないと思うわ」

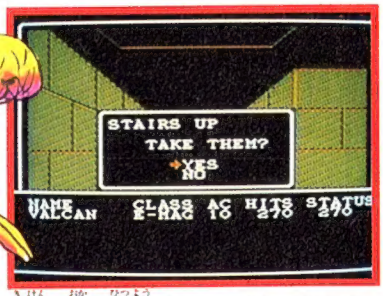
「だがそれはお前さんが7レベルの呪文を覚えきってからのほうがいいぞ。今のままじゃ儂が死んでしまったらマロール5使えんじゃろうが」シルバーがサラをたしなめる。

「何でもワードナの部屋からは魔法を使わないと帰れないというでな」

「そうだな」このパーティで一応リーダーとされているスカルダがシルバーに同意した。

「もう少し実戦を繰り返せばサラもすぐ次の呪文を覚えるだろうさ。あと二回ほど怪物と戦ったら今日は帰ろう」

サラは少々むくれた顔をしたが、なにもここで危険を犯す必要はないのはもっともで、とにかく話はまとまった。



そしてキャンプを片づけて、先へ進もうとしたその時――。

ふと目の前の空間に爆発のようなものが起こった。最初は極小の球状だった炎の渦が、見るまに直径が人の身長ほどの黄い青色の火球にふくれあがる。しかしそれは妙に現実味を欠いた光景であり、事実爆発音も熱もない奇怪な現象だった。

――何だ、この火球は？

スカルダをはじめ、パーティの全員がどんな事態にも対応できるよう身構えている。

ついに3メートルほどの大きさになった火球は、あたかも心臓のように定期的な収縮を繰り返している。

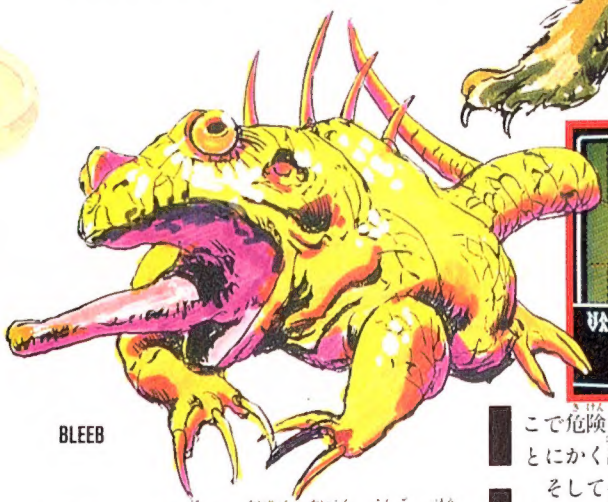
以前彼らは以たものを目にしたのを思い出していた。もっともその時は半分以下の大きさの火球で、色もオレンジ色だったのだが。それは魔界へとつながる異次元の扉であり、直後に出現したのは山羊の頭を持つ魔物レッサーデーモンだった。

しかし今目前にしているのは明らかにもっと巨大なものの通路である。そうスカルダが気づいた時、巨大な影が火の玉の中に浮かびがった。

ぐ、はあああああ……。

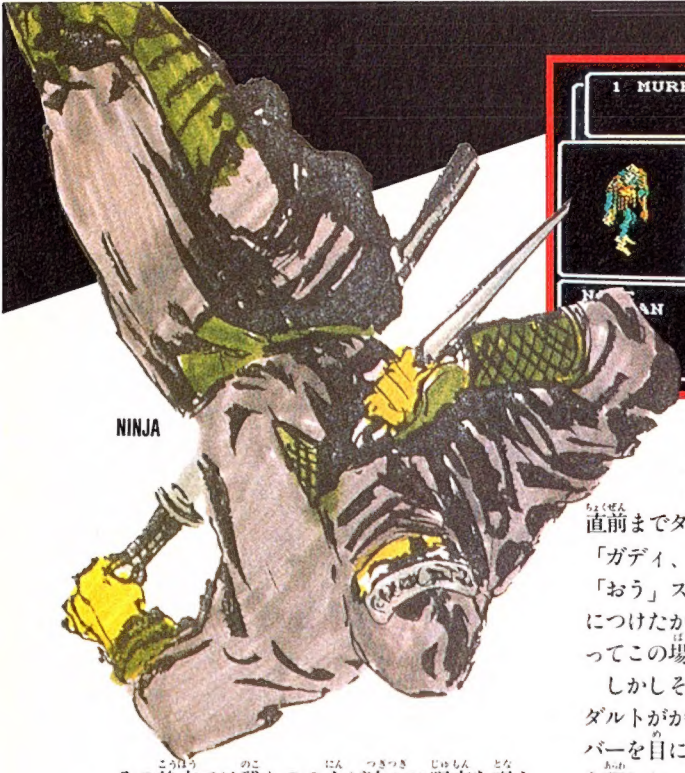
初めて見え異形の生物――羊の角を持つ青色の巨大な悪魔――は笑ったように見えた。そして一瞬のうちに実体化する。火の玉が唐突に消えせた。

と、同時にスカルダ、ガディ、ジャバの三人は怪物に向かって切りかかっていく。


BLEEB

CHIMERA

WEREAT



その後方では残りの３人が次々に呪文を唱えた。敵は一匹である。負けるとは誰も思っていなかった。

だが、怪物に剣が当たった瞬間、その予想外の硬さにスカルダは驚いた。厚い皮に威力を殺され、カシナートの剣もほとんどダメージを与えていない。ガディも同じである。ジャバの短剣はあっさりと弾かれた。

また、呪文も一切効果がないようだった。マダルト、カティノ、モンティノの呪文が敵に届く前に消えてしまうのだ。驚くパーティの面々に、逆にマダルトの猛吹雪が襲う。

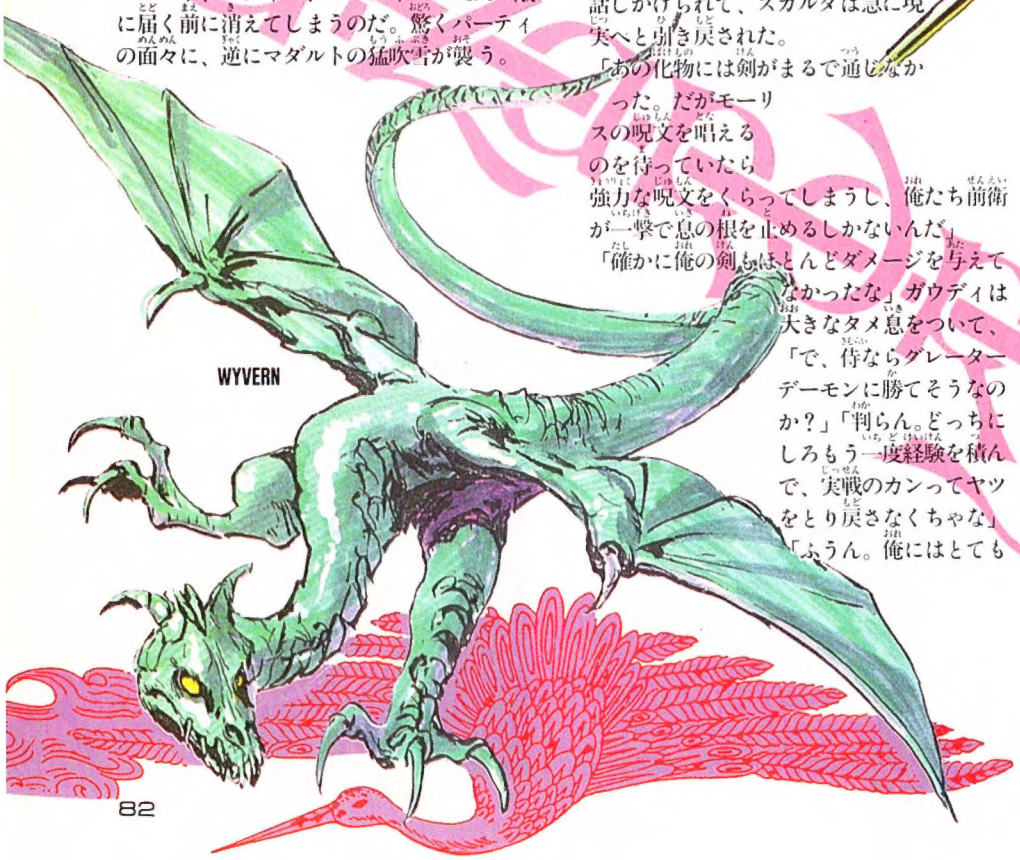
「まずいぞスカルダ！　ひとまず逃げたほうがいい！」ベリアルが叫ぶ。もうすでにシルバーは死ぬ直前までダメージを与えられていた。

「ガディ、転移のかぶとを！」

「おう」スカルダの指令に応えてガディが頭につけたかぶとの能力を使う。マロールによってこの場を脱出するのである。

しかしそれより早くパーティに二度目のマダルトがかけられた。絶命し、頽おれるシルバーを目にした時、ようやくマロールが効果を現した。

自分の身体がテレポートする瞬間、スカルダは確かに怪物――グレーターデーモンがあざ笑うのを見た。



「戦士を捨てたのは、やっぱりヤツに歯が立たなかったからかい？」

すっかり眠っていると思っていたガディに話しかけられて、スカルダは急に現実へと引き戻された。

「あの化物には剣がまるで通じなかった。だがモーリスの呪文を唱えるのを待っていたら強力な呪文をくらってしまうし、俺たち前衛が一撃で息の根を止めるしかないんだ」

「確かに俺の剣もほとんどダメージを与えてなかったな」ガウディは大きなタメ息をついて、「で、侍ならグレーターデーモンに勝てそうなのか？」「判らん。どっちにしろもう一度経験を積んで、実戦のカンってヤツをとり戻さなくちゃな」

「ふうん。俺にはとても

も今さら転職するような勇気はないなあ。このまま腕を磨いていればいつかは勝てるかも知れないし」

――そうかも知れない。いや、そのほうが正しかったかも。

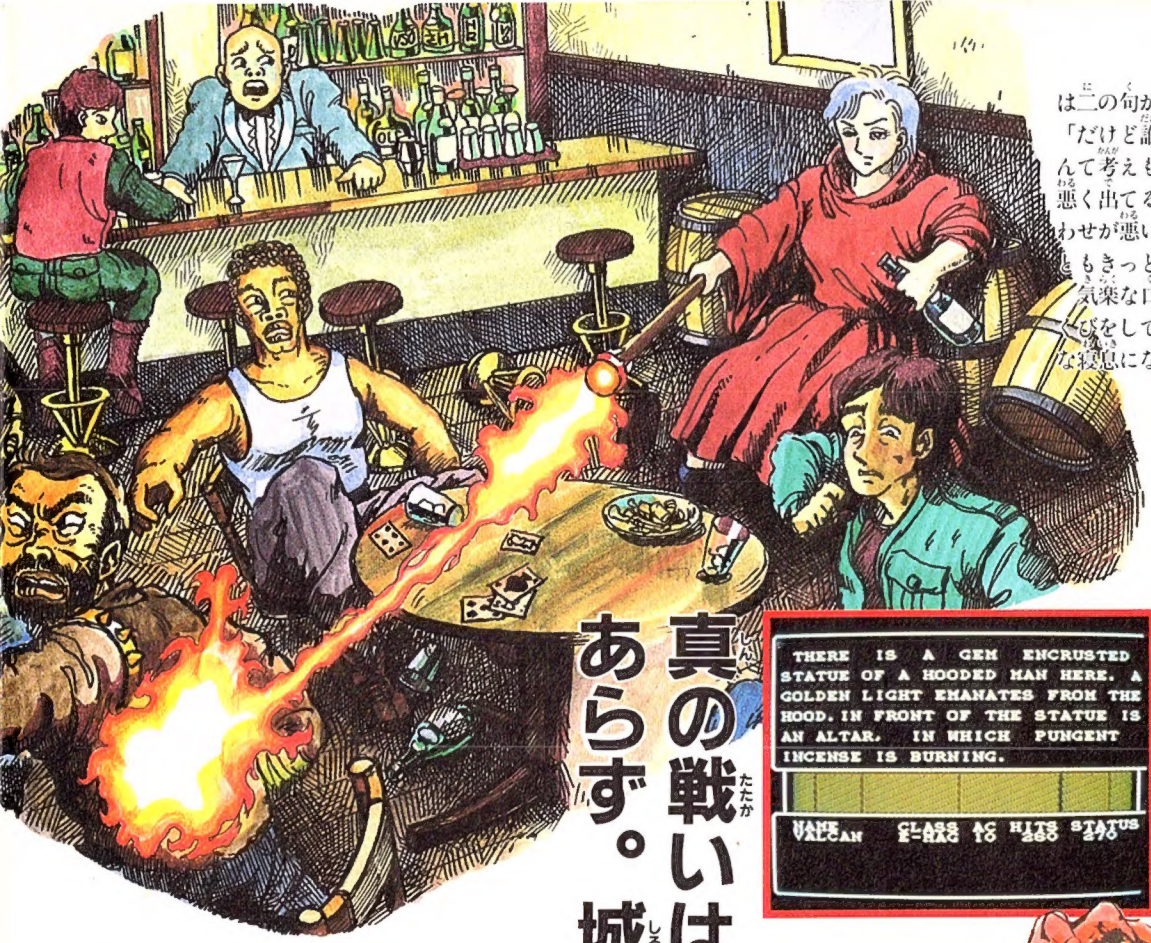
スカルダはその日の明け方、訓練所に向かうまでの道のりで幾度となく繰り返した迷いを今さらながら思い起こしていた。

――確かにこれまでだってそうだった。地下４階のアロケーションセンターを守っていたベテランニンジャやファイターたちにだって、最

初はとても勝てないと考えたもんだ。それがいつの間にか一撃で蹴散らせるほど、俺たちのパーティは強くなっていった。

ワードナの地下迷宮に巣喰う怪物どもを相手にサバイバルを続けるのは容易ではない。事実、連日この城塞に富と名声を求めて流れてくる冒険者の大半はその日のうちに地下１階のオークやコボルドの餌食となっている。その修羅場をくぐり抜け、成長を重ねてきたスカルダたちのパーティは数ある有望なパーティの中でも１、２を争うエリート部隊だった。シルバーを失ったとはいえ、あとがまを気長に訓練していけば、必ずや最強のパーティとしてトレボー王の近衛隊に迎え入れられるようになっただろう。

――だが俺のなりたいのはそんなもんじゃない。俺は誰にも――そう、あの狂的な強さを



真の戦いは迷宮にあらず。城にあり

THERE IS A GEM ENCRUSTED STATUE OF A HOODED MAN HERE. A GOLDEN LIGHT EMANATES FROM THE HOOD. IN FRONT OF THE STATUE IS AN ALTAR. IN WHICH PUNGENT INCENSE IS BURNING.

NAME	CLASS	AC	HITS	STATUS
VALCAN	E-MAG	10	280	270

誇るトレボー王にすら負けない強さを身につけたいんだ。

日々そう考え続けてきたスカルダにとって戦士としての自信が揺るぎなくなってきた時に、たった一匹のモンスターに軽くあしらわれたのは他人に想像もつかないほどのショックだったのである。

「なあガディ」

「ああ？」眠そうな声でガディが応える。

「俺は……パーティのリーダーとして失格じゃないかな。よりによってこんな時に転職しちまうなんて」

「そりゃまあその通りだね」

あっさりと肯定されて、スカルダは二の句がつげなくなった。

「だけど誰もシルバーがいなくなっちまうなんて考えもしなかったしさ。結果は今んとこ悪く出てるけど、そいつはあくまでめぐりあわせが悪いんだ。侍になってよかったってこともきっとあるさ」

気楽な口調でガディは言うと、ひとつ大あくびをして目を閉じた。すぐに呼吸が規則的な寝息になる。もう眠ってしまったようだった。

「めぐりあわせ、か……」

スカルダは独りつぶやいた。ガディのおかげで何か胸のつかえが取れたような気がする。

転職してからずっと、常に自分の選択は間違っていたんじゃないかという不安がつきまとっていた。戦士を捨てたことはもはやとり返しがつかないにもかかわらずだ。だが、そんなことを悩むのは実戦を重ねてからだと彼は決めた。

明日は日の出とともに起き、侍としての最初の戦いを挑まねばならない。スカルダも寝ようとまぶたを閉じた。

しかし、再びあの黒衣の魔法使いバルカンへの不安が暗雲のように心にわきあがり、彼が眠りに落ちたのはさらに夜が更けてからのことであった。

SCENE3
§3 EDGE OF TOWN

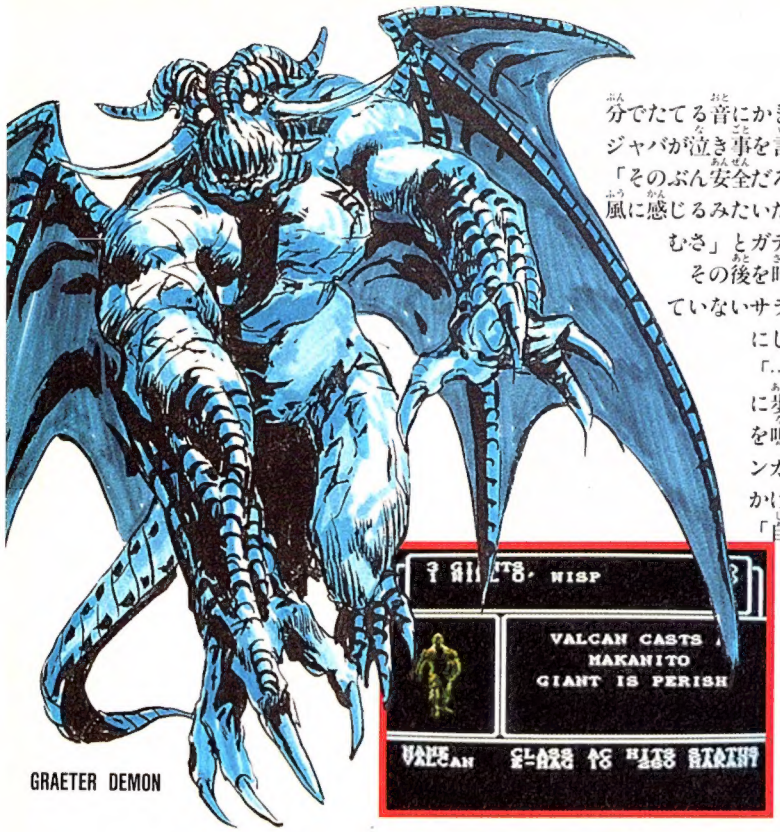
明けて翌日。

鳥のさえずりとともに、夜の闇がこの城塞都市から追い払われようとしていた。高い城壁に囲まれている町のため、はるかな地平線からさし込む朝日を目にすることはできない

IN THIS ROOM A STATUE OF A MONSTER WITH THE BODY OF A CHICKEN AND THE HEAD OF A CAT. THE STATUE IS MADE OF BRONZE, AND LIES ON AN ONYX PEDESTAL. THERE ARE UNUSUAL RUNES ON A PLAQUE THEREON.

NAME	CLASS	AC	HITS	STATUS
VALCAN	E-MAG	10	280	270

LESSER DEMON



GRAETER DEMON

分でたてる音にかき消されそうになりながらジャバが泣き事を言う。

「そのぶん安全だろ。はじめはみんなそんな風に感じるみたいだけど、そのうちすぐなじむさ」とガディ。

その後を昨晩の深酒がまだ抜けきっていないサラがローブをひきずるようにして続く。

「……ジャバぁ、も少し静かに歩けないのお。あんたが鎧を鳴らす度にあたしの頭もガンガン鳴るのよ。あんたのおかげでもう死にそう」

「自業自得ってやつだろ。一杯飲めば酔っ払っちまうくせに、一ピン丸々空けたそうじゃねえか。大体おまえ昨日の夜やったことを覚えてんのか？　俺なんか飲んですぐ走って逃げたんで途中で吐いちまったんだぞ」いっこうに静かく歩く気配を見せずにジャバが怒鳴り返す。

「痛たた……ったくきったない話を大声で。なによ、あんたたちだって止めなかったじゃないの。仲間意識が少々希薄なんじゃない？」

そう言ってサラはガディとしんがりを歩くベリアルをじろりとにらんだが、ガディは相変らずそ知らぬ様子で、ベリアルもほこ先が自分にむいてはかなわぬとそっぽを向いている。

「そりゃあたしだって悪かったわよ。町なかで魔法を使うのはいけないことだし、いくらシルバーを悼んで飲んだといっても量が多過ぎだったわ。でもねえ、だからってうら若い乙女を人通りの多い道ばたに寝かせといて放っておくのがいいって法はないでしょ。しかも勝手にロイヤルスイートなんかに泊まらせてさ。一晩で70ゴールドも取られんのよ……あー頭が割れそう」

二日酔いというよりまだ酔っ払いに近いサラはブツブツとつぶやき続けた。普段は赤味がかった金髪と緑色の瞳、整った顔立ちと白くぬけるような肌で美少女魔導師とまでいわれているがジャバがお手上げといった仕草を見せた。こうなるともうブリーブの鳴き声なみのうるささである。

さして広くもない城塞である。そうこうしているうちにいつの間にか城門に到着した。

衛兵に片手をあげてスカルダが近づいた。

「よう、夜勤ご苦労さん。今日は独りのようだな」

「おう、あんたか。仲間うちじゃ転職したんじゃないかって噂になってるぜ」顔見知りの衛兵は眠そうに目をこすった。毎日のようにここを出入りするスカルダたちは彼らとけっこう仲がいい。「サラはどうしたんだよ。やけに不機嫌な顔してるな。美人が台なしだ」

まさか夕べの騒ぎを説明するわけにもいかずスカルダは曖昧にうなずいた。

「全くだ。ところで魔法使いが一人出ていったかい？　全身黒づくめのやつだが」

「あれかい？」衛兵は城門の100 Mほど斜め前方、つまり訓練場のすぐそばにぽっかりと口を開けた迷宮の入口を指さした。ちょうどスカルダは背を向けたような恰好で衛兵と話していたため、そちらは死角になっている。

振り返ると、朝日をいっぱいに浴びた大地に、暗闇の名残りのような漆黒のローブに身を包んだバルカンが、身じろぎひとつせずに立っているのが見えた。

「知り合いなのか？　ずいぶん胡散臭い野郎だな。さっきからああやってじっとしてがやんだ。薄気味悪くてかなわねえよ」

スカルダは衛兵に別れを告げ、ガディたちと城塞の外――迷宮の入口へと歩き出した。

彼らに気づいているのかいないのか、うつむいたままたたずんでいるバルカンの姿に不吉なものを感じながらも、スカルダの心は狂おしいまでの戦闘意欲に燃えていた。

そしてその後ではサラがまだ騒いでいた。

「朝日が目にささる！　お願いだからベリアル、あたしにマディをかけて。ねえ、ラツモフィスでもいいからさあ。ねえってば」

（つづく……はず）

が、うすいグレーの空が次第に澄みきった青に変わるにつれて、都市の居住区の人々はその日の営みを始めるのである。

町外れの迷宮へと挑む冒険者が格安で休息がとれるようにと造られた冒険者の宿も日の出の時刻になるとほとんどの者が起き出して、出発する準備を整える。もっとも怪物に深手を受けて逃げ帰った者たちは一週間やそこら宿に寝たきりになるのではあるが。

多くの戦士たちが重い鉄製の鎧や小手を装着する音がガチャガチャと響く中、スカルダたち五人は一足先に城門に向かって宿をチェックアウトした。

レベル1に戻ったとはいえ、侍として訓練を受けたスカルダは一昨日まで着けていた戦士の武器と防具をそのまま着けることができる。彼は早くも真深に忍耐のかぶとをかぶって一行の先頭を歩いていく。

魔法のアイテムによってレベルをそのままに忍者となったジャバは、どうやら昨日のうちに新たな防具類を買いそろえたらしく、慣れない様子で重い鎧を派手に鳴らして後に続いている。次はいつも通り飄々とした顔つきのガディである。その軽やかな足どりはジャバと好対照をなしている。

「重いしうるせえし、革のほうがずっといいぜ。おいガディよう、何とかしてくれよ」自

PRIEST

隣り合わせの灰と青春 ③

by BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作
イラスト/茉弥純

Copyright © 1987
by Andrew Greenberg, Inc.
and Robert Woodhead, Inc.
Copyright © 1987
by Sir-Tech Software, Inc.
and ASCII Corporation
for Japanese translation.
Wizardry-Proving Grounds
of the Mad Overlord
is a copyrighted program
licensed to ASCII Corporation
by Sir-Tech Software, Inc.
Wizardry is a registered
trademark of
Sir-Tech Software, Inc.
All rights reserved.

前号までのあらすじ

高レベルの戦士でありながら一匹の怪物に手痛い打撃をこうむったのをきっかけに侍へとクラスチェンジしたスカルダ。しかし折悪しくパーティの魔法使いシルバーが蘇生不可能になり、結果として転職が大きな戦力の低下となってしまう。そこで一行は相反する性格である悪の魔導師バルカンを仲間に入れ、再びワードナの迷宮へと潜ることになったのだが……。

SCENE 4
§UPPER FLOOR§

大魔法使いワードナの地下迷宮。それは狂君主トレボーの城塞都市に嫌味なほど近い土地に、彼が侍てる魔法の力と配下の怪物どもを使って造り上げた巨大な大迷路だった。その規模は地下10層にも及び、迷宮の一部は城塞の真下にまでのびているといわれている。

そもそもトレボー王とワードナとの対立はこの大迷宮に端を発していた。数年前、トレボーの父王の代にこの領地を出て廻国修業を続けてきたというみすぼらしい老魔導師に棲み家を与えてやったのは、単にトレボーが戦に大勝し、勝利の美酒に酔いしれていたからにすぎなかった。しかしその老人――ワードナは許しが出たのをいいことに、戦勝の宴の行われていたわずか一週間のうちに大迷宮を完成させ、彼が事態に気づいた時には地下深く引きこもって二度と彼の召喚に応じようとしなくなったのである。

もともと気性が穏やかとは言い難いトレボーは当然この所業に激昂し、すぐさま直属の近衛隊を中心としたワードナ討伐隊を差し向けたのであるが、いつの間にやらワードナが魔界から呼び出した多数の怪物に行く手を阻まれて部隊は壊滅し、腹の虫のおさまらぬままとりあえず放っておくことにしていた。そこにきて例の魔法の魔除けの強奪事件である。

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかり。善。
- ジャバ……パーティの一員。盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ベリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……謎の魔法使い。悪。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- ワードナ……悪の大魔法使い。

Wizardry

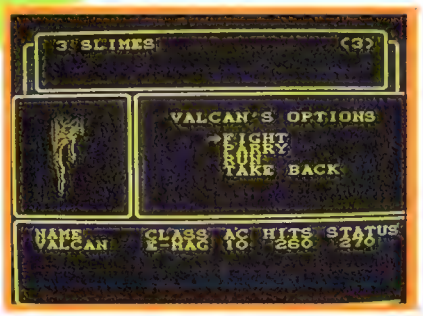
トレボーが常に肌身離さず持っていたこの魔除けこそ、彼を狂気の大君主として近隣諸国に恐れられる要因となったものだった。何しろ持っているだけで並の魔法の品の5倍の早さで傷を癒し、一度身につければ魔法障壁がいかなる攻撃をも防いでしまうというとてつもない代物である。この魔除けのある限りトレボー率いる軍隊が敗北するはずもなかった。

その魔除けを、寝ている隙に寝室に忍び込んだワードナに盗まれたのである。トレボーの怒りは頂点に達した。だが魔除けを失って守りに不安が出てきたところに、また近衛隊の精鋭たちを地下迷宮に放り込むわけにもいかない。

そこで流れ者の冒険者に地下迷宮を探索させ、首尾よく魔除けを取り戻した者は近衛隊に取り立てるとの触れが出されたのである。トレボーにしてみれば首ら迷宮に乗り込んでワードナをなます切りにしてやりたかったのだが、臣下たちに止められて仕方なくこの提案をのんだということらしかった。

とにかくもこの触れはトレボー城に大きな恩恵を持たらした。危険が大きくとも列国最強とうたわれるトレボー軍の近衛隊に入ることができるのである。各国から食い詰めた戦士や魔法使いたちが続々と流れてきて、この国の経済は一気に活性化した。

そうして二年余りの歳月が流れた。今だにワードナと渡り合えた者はいなかったが（誤ってワードナの部屋へ踏み込んでしまった者はいたが、戦闘になる前に慌ててテレポートしたという）、いよいよそれだけの実力を身につけた者たちが生まれつつあった。



暗く、湿った空気が淀んだ通路。ふと見回すと自分が何もない暗黒の世界にいるのではないかと錯覚するほど、全く光の存在しない地下道である。

時折、どこからか水滴のしたたり落ちるくぐもった音と、それに驚いてかカサコソと走り出す小動物の鳴き声が聞こえてくる。が、それ以外はほぼ静寂に包まれ、歩くともこの近くに生きた人間のいる気配はなかった。

ギイイイイ。

唐突に金具のきしむ音が鳴り響く。この通路のどこかにある扉を何者かが開いたらしい。

ボウッと、淡い黄色の光が暗闇の中に浮かび上がった。途端にかなりの数の小動物が走り去る音があちこちから聞こえた。どうやら予想以上に多数の生物が暗がりに身を潜めていたようである。

光源は、恐らく地下道に潜む獣の脂を燃料としている古びたランプだった。薄汚れた煙はもうもうと出てくるが、灯りとしては周囲を申し訳程度照らしているに過ぎず、むしろそれを手にしているものの姿を照らし上げる役割を果たしていた。

扉からランプをつき出して半身をのぞかせているその生物は、人間の成人の肩ほどの身長しかない小型の人型怪物であった。突き出た下顎に、口の端から上にはみ出した2本の牙。潰れた鼻に残忍かつ卑屈そうな濁った眼と、汚れきってベタベタとからみあった毛髪の間から伸びた牛のような角。見るからに品のないこのモンスターこそ、ワードナの迷宮の中でも最も地位の低い豚鬼である。

オークは通路に誰もいないのを確かめると、そろりそろりと全身を現した。身につけているのは、いったいいつから着続けているのか想像もつかないほど体液を吸いこんで黒ずんだ獣皮である。このオークにしてみればこれでも革鎧をつけているつもりなのだろう。

続いて同じような恰好のオークたちが3匹扉から出現した。それぞれ手には思い思いの武器を持ってはいるが、せいぜいが良くて錆びついた短剣、ひどいものは木を削っただけの槍である。

4匹はもう一度辺りを見回すと、ランプを持った者を中心に顔をつき合わせた。1匹がきんきんした声で喋り出す。

"今日は何か忘れてると思うんだがな、兄弟？"

リーダー格らしい、ランプを持ったオークがうなづいた。

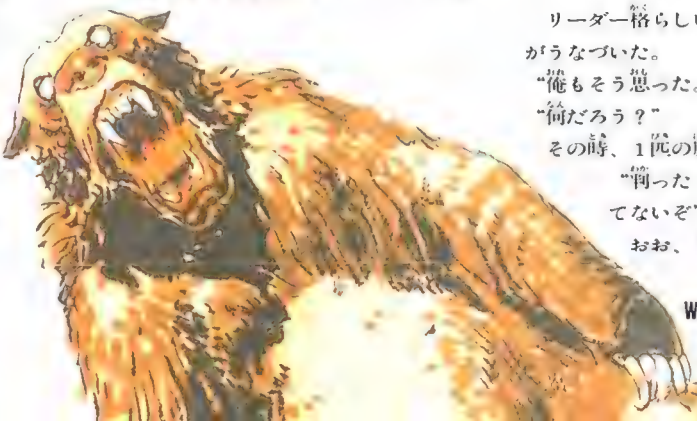
"俺もそう思った。何だっけ？"

"何だろう？"

その時、1匹の腹が大きな音をたてた。

"閃った！　今日はまだメシを食ってないぞ"

おお、と他のオークがどよめいた。



何が嬉しいのか理解し難いのだが、オークたちは足を踏み鳴らし、大きく開けた口から涎を垂らして喜んでいる。

“さすがは兄貴だ。危うく餓死するところだった”

“そういえば今日はずっと寝転んでたからなあ。ぐはははは……”

シッ！　とリーダーが歯を鳴らした。途端に全員が身動きをやめる。少し遅れて残響が消え失せた。

“バカ！　獲物が逃げたらどうする。代わりにお前を喰っちまうぞ、阿呆！”

1匹が指差されて縮こまった。

“兄弟、獲物ってえのは何だい？”

“そうだな。ドワーフは肉が固いしエルフは食いでがないし、小人どもはまずい。やっぱり人間がいいと思うが”

“人間！　そいつはいい！”

また全員足を踏み鳴らして騒ぎ出した。黄色の光がちらちらと揺れて、迷宮の壁に奇怪な影を映し出す。

そこへ通路の奥から1匹のオークが駆け寄ってきた。

“おい、人間が来るぞ。しかも肉のやわらかい女までいる！　お前らも手を貸せ”

“女!?　女！”

オークたちはもう狂ったように跳ね出した。この迷宮に入ってくる人間の女は珍しい。今日の食事を想像しただけで小躍りしてしまうのである。

“静かにしろといってるだろう！”

またもリーダー格がその場を静めた。とは言え自分だって飛び上がって喜んでいたのだから理不尽である。

“ところでその人間どもってのは新参者なんだろうな？”リーダーがやってきたオークに尋ねた。

“おうよ。結構いい鎧を着てやがったが、前を歩いてる二人の歩き方がぎこちねえ。ありゃ来たばかりの奴らだ”

“ようし、いくぞ兄弟ども！　今日は宴会ができるぞ”

おう！　と雄叫びが上がると同時に灯かりが吹き消された。暫くの間オークの足音が響いていたがやがてそれも消え、この一画に再び平静が訪れた。

迷宮の入口でバルカンと合流した一行は迷路に入るや否や隊列を整えて、地下4階へと向かう昇降装置へと向かっていた。パーティの先頭にジャバ、そしてスカルダ、ガディの順に前衛が続き、ベリアル、バルカン、サラが後についている。

相変わらずジャバは騒々しい音をまき散らしながら歩いていた。スカルダもまだ侍という職業に不慣れなせいか、いつも着ているはずの鎧が身体にしっくりとは馴染んでこない。

この二人に限って見れば、まるで今日初めて迷宮に足を踏み入れたパーティのようである。ただし少しでも注意深い者が見れば、その後ろをまるで体重がないかのようなしなやかさで歩くガディの姿に気がついたであろう。それはマスターレベルと呼ばれるレベル13に到達した戦士にしかできない身のこなしであった。

「おーい、ジャバよう。もう少し静かにしないと怪物どもが集まってくるんじゃないかなあ」呑気な口調でガディが言う。

「そんなこたあ言われなくたって判ってらあ。だけど無理なもんは無理だろうが。大体すぐ慣れるっていったのはお前だぜ。全然慣れる気配もねえじゃねえか」

「素質がないのかなあ」

考えてみればかなり酷い言い草ではあるが、ガディのような話し方で言われては怒りようもない。

「ちぇっ。今に見てろってんだ」ジャバは多少不貞腐りながらも、なるべく鎧の金具をぶつけないように工夫し始めた。

この二人にはさまれたスカルダはというと、初めて迷宮を探索した時と同じような頼りなさを感じて戸惑っていた。想像以上に暗い場所での五感の冴えが鈍い。

——こいつは、まずいな。

先程の隊列決定で、四番手に下がれというベリアルのすすめがあったものの、呪文使用の効率を考えてあえて二番手についたのだった。しかし今の状態ではベリアルに直接攻撃を任せた方が確実とも思える。判断の難しいところであった。

通常僧侶であるベリアルが攻撃呪文を唱えることは稀である。侍とはいえレベル1のスカルダが下手に剣を振り回すより、ベリアルが棍棒で攻撃するのが妥当だった。

だが、このパーティにはベリアル以外治療の呪文を使える者がいない。もしベリアルが麻痺させられたり、命を落とした場合はお手上げである。

ふいにガディがスカルダのかぶとの後ろを軽くこづいた。

「まだ悩んでるみたいだね。不安かい？」

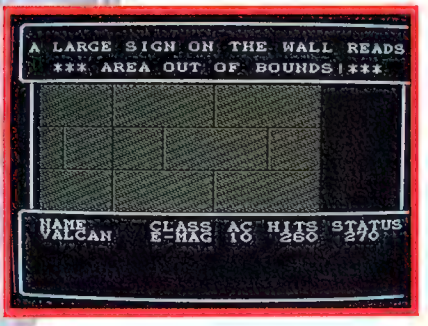
「ああ」彼は肩をすくめてみせた。

「つい一昨日までは裸で歩いたって平気だと思ってた地下1階ですらこのザマだ。全くお恥かしい話さ」

「ま、それでも体力があるだけ新参者とは違うよ。武装度だっていつも通りだし、戦闘は俺らに任しといてもらっても大丈夫」

そう言ってガディは先頭を行くジャバをあごでさした。

「見なよ。ついさっきまであんなにうるさく鎧を鳴らしてたくせに、もう鉄の重さに慣れ始めてる。忍者ってのは大したもんだよ」



6人の連帯に漂う漆黒の隙間風

見ると、まだ「ちきしょう」だの「重てえ」だのとこぼしているものの、ジャバの身体の運びは熟練の戦士のようになってきている。魔法の力で忍者になったからというだけでなく、盗賊としてのジャバにかなりの天分があったからなのだろう。

「あの様子なら長剣もうまく使いこなせるはずさ。気楽に行こうよ、リーダー」

「そうだな。今日は頼りにさせてもらおう」

「その代わりちゃんと作戦は立ててくれよ」

答えるかわりにスカルダは親指を立て、かぶとの面頬をおろした。

最後尾のサラは、ベリアルに解毒の呪文をかけてもらったおかげで血液中のアルコールが全て抜け、ようやく素面に戻っていた。

彼女は酒が入ると無茶をしでかすが、普段は至ってまともな女魔法使いである。魔法を使う者特有の高い知能によって、サラはすぐ目の前を歩いているバルカンを分析していた。

彼女にしてみれば今朝初めて出会った男である。昨夜ギルガメッシュの酒場の入口で会っているのかも知れないのだが、あの時は泥酔していて誰が通ったかなどまるで覚えていなかった。

全身を黒く染めたローブで身を包み、ともすればこの地底の暗闇に溶け込んでしまいそうな風体のバルカンは、ダンジョンの入口でスカルダと、言二言会話をしたきり、まだ一度も口を開いていない。魔法使いというより、暗がりから音もなく忍びよるあのいやらしいナイトストーカーのような不気味さである。

―バルカン、ねえ。

サラはここ数年のうちに耳にした強力な魔法使いたちの名前を思い出そうとしていた。全ての魔法をマスターしたほどの者であれば必ずと言っていいくらい魔法使い同士の間で噂になる。彼女はもし一度でも聞いたことなら決して忘れない自信があったし、高位魔導師の数は多くはなかった。

まず有名なところでワードナ。それからトレボーの側近グレブナーグに、北の山に住む伝説的なウィザード・ハスターガル、あたしの師匠のバジルってとこね。それ以外はシルバーぐらいのものだったかしら。あたしを含めてこの城塞にいるメイジはまだ呪文を覚え切った者はいないはずだし、トレボー親衛隊はほとんど戦士だから魔法の使える者といえば何人かの侍ぐらい。それもせいぜい4レベル程度と聞いてるわ。確かナックラーヴっていうトレボーの片腕の侍がいたけど、討伐隊の指揮をしてて命を落としたそうだし……。この男、一体何者かしら。どこか遠方の国から流れてきたとしか思えないわ。

その時、バルカンが足を止めてつぶやいた。

「敵だ……」

サラはその肩越しに、前方からオークの一団が突進してくるのを見た。

Wizardry

華麗な筆致でつづる剣と魔法の迷宮世界

小説ウィザードリィ

隣り合わせの灰と青春 4

BY BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作　イラスト／来弥純・品川るみ

FROST GIANT

前号までのあらすじ

戦士として高い能力を身につけながらも、侍として一からやり直すべく転職の道を選んだスカルダ。だが、折悪しく仲間の魔法使いが消滅してしまい、戦力の補充のため悪の術者バルカンをパーティに参入させる派目となった。不安を残しながらも一行はワードナの地下迷宮へと足を踏み入れる。そこに待っていたのは腹を空かせた間抜けなオークの一団であった。

SCENE 5

§ UPPER FLOOR 2

キィ――ッ。

ガラスを引っ掻く音に似た、カン高い不快な雄叫びが暗い通路中に鳴り響いた。

それと同時に、5匹のオークが突っ込んでくる。

"女、女だ"

"人間だ。ご、ごちそうだぞ"

もはやこのオークどもは目の前のパーティで空腹を満たすことしか考えていなかった。稚拙な待伏せではあったが、相手は驚いている様子で、奇襲は成功である。この最初の一切りで前衛の戦士たちを片付けてしまえば、あとの魔法使いなどすぐ斬り殺せると連中は踏んでいた。

キキッ。

木の棍を持ったオークがまず先頭の男に襲いかかった。戦いに不慣れそうな男はその攻撃をまともにくらったようである。

続いて二匹のオークが二番手を歩く男に切りかかる。いずれも手ごたえがあったらしくキィキィと声をあげた。

このオークの集団のリーダーも、残りの一匹と前衛の最後の戦士に突進していた。

――前の二人は死んだ。こいつを殺せばあとは坊主と体力のない魔法使いだけだ。久し振りに人間の女が喰えそう。ぐはは。

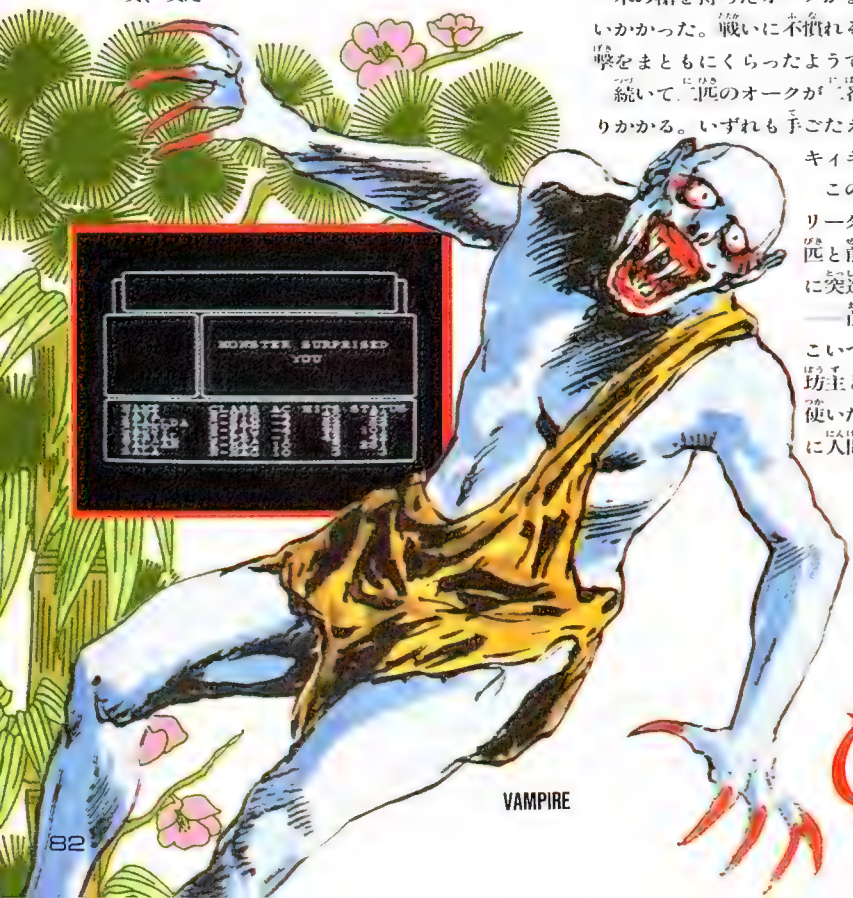
勝手な想像で涎を振りまきながらオーク・リーダーは戦士の肩口にある鎧の隙間に短剣を振りおろした。

血しぶきがあがり、手に反動が伝わってくる。手ごたえからして、かなりの傷を負わせた筈である。間髪を入れずもう一匹が棍棒で男を殴りつけた。

死んだかな？

頭を殴打されてうつむき加減に仁王立ちした戦士の生死を確かめるため、リーダーは下から覗きこんだ。

頭に魔法の品らしいリングをつけたその男は眼を見開いたまま身じろぎひとつしない。



VAMPIRE

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかりだ。善。
- ジャバ……パーティの一員。もとは盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ベリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……シルバー亡きあとのパーティの一員。謎の魔法使いだ。悪。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- ワードナ……悪の大魔法使い。迷宮の地下10階に住まうといわれている。

Wizardry

ORC

頭が割れたらしく額にだらりと赤い血が流れてきた

死んだ

満足そうにうなずくと、オークは残りの後衛たちを襲うべく走り出そうとした。と、その時。

ぐぎゃっ

後方、つまりやっつけた戦士たちの方向で短い叫び声があがった。リーダーが慌てて振り返る。

そこに見えたのは全身の無数の傷から鮮血を噴き出している仲間の一匹だった。いや、仲間といってもこのリーダーの目にはそうは映らなかっただろう。それはもうオークという原形をとどめてはいなかった。

オークの屍が倒れた。べちゃっと、水を含んだぼろ雑布を床に投げつけたような音が響き、醜らしき部分が転げる。

“あっ、あにき見貴っ”

今しがた一緒に戦士を片付けた一匹がすぐ横で叫んだ　まだ良く状況が呑み込めないリーダーは、はっとそちらに首を向ける。

仲間の横たえた姿が目に入ったのは一瞬だった。次の瞬間そのオークは地面に吸い込まれるかの如く潰れ、肉片と化した。凄まじい衝撃音が通路の空気を揺るがす。

殺したとばかり思っていた戦士　ガディが、剣を一振りしたのである。鍛え上げられた肉体から生み出された一撃は、脂だらけのオークの身体を斬るというより破砕したのだった

「ああ痛え。奇襲とは参ったね」

そう呟きながらガディは剣をもう一振りし、べったりとついたオークの血糊を払った。そしてゆっくりと、その場に凝固しているオーク・リーダーに向き直った。

「片目の傷はお前だっけな」

ギキッ。

声にならない叫びをあげてオーク・リーダーは後ずさりする。この頭の弱いオークももういい加減自分たちがとんでもないパーティを襲ってしまったことに気がついていた

一匹のオークに攻撃を受けたスカルダは、戦士の時の半分以下の働きしかしない肉体に不満を感じながらも、侍になって初めての戦いに興奮する自分を抑えるのに苦労していた

侍は“魂”で敵を斬る

ジャバとガディの戦いぶりを見て思い出したのは、転職の道場でスカルダに侍の極意を授けてくれたサムライ・マスターの言葉であった

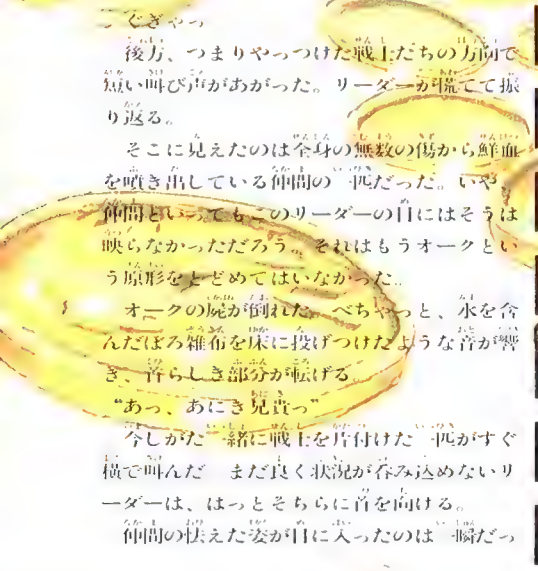
うす寒い、板張りの道場でその言葉を聞いた時、スカルダは思わず苦笑しそうになった。

「笑い事ではないぞ、スカルダ。これこそ侍が侍たる所以なのだ。」

年老いてはいるが全身から、特にその眼から精気をみなぎらせたエルフのサムライ・マスターはそうスカルダをたしなめると、正座して向かいあう彼に剣を

SPIRIT

FLACK



抜き出した

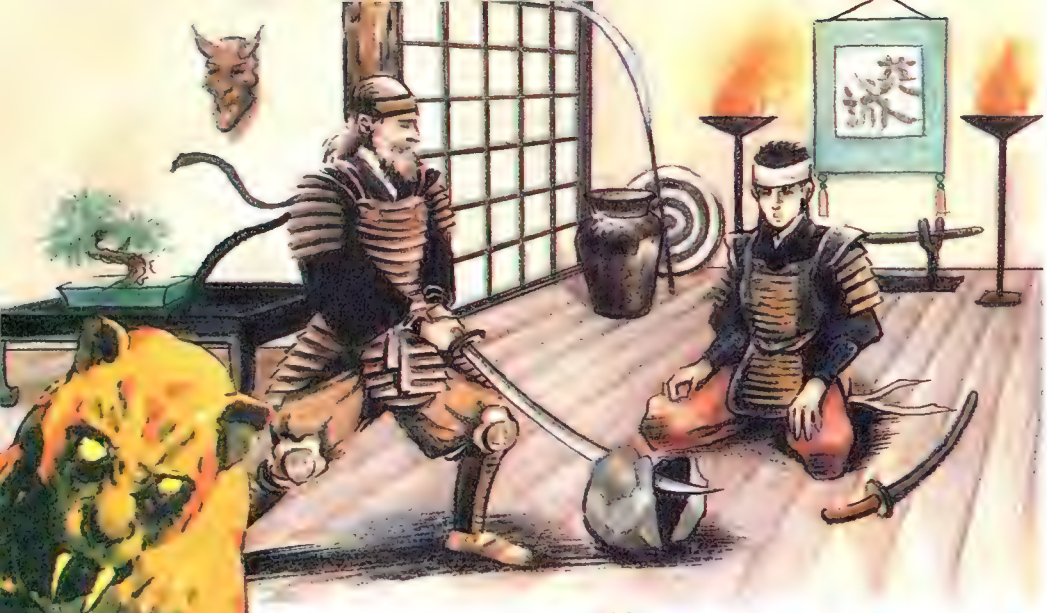
それはスカルダが今まで使ってきた剣のどれよりも細い、ゆるやかに湾曲した片刃の剣であった

「この剣は？」

「面白い形だろう。日本刀といってな、侍の能力を最大限に引き出す剣なのだ」

「これが、ですか？」

スカルダは半信半疑で剣を手に取ってみた刀身の細さの割には重量感があるが、通常の剣とは比べものにならない軽さである。短剣並みであった。



侍スカルダに、いざ与えられん。妖刀村正の御加護を、魂の力を。

「美しいものですが破壊力は無さそうだ　何故これが最高の武器なのです？　鎧に触れただけで折れちまいそうな信頼りない」

「剣の重さと力で斬る。それが戦士の剣技だということをそなたは良く解っておるな？　だが侍はそうではない。侍は剣を通じて放出される“気”、すなわち魂でものを断ち切るのだ」

サムライ・マスターは立ち上がると、道場の隅に置かれた人の頭大の石を軽々とスカルダの前まで運んできた。

「そなたにこの石を斬ることができるかな？」

スカルダは光沢を帯びた固そうな石をまじまじと見つめた

「いつも使う剣なら砕くことはできます。しかし剣の刃はつぶれて使いものにならなくなるでしょうよ。ましてこんな剣では……」

「良く見ておけ」

そう言って彼はスカルダから刀を受け取ると、ついと上段に構えた。

その時、スカルダは急に耳鳴りを覚えた。道場の空気が張りつめてきている　その圧迫感は明らかにサムライ・マスターの発するものだった。数秒後、緊張が頂点に達すると同時に、サムライ・マスターの口から鋭い呼気がもれる。

やっ

スカルダには彼の振り下ろす刀が白く光ったように見えた。閃光が石の上を稲妻のように疾る

石は音もなく、ゆっくりと左右に割れて倒れた

サムライ・マスターが刀を鞘に収める音がするまで、スカルダは放心したように二つになった石を見つめていた

石はまるで自らの意志で割れたかの如く、静かに転がっている。切り口は磨きあげたように滑らかな、完璧な平面であった。また、直接床に置いたにもかかわらず、石の下の床には傷一つついてはいない

もしスカルダが同様に斬りつけていたら、石は無数の石片になって飛び散り、床にも大きな損傷を与えていただろう

「凄い……これが“気”なのですか？」彼は石の切断面を指でなぞりながら呟いた。

「そうだ　この刀を使いこなす故に侍は最強の戦闘能力を持つと言われる　それに慣れてくれれば」サムライ・マスターは壁を指差した

壁も床と同じく板張りで、スカルダには読めない奇妙な字の書かれた巻物や白い鬼の面が飾ってある

「こんなこともできる」

彼はいきなり刀を抜き払い、再び鞘に戻した。この間実にまばたき程度の時間しか要していない

と、唐突に鬼の面　一般若の面が真っ二つに裂けた　一瞬遅れて面を結っていた紐が切れ、床に落ちた面が乾いた音をたてる

スカルダは息を呑んだ。距離にして６ｍ以上も離れた位置から、このサムライ・マスターは面を断ち割ったのだ

「これは居合といってな　まさに侍の技の集大成といえるものだ　そうそう簡単にできるようにはなれんぞ　まずは修業だ」

それから日没近くまで、スカルダは侍として必要な筋肉の鍛練と精神の修養を休みなしに続けたのだった

転職に要する日数がわずか一日というのはいかにも短い気がするが、実際はそうではな

い。８つの職業それぞれに設けられた道場は全て特殊な魔法の力場の中にあり、ここでは時間の進み方が極端に遅くなる。つまり短時間ではあっても実質的に何ヶ月分もの修業を積むことが可能となるのである。

従って道場内で訓練をする者にとってはその一日が異常に長い。精神的・肉体的に転職の資格を満たしていない者では、とてもそのクラスの過酷な修業が長時間連続するのに耐えられないのである。転職について厳しい能力制限があるのも仕方のないことだった。

そして、転職を遂げた者は例外なくその急激な肉体の変化によって四、五歳は老けてしまう。もし高齢者が転職したとすればそのまま老衰死することもあるのだ。能力の低下に加えてこのデメリットがあるため、女はもちろん男でも転職を希望する者は少なかった。

それでもスカルダがあえて侍への道を選んだのは、サムライ・マスターの見せた圧倒的な剣技を身につけるために他ならなかった。

今、スカルダは道場で幾度となく繰り返した素振りを思い浮かべながら、自分を襲ったオークの一匹に剣先を向けた。

均一な速度で大きく息を吸い込み、ためる。心の内から雑念を追い払うべく、剣の切っ先に視点を置く。当然その先には仕留めた侍の相手に剣を向けられて仰天しているオークがいるのだが、スカルダの目には入っていない。

心が静まるにつれて、肉体の奥底からじわじわと力が張ってきた。はじめに両足、次に腹部から胸筋、両腕そして首筋までがその力で満たされる。

しゅっ。

鋭い擦過音を発しつつ、スカルダは全てのエネルギーを剣に集中させ、振り下ろした。一瞬、目の前が真っ白になる。剣から己の“気”がほとばしったのだ。剣を構えてから約一秒弱である。

網膜に焼きついた白光が除々に薄れていく。その時スカルダは時間が普段の10分の１程の速さで進んでいるように思えた。見えるもの全てが緩慢に動いているのだ。

表情の凍りついたオークが身体の中央から裂けて、ゆっくりと左右に広がりながら倒れていく。それまでオークがいた空間は、切断面から噴き上がった血煙がどす黒い霧となって次第にその濃度を増していった。

それらがスローモーに見えるのは、“気”の圧縮によって一時的にスカルダの感覚が研ぎ澄まされたからだった。

急激に時間感覚が元に戻った。左右に別れたオークの右半身と左半身がほぼ同時に石の床に叩きつけられる。上腕足の裏を関節のようにくっつけて、そのオークの屍はきれいに開がった。そこに噴出した血液が盛大に降り注ぐ。

斬れた。

彼は心の中で快哉を叫んでいた。動きが鈍く外皮も軟らかい最低の怪物が相手とはいえ、侍の極意である“気”で斬り殺せたのである。

その場にはこれで都合三体のオークの死体が転がっていた。

戦士のガディによってぐずぐずの肉片に変えられたものと、侍のスカルダにひらきにされたもの。そして最初に全身を切り裂かれていた屍。これはもちろん忍者としては初陣のジャバの仕業である。何と言っても元盗賊、手が早い。

あっという間に二匹になったオークは前衛三人に取り囲まれた形で、金縛りにあったようにたちすくんでいた。恐怖のあまり身動きが取れないのである。

オークは下等だが、スライムのように死を恐れるだけの知能すらないモンスターとは異なる。勝ち目のない戦いを避ける分別は持っていた。

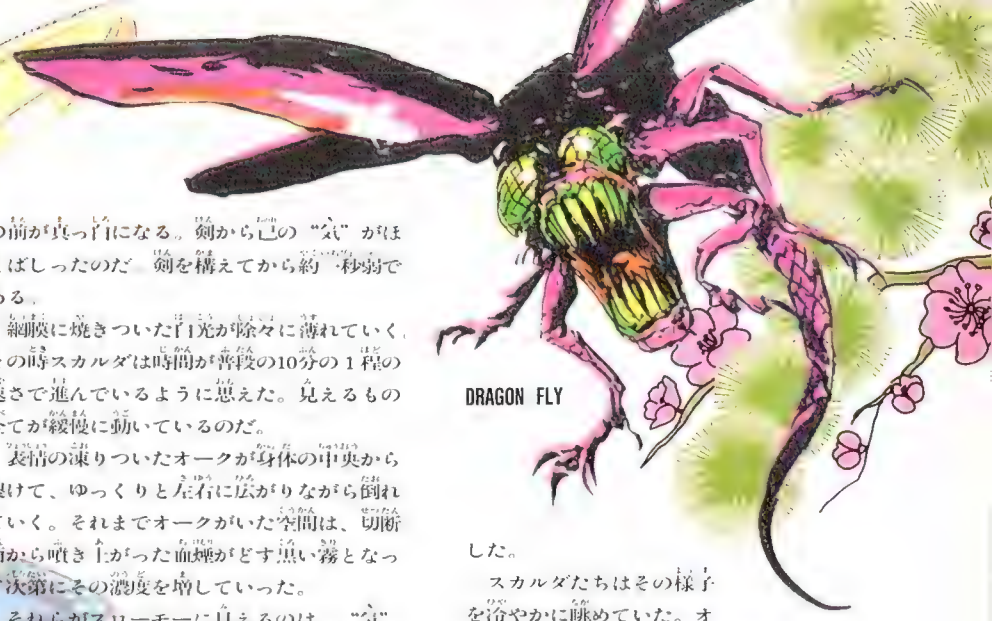
残っているのはオーク・リーダーと、最初にスカルダたちを襲おうと持ちかけてきた奴である。二匹は背中合わせになって、震えながら悲鳴を上げていた。

“何が新参者だ！　こいつら強いぞ”リーダーがもう一匹を責める。

“あ、謝ってみよう。もしかして許してくれるかも……”

“そそそ、そうだな、侍の連中ならきっと”

二匹は武器を放り出すと、その場にひれ伏した。



スカルダたちはその様子を冷やかに眺めていた。オークたちの言葉は理解できないが、降伏したのは明らかである。いつもなら善のパーティである彼らは戦意のないモンスターに戦いを仕掛けたりはしない。

だが、今の戦闘ではオークが先に襲ってきたのである。肩に傷を負わされたガディはかなり腹を立てていた。

「どうする、スカルダ。こいつら戦う気がねえみたいだけどよ」ジャバがオークの背を足でこずきながら尋ねた。

「俺たちはともかく、痛い目にあったガディは納得がいかんだろうな」とスカルダ。

「もちろん」ガディは今にも切りつけそうな雰囲気で剣をもて遊んでいる。

「どうせディオスでも充分治せる傷だろう。すぐに唱えてやるから許してやらんか。無抵抗の者を殺すのは性に合わん」ベリアルがガディをなだめる。善の僧侶だけあって、己の戒律に反する殺生は毛嫌いしているのである。

スカルダが剣を収めた。

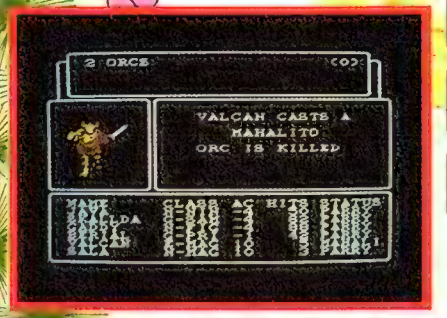
「俺もベリアルと同意見だな。オークなんぞ殺しても足しにはならないだろう。後味が悪いだけだ」

こうなるとガディもこだわる方ではない。オーク・リーダーの傍にしゃがみこんで、まだひれ伏したままの頭を軽く殴りつ

けると、
「運が良かったぞ、おまえ」
と喋いて立ち上がった。
どうやらそれだけで逃がしてくれそうだと気がついた二匹は、スカルダたちの気嫌をうかがうようにゆっくり立ち上がると、前方の暗闇の中へ走り出そうとした。
その瞬間。
突如としてオレンジ色の炎の渦がオークたちの四方に巻き起こった。

マハリト!?

それは魔法使いの大炎の呪文・マハリトに間違いなかった。炎の中で苦悶する二匹のオークの影が見える。その影が崩れ落ちたとたん、瞬時に魔法の猛火も消え失せた。



「振り返ったスカルダの目に入ったのは、氷のように冷たい眼だけをのぞかせたバルカンの姿だった。

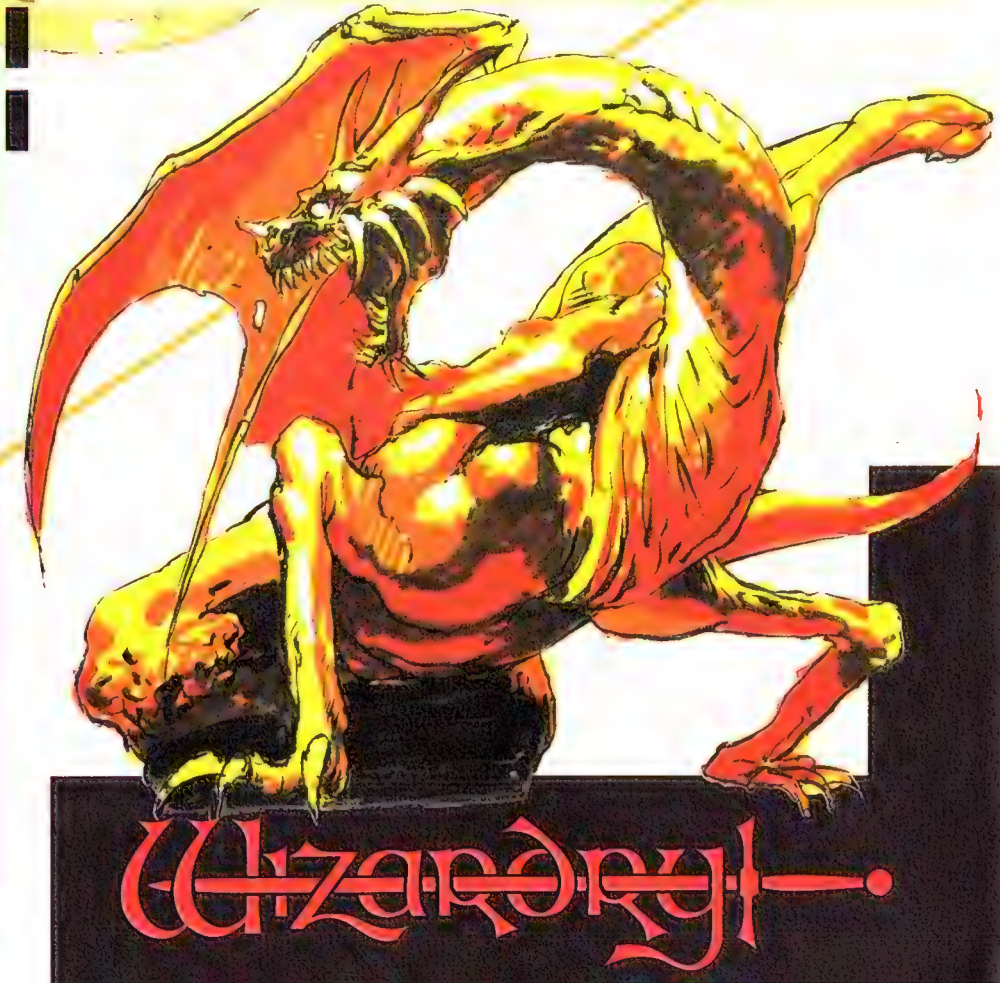
●御感想をお待ちします。

小説ウィザードリー「隣り合わせの灰と青春」を御愛読いただき、ありがとうございます。
皆さまの御声援をいただき、同小説も回を重ねてまいりました。より一層内容を充実させるため広く御意見、御感想をお待ちします。
ファミコン必勝本編集部小説感想係まで。

▲福岡県・杉本泉さんより

筆者あとがき

あとがきをお待かねの皆さま、久しぶりに戻ってまいりました
いやはや、このウィザードリィ小説もはや四回目。第一回がギルガメッシュの酒場だけで終ってしまい、加えて第二回も冒険者の宿と町外れでおしまいと、かなり過激にゆっくりしたストーリー展開となっちゃってたけど、今回でようやく怪物との戦いまでこぎつけたってとこね。といってもオークなんて雑魚の中のザコですが。
しっかしいつの間にか毎号連載になっちゃって、書き手としてはこれでなかなか大変なのだ。ストーリーの骨子はもう完結まで考えてあるし、その点に関しては全然問題はないでもそれが毎回限られた文章量で区切られるとなると話は別になってくる。つまり、その回のストーリー(400字詰原稿用紙で15、6枚程度)の中で必ず見せ場ってものを作ってかなきゃならないわけ　作ってないって(笑)。
ま、見せ場とはいかないまでも、中途半端な切れ方をしないように話を進めなきゃならないから、どうしても展開が遅くなるんだよねー。ということですので今回初めて読む人、まだほとんど話は先に行ってません。今からでも遅くないから、どーせ話がわかんねーやなんていわないで読んどくように
ところで今回は珍しく主人公・スカルダが目立ったけど、いかがなもんでしょう。何せ前回までほとんど主役らしいことをしなかったもんだから、ジャバやサラといったアクの強いキャラばっかりが人気者になっちゃってスカルダには以顔絵ひとつ送られてこない
こんな可哀想な主人公もなかなかいるもんじゃありませんぜ。あんまり不幸なんで活躍させたものの、次回あたりはま〜た他のキャラのほうが目立ちそうな気配。リーダーってのはまとめ役だからしょうがないかな、うん
いよいよ次は迷宮の中層へ……辿り着けるか否か、乞う御期待!
(ベニー松山)



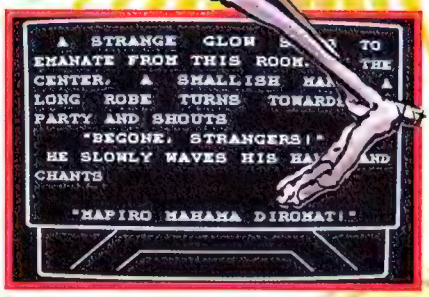
華麗な筆致でつづる剣と魔法の迷宮世界

小説ウィザードリィ

隣り会わせの灰と青春 5

BY BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作　イラスト／宋弥純・品川るみ



前号までのあらすじ

戦士として卓越した能力を身につけながらもより強力な破壊力を求めて侍に転職したスカルダ。先日の戦いで失った魔法使いの穴を謎の男・バルカンで埋め、転職で失った戦いのカンを取り戻すべくスカルダたち一行はワードナの大迷宮の最下層を目指す。まずは奇襲をかけてきたオークの集団を一蹴し、圧倒的な戦闘力を見せつけたスカルダだったが、バルカンが降伏したオークを殺したことでパーティ内の緊張は一気に高まった。

SCENE6

§ UPPER FLOOR 3 §

パーティ内は不穏な空気に包まれていた。

夜明けとともに宿を出、町外れの入口からこの迷宮に入ってからまだ一時間と経ってはいない。しかも地下1階である。スカルダは転職直後とはいえ、あとはレベル12以上に認定された面々の揃ったパーティが苦労するような怪物の棲む深さではない。

しかし早くも、この探索の行く手に不吉な影が落ち始めていた。

原因は無論、バルカンが勝手にオークを殺したことにあった。降伏したオーク二匹に背後から大炎の呪文をかけたのである。

マハリトという呪文は魔法使いが最初に覚える多数のモンスターへの攻撃スペルで、中規模の範囲に炎の渦を巻き起こす。威力はサラが酒場で唱えたハリトの3倍程度と大したものではないが、オークごときを焼き払うには充分過ぎる呪文だった。

この世界に生活する者たちは、大きく分けて二つの戒律を持っている。つまり人道を重んじ、たとえ怪物相手であっても情をもって接する善と、自己中心的で利益のためなら一切の感情を捨て去ることのできる悪である。

この善と悪というものはあくまで行動の規範となる戒律であって、その存在自体を示しているものではない。例えば悪の性格である人間やドワーフでも、悪魔や竜どもに比べたらずっと善に近いのである。

しかしこの戒律が相反するものであることは事実で、通常善の者と悪の者はお互いに関り合いになろうとはしない。あまりにも考え方が違うために、酒場で同じ卓についただけでも争いになるのだ。まして一緒にパーティを組んで迷宮に入るなど、余程の事情がない限りありえなかった。何しろ怪物との戦いにおいては両者とも最も厳しい戒律に縛られているのである。

怪物の中にも、ワードナ直属の護衛集団である最下層の連中を除いては、冒険者たちに友好的な態度をとる者がいる。このモンスターたちが、実は善と悪の対立を決定的なものにしていた。というのも、善の者には敵対しない者は化物であっても決して戦いを仕掛けてはいけないという掟があり、逆に悪の者にはたとえスライムが相手でも逃がしてはなら

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかりだ。善。
- ジャパ……パーティの一員。もとは盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- カディ……レベル13の戦士。中立。
- ペリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……シルバー亡きあとのパーティの一員。謎の魔法使いだ。悪。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- ワードナ……悪の大魔法使い。迷宮の地下10階に住まうといわれている。

Wizardry

ない決まりがある。もし一つのパーティに善と悪が混在していたなら、どちらかが戒律を破らねばならなかった。

だからこそパーティは善なら善、悪なら悪のメンバーか、または戒律にとらわれない者たち――中立の者を加えて構成されているのである。

スカルダとベリアルは善、バルカンは悪。遅かれ早かれ、この問題は浮かび上がってきて当然のものだった。

「酷いな、こりゃ」

まだブスブスとくすぶっているオークの残骸をつま先でいじりながらガディが呟いた。中立の彼ですら、いきなり背後から焼き殺すというバルカンのやり口に抵抗を感じているらしい。ガディにしては珍しく、口調に激しい非難と嫌悪がにじみ出ている。

ましてや善のスカルダ、ベリアルにとって、騙し討ちに等しいこの行為の片棒を担がされたことは屈辱であった。特にリーダーという立場を踏みにじられたスカルダの怒りは生半可なものではない。

「バルカン、貴様どういうつもりだ」スカルダの声はまるで抑揚がなかった。爆発しそうな感情を無理矢理こらえているためである。

「返答次第じゃただで済ますわけにはいかん」

バルカンは何も言わなかった。ただ眼だけがあざ笑うように妖しく光る。

スカルダがギリッと奥歯を軋らせた。片手がゆっくりと剣の柄に伸びる。もしその場にいたとしたら全身が総毛立つような、ゾッとする殺気が発散されている。

ダンジョン内での仲間割れは最も危険な行為である。もともとパーティというのは同じ程度の力を持つ者の集団であるから、争いになってもすぐに結着がつくものではない。またパーティの最大の利点であるコンビネーションがその間完全に崩れてしまうことになり、そこを怪物に襲われた場合通常よりはるかに不利な条件で戦わねばならないのだ。

リーダーである以上、スカルダもそんなことは百も承知していた。しかしここまで誇りを傷つけられ、馬鹿にされたとあっては笑って自分から折れるわけにはいかなかった。転職したとはいえ、精神的にはまだ血気盛んな18の青年なのである。

空気が張りつめてくる。かつてスカルダが転職の道場で体験した耳鳴りを、その場にいる全員が感じ取っていた。スカルダの内部で〝気〟が凝縮されているのだ。

くっくっくっくっ……。

突如バルカンがくぐもった笑い声を漏らした。気をそがれてスカルダの緊張が弱まる。

「善の戒律にとらわれた者の何と愚かなことよ。たかがオークを一匹片付けたくらいで仲間割れとはな」地の底から沸き上がるようなしゃがれ声が響き渡る。「お前のようなひよっこ侍がこの儂と渡り合えると思っていることだけでもおかしくてしょうがないわ」

「それが答えか」スカルダは無造作に剣を引き抜いた。今しがたオークを屠ったにもかかわらず血の一滴もついてない剣が、全員の携帯している小型ランプの灯りを反射して鈍く光る。

睨み合う二人の間の空気がそれまでとは比較にならない程猛烈に張りつめた。近づいただけでも火傷を負いそうな緊迫感である。

パーティの誰もがこの戦いを止めなければまずいと感じていた。片や全ての魔道を極めた魔術師、そしてもう一人が転職したてとはいえ名剣カシナートを手にした侍。どちらかが死なない限り結着のつきそうにない勝負である。

接近戦だけに常識的にはスカルダが有利である。魔法使いの身につけられるのは布製のローブだけであり、また体力も戦士や侍に比べて格段に少ない。侍の一撃は容易にローブの下に潜り込み、その肉体を深く切り裂くだろう。

しかしスカルダはまだ侍に慣れきっておらず、敏捷性がかなり低下している。その点バルカンはオークに呪文をかけた手並を見ても

恐ろしい素速さで魔法が唱えられるらしい。もし先に爆炎の呪文を使われたなら、立場は一気に逆転するだろう。

ガディとジャバが目くばせをしあって、二人を止めに入ろうとしたその時、バルカンがローブの陰から黒い手袋に包まれた両手をのぞかせた。それを胸の前で交叉させ、指で複雑な印を結び始める。

——ティルトウェイト!

サラはこれと同じ動作を、シルバーが呪文を使う時に見たことがあった。魔法使いも僧侶も、高位魔法になればなるほどそれに伴なうアクションも多くなる。バルカンが結んだ印は明らかに最高レベルであるレベル7の呪文用であった。

スカルダも相手が何を唱えようとしているのか気がついていた。この世界で知られている魔法の中で最も強力な攻撃呪文ティルトウェイト。迷宮に棲む怪物で呪文に抵抗力のない者はほぼ確実に絶命するという凄まじい威力で、マハリトよりはるかに広範囲に爆発の衝撃波と炎をまき散らす殺戮の呪文である。まともにくらうとスカルダとて生き残る自信がなかった。

その時いきなり背後からガディが組みついてきた。精神を全てバルカンに集中させていたために、気配を感じられなかったのだ。

見るとバルカンも同じようにジャバに押さえつけられている。

「やめなさいよ二人とも! こんなところで殺し合いだなんて馬鹿げてるわよ」

サラも間に割って入る。しかし、ジャバに組みつかれながらもバルカンは構えを解こうとしない。

「仕掛けてきたのはその愚か者の方よ。そして死ぬのもな。お前もどかぬと同じ運命を辿ることになるぞ」

バルカンがぐっと両腕に力をこめる。と、黒いローブが彼を中心に放射状になびき、その下から巻き起こった突風が必死に邪魔をしようとするジャバを弾き飛ばした。爆炎が呼び出される直前の魔法風である。

「危ねえ! みんな逃げろ」後ろに倒れながらジャバが絶叫した。このままではスカルダとガディ、そしてサラは魔法の直撃をまぬがれない。

もうだめか、と目を閉じた瞬間、ベリアルの怒声が鳴り渡った。

「どけ、バルカン。敵だぞ」

予想もしなかった言葉にバルカンがひるむ。ベリアルの視線を追って振り向くと、いつの間に忍び寄ったのか、四匹のアンデッドコボルトが不死の怪物特有のぎくしゃくした動きで襲いかかろうとしていた。

不死の怪物 アンデッドモンスターとは、一度死んだ生物を蘇生させるのではなく、邪悪な魔法の力で擬似生命を吹き込んで誕生させた魔物である。ほとんどの生物はこうしてアンデッドにすることができ、術者の能力が高ければ巨大な竜の屍をも、己の意志で動くゾンビとなせるという。

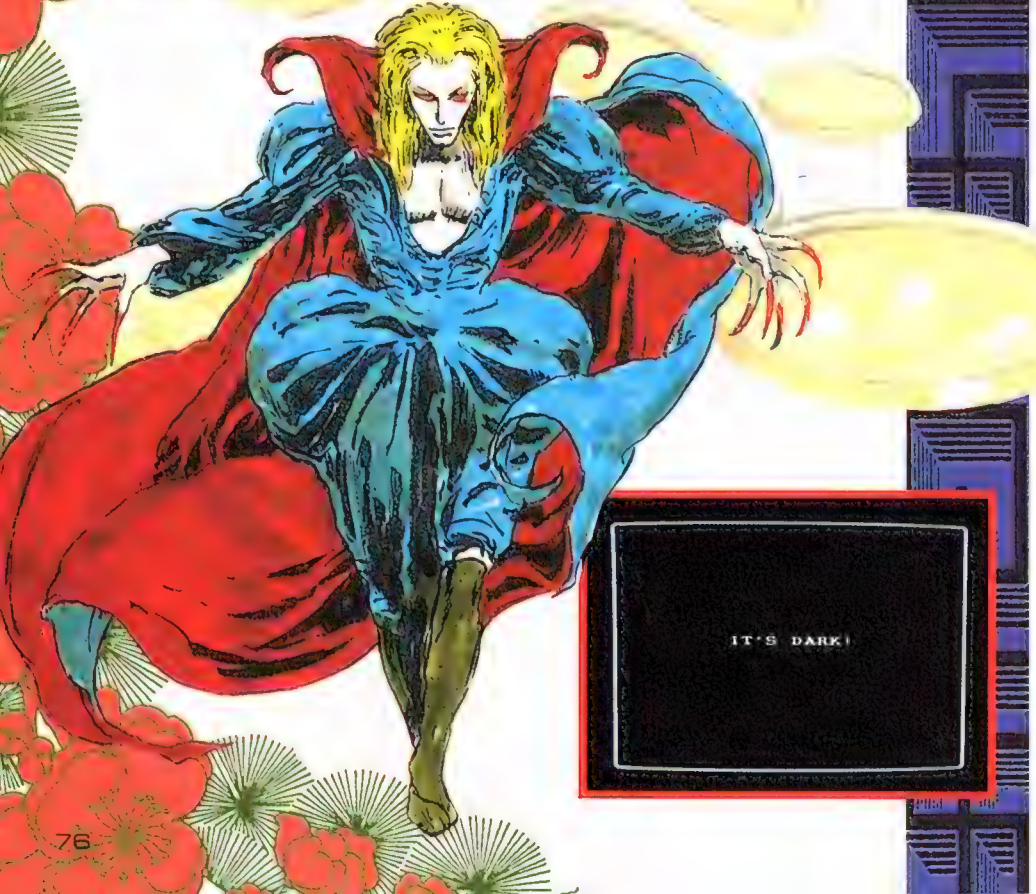
アンデッドとして蘇った怪物は実抵以前よりも高い攻撃力を備え、呪文にもある程度の抵抗を持つようになる。とだけ言うと生命あるモンスターよりアンデッドの方が有利という印象を受けるが実際はそうではない。僧侶の能力を持つ者なら誰でも、このアンデッドの邪悪な呪いを断ち切って元の死体に戻すことができるのだ。これがディスペルと呼ばれる能力である。

出現したアンデッドコボルドは、不死の怪物の中でも最も呪いの軽いモンスターである。ベリアルほどの僧侶ならば、簡単に成仏させてやることができる。

ベリアルは敵との直線上にいるバルカンを無視して、ディスペルの動作を始めた。魔法攻撃と違ってディスペルは、生きている者に対しては何ら影響のないものだからだ。

左手を開いて突き出し、右手でゆっくりと十字を切る。左の手の平がやわらかい白色光で満たされてきた。目を閉じる瞬間、バルカンが転がるように横へ避けるのが見えた。

「神よ。我らが創造の神よ。願わくばこの迷



眠れ。斬るよりも静かに解呪は神の救いなり

える者どもの魂を解き放ちたまえ」

独特のイントネーションで祈りの言葉を呟き、カッと目を見開く。途端に白色光はベリアルの身体を伝わって流れるように地面に吸い込まれ、そこから青白い数本の雷光となって石造りの床の内部を走り抜けた。

驚くほどあっけなく、糸の切れた操り人形のようにアンデッドコボルドたちは崩れ落ちた。大地を覆けた聖なる光が、地の底から伝わってくる邪悪な生命の魔法を断ったのである。怪物たちは一瞬にして四体分の骨の山と化した。

見向すとバルカンは通路の壁に貼り付くようにして、死骸と化したコボルドの山を見つめている。どうやら今の一幕で、これ以上争うつもりはなくなったらしい。

「さて、と。スカルダ、お主どうする」ベリアルはまだ剣を手に持ったままのスカルダに尋ねた。「まだ仲間割れを続けるかな？」

「あんたはもういいのか」素早く剣を収めるとスカルダは逆に質問する。

「そうだな。私としてはもう充分冷汗をかかせてもらったよ。何せ爆炎の呪文をかけられそうになったことなど一度もなかったからな」

「ほんと心臓が止まるかと思ったぜ」

まだ倒れたまま上体だけを起こしたジャバが大声をあげた

「確かに我々の戒律をないがしろにされたのは我慢ならんが、今のでこの男が本当に全ての呪文をマスターしている証になった。地下10階まで行けばもう降伏してくる敵もおらんし、そうなると善も悪も関係あるまい。７レベルの魔法は役に立つ」

「平気で俺たちを殺そうとした奴だぞ、こいつは」

「我々が善の戒律を重んじるように、バルカンにも悪の戒律がある。こちらの主張ばかり通すのも良いとは言えまい。お主も殺気立っておったろう」

「この場合は相方悪い」

「……む」そう言われてはスカルダも弱い。

「今のお主は己れの強さにこだわり過ぎているぞ。パーティの総合力というのもまた強さだ。奴がいればその強さは格段に上昇する。それだけを考えるのだ」

隣り合わせの灰と青春 ⑥

BY BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作　イラスト／来弥純・品川るみ

前号までのあらすじ

地下迷宮深くに潜む大魔術師ワードナの首を獲るべく、日々怪物相手に修練を積むスカルダ一行。しかし新メンバーである魔法使いバルカンの造反によって、リーダーのスカルダは彼との対決をする羽目になる。緊迫するパーティ内。バルカンが今まさに、最強の破壊呪文を唱えようとしたその時、突如襲撃してきた怪物のおかげで二人の衝突はまぬがれ、僧侶ベリアルの説得で再び一行は冒険を再開する。が、スカルダの気は重かった……。

SCENE 7

§ DARK ZONE 1

ワードナの迷宮のところどころには、ダークゾーンと呼ばれるポイントがある。その一帯はその名の通り真暗闇で、通常冒険者たちが携帯している小型ランプの光はおろか、強力な魔法の光すら照らすことができない。それどころか、普通なら地下にいる間半永久的に持続する魔法光の効果まで消し去ってしまうのである。

限りなく闇に近い、濃密な暗黒の霧、というのが最も適した表現だろうか。光を全て呑み込んでしまうガス状の生命体のようでもある。ワードナの造り出した魔法の力場とか、悪魔どもの棲む異次元・魔界の干渉が強い場所など諸説あるが、今だに正体のはっきりしない謎のエリアである。

地下1階の中心部からも、このダークゾーンは縦横に伸びている。鼻をつままれても判らない闇であるから、冒険者の誰もがここに足を踏み入れるのを嫌う。幾度となく通り抜けている熟練のパーティすら迷うことがあるのである。

しかし7レベル以上に認定される頃になると、どの冒険者もダークゾーンに入らないわけにはいかなくなる。その先に、地下4階まで一気に降りていけるエレベーターが設置されているからである。

全10層のうち、地下8階までは各層に一つ設けられた階段によって一層ずつ潜っていくことができる。しかしそれだと入り組んだ迷宮の全域を歩き回る必要があり、しかもワードナのいる最下層には辿り着けない。

そこでかつてトレボーの放ったワードナ討伐隊が設置したのが、地下1階から4階、そして4階と9階をつなぐ二つのエレベーター

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかりだ。善
- ジャバ……パーティの一員。もとは盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立
- カディ……レベル13の戦士。中立
- ベリアル……レベル13の僧侶。善
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……シルバー亡きあとのパーティの一員。謎の魔法使いた。悪
- トレボー……城塞都市の狂君主
- ワードナ……悪の大魔法使い。迷宮の地下10階に住まうといわれている。

であった。実力のある者なら、このコースでごく短時間に地下10階まで行くことが可能なのである。

そのダークゾーンの中を、スカルダたちは黙々と進んでいた。

ねっとりと、まとわりつくような空気である。まるで、水中を歩いているような重苦しさだった。しかしそれは湿気ではなく、もっ

と別の、得体の知れないエネルギーが闇の中に満ちているためである。このエネルギーこそ、強力な魔法の光をも消し去る源のようだった。

一行は、声ひとつたてずに歩いて行く。金具のぶつかり合う音と、押し殺した息遣いだけが、この闇の中で互いの存在を知らせる手掛かりである。

スカルダは前にジャバ、背後にガディの気配を感じながら、眼を閉じて歩いていた。どうせ見えないなら、いっそ見ないつもりでいたほうが他の感覚が研ぎ澄まされるだろうと、ダークゾーンに慣れ始めた頃からずっと続けている癖であった。

それまでは眼を閉じたところで何か変化がある、という訳ではなかった。ただ眼を開けていても見えない、視覚を失ったような不安感を打消すのに役だったぐらいである。

しかし今は眼を使わないことで、驚くほど周囲の気配が読み取れる。ちょっと集中すれば、最後尾のサラの呼吸音まで聴こえてきそうだった。

それが昨日の修行の成果だということを、スカルダは悟っていた。侍に必要な〝気〟の鍛練のおかげで、他人の気配にも恐ろしく敏感になっている。転職による五感の減退のせいで不安を感じていたものの、この能力を使いこなせればそれを補って余りある。

他人の〝気〟を読む能力に気がついたのは侍としての初の戦い——数十分前のオークとの一戦の最中だった。あの時は眼を閉じてはいなかったが、剣先の一点に視覚を集中することで向かい合うオークの気配が手に取るように伝わってきた。

あの時のオークが放っていた気配は驚きと怯えだった。今、冷静に思い出してみると相手の感情までも読み取っていたのである。

転職の道場で訓練されるとはいえ、侍が己の〝気〟を操り、他人の〝気〟を読めるようになるには普通百回近い戦闘を重ねなければならない。たった一度の戦闘で、侍の本領ともいうべき能力を使いこなせるようになったスカルダの素質は、大したものだと言えよう。

パーティのメンバーの気配が入り混じる中、スカルダはバルカンの〝気〟を感じ取ろうと試みていた。

先刻、あわや殺し合いになりそうだった相手である。モンスターの襲撃という邪魔が入らなければ、確実にどちらかが死んでいただろう。

——いや、死んでいたのは間違いなく俺だった。

バルカンと対時したあの時を思い出すと、そんな考えが心の中に暗雲のようにわきあがってくる。

バルカンが爆炎の印を結んだ瞬間から、自分がどう行動しても殺されていたという思いが、確信に近い生々しさで頭から離れないのだ。

——俺は奴の行動が読めなかった。どう切りつけても奴にかわされてしまいそうで、一歩踏み込むことができなかったんだ。

オーク相手の時とはまるで違っていた。

肉体的な動きは、〝気〟の起伏のあとをなぞるようにしてやってくる。〝気〟の動きさえ判っていれば、次に相手が何をするのかがおぼろげながら予測できるのである。オークの時は、指先の動きまでが全て伝わってきた。

それがバルカンと向かい合った時にはかけらも読み取れなかった。〝気〟がまるで感じられないのである。

目の前にいるバルカンが実体のない幻のようだった。

その不安がスカルダの動作を抑制していたのである。五体に鉛を詰め込まれたように身動きがと

れなかった。

蛇に睨まれた蛙のようなものである。それを思うとスカルダの中に怒りにも似た感情がこみあげてくる。バルカンに、ではない。自分自身に対する激情である。

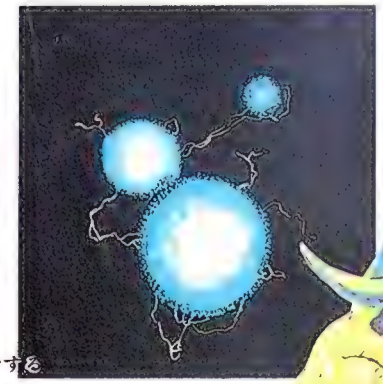
——何のために侍になったのだ！

強くなりたいと願う自分が、恐怖を感じた自分を罵倒しているのだ、と思った。戦士であればあの時何の迷いもなく切りかかれただろう。それが、〝気〟にとらわれすぎて思い通り戦うことすらできなかったのだ。

転職したての今、同じ前衛クラスのジャバやガディに負けるのは納得がいく。レベル1の侍がレベル13の戦士や忍者相手に勝てる筈もないからだ。

だが、最も肉弾戦に向いていない魔法使いのバルカンに威嚇されたのは許せなかった。このことはたとえこのあと自分がどれだけ強くなろうと忘れられないだろう。

本音を言うなら、もう一度バルカンと戦って、刺し違えてでも奴を倒したかった。しかしそれはできない。独りだけの冒険行ならいざ知らず、スカルダは



天鵞絨の闇の片隅に潜む隠者の力、不思議なことよ

四人の盟友をかかえたリーダーである。どちらが命を落としてもパーティの戦力ダウンにつながる争いを自分から始めるのはいただけなかった。

だからこそ腸の煮える思いで、再びバルカンをパーティに入れて行動しているのである。

〝今日の冒険を終えればお主も本来の調子を取り戻せるはずだ。そうすれば無理にバルカンをメンバーにする必要もない。辛抱するのは今日だけだ〟

ベリアルのこの囁きも、スカルダが折れる一因となっていた。同じ善の、しかももっと戒律の厳格な僧侶のベリアルが、自分を曲げてまで己の実戦訓練につき合ってくれているのでは、一日ぐらい耐える気にもなる。

それでもせめて、さっきは微塵も感じられなかったバルカンの気配ぐらいは察知してやりたかった。スカルダの意地である。

しかし、やはりバルカンの気配はない。あたかも独り隊列を離れてしまっているかのようだった。

ふとスカルダは、闇の中に溶け込んだバルカンが音もなく忍び寄ってきたような錯覚に襲われて眼を見開いた。だが見えるものは変わらず、黒一色の暗闇である。首筋に冷えたナイフをつきつけられたような寒気を味わいながらスカルダは首を振った。

「そろそろ例の小部屋だぜ。どうするよ、スカルダ」

前方からジャバが呼びかけてきた。足を止める気配を感じ、スカルダもその場に立ち止まる。続くガディたちも次々と動きを止めたようだった。

「あ痛っ」最後尾でサラが声をあげた。バルカンが止まったのに気付かず、その背中に鼻先をぶつけたのだ。

ジャバの言う例の部屋とは、ダークゾーンの中間点にある小部屋

のことである。どうする、と聞いたのは、寄るのか素通りするのかどっちだ、という意味だ。

「寄っていく」スカルダは躊躇せずに返答した。「シルバーのことを伝えなくちゃな。俺だけで……いや、サラも一緒に来てくれ」

「ええ、いいわよ」鼻のぶつけかたがひどかったらしく、涙声で応えがあった。ジャバがくっくっと笑いを噛み殺している。

「じゃあジャバ、しばらく待っててくれ。すぐ戻る」

「くっくっ、お、おう、まかしときな、ひっ、ひっ。あの爺さんは苦手だし、ぷはははっ」笑わぬように必死で耐えているところに話しかけられて、たまらずジャバは噴き出した。

そこを寸度前に出てきたサラが愛用の杖で殴りつける。笑い声だけをたよりに振り回したのだが、うまくジャバのかぶとの後頭部にヒットした。

「いつまでも笑ってるんじゃないわよ。さっスカルダ、行きましょ」衝撃にのたうつジャバなど気にもしていない様子でサラが先をせかした。

「あ、ああ」気配を感じさせずに殴りつけた手際に感心しながら歩き出そうとした時、背後でガディの動く気配がした。

「俺も行くよ」ガディは短くそれだけ言った。

残りの三人を待機させて、スカルダ、ガディ、サラは壁を伝わって歩き出した。

すぐにスカルダの指先が木製の扉に触れたので、軽くノックする。

「誰じゃ？」中から鋭い声がした。

「俺です」

「何だ、お前たちか。入るがいい」

スカルダはゆっくりと扉を押し開けた。よく手入れされているのか、迷宮内の他の扉のような不快な軋み音はない。

ドアから一歩踏み入れた途端に、一気に視界が開ける。わずかの光もない場所からきたために、急激な変化に耐えられず目が眩んだ。

数秒してスカルダにようやく視力が戻ってきた。ぼんやりと焦点を結んだ部屋の中は実際には大して明るくはなく、スカルダたちの持っているランプより多少大型のランプの光で照らされているに過ぎない。

部屋は迷宮の他のエリア同様石壁で覆われていたが、きちんと掃除がなされているらしく、かなり快適そうな空間になっている。壁の一面は丸々書棚として利用されており、気の遠くなるような数の書物の背表紙がずらりと並んでいた。その大半は魔導を学ぶ者なら誰でも喉から手が出るほど欲しがる、貴重な魔法書である。棚以外にも古書や巻物がところ狭しと部屋中に積み上げられ、わずか5m四方の部屋をさらに窮屈にしていた。

部屋の中央にはどっしりとした木の机があり、その上にも多くの書物やノート、そしてフラスコや試験管が細長いガラス管で複雑に組み合わされた実験道具が置かれている。

その机の前に、一人の男が背を向けて古びた椅子に腰かけていた。

「お久しぶりです」スカルダが一歩前に出る。ガディとサラも眼をしかめながら部屋に入ってきた。

男がゆっくりと立ち上がり、振り向いた。顔にいかめしい皺を刻んだ、初老のエルフである。初老、といってもエルフはスカルダたち人間よりずっと長命であるから、もう老人と呼んでもいい齢なのかも知れなかったが。

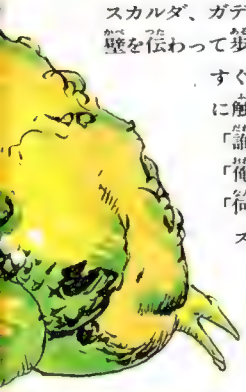
エルフは髭を長く伸ばし、全身を汚れひとつない純白のローブに包んでいた。この男こそ相手を強制的に転移させる呪文を使いこなす、謎の隠者であった。

ワードナの首を求めて冒険者が集まり出した頃から

この一室に居を構え、奇怪な魔法を使う不可解な魔導師。冒険者の誰もが一度はこの部屋に迷い込み、対転移の呪文で城に送り返された経験を持つという、迷宮の中では最も有名な人物の一人である。

強制的に城へ送り返されるのは、せっかく迷宮まで降りてきた冒険者にとって迷惑なように思えるかも知れない。しかしほとんどの者が誤ってこの部屋に入ってしまうのは冒険を始めて間もない頃である。治療の呪文が尽き、毒の罠に引っ掛かって死にかけていたところをこのエルフに救われたパーティは数多かった。僧侶の呪文や各地に点在する寺院による蘇生術が発達したこの世界ではあったが、しくじれば身体は灰に、そして消滅する可能性もある。絶対的なものではないにせよ、死に対する恐怖は大きい。

――マピロ・マハマ・ディロマト。



この対転移の呪文は、転移の呪文が自分をテレポートする力を利用してパーティ全員を転移させるのに対し、純粋に魔法の持つパワーだけで物体を転移する。当然戦闘時に相手にかけることもでき、迷宮深部の石壁の中へ放り込んでしまえば爆炎の呪文より確実に怪物を全滅させられる恐ろしい魔法なのである。

7レベル全ての呪文をマスターした者ですら、この魔法を使える訳ではない。何が起こるか使用者にすら判らないという変異・大変異の呪文を唱え、運が良ければこの効果を呼び出すことができるのだ。しかも変異系の呪文は自分の能力を大きくすり減らす。よほどのことがない限り、並の術者が扱える呪文ではなかった。

それだけ強力な魔法を身につけているのだから、エルフの気分次第では、扉を蹴り開けて入ってくる無礼な輩を二度と姿を現さぬよう、ぶ厚い石の中に封じ込めてしまうこともできる。丁寧に城へ帰してやるというのは、まさに冒険の手助けに他ならない。

そのあたりを理解している義理堅い冒険者が、返礼の品を持ってこの部屋に訪れることもしばしばあった。エルフの隠者は顔をしかめたまま、いかにも迷惑そうな態度でそういった者を追い払うのだが、それでも山と積まれた書物の陰には、礼品の貴金属や酒類があふれ返るほどの人気ぶりである。

エルフはじろりと三人に一瞥をくれると、そのまま椅子に腰を下ろした。

「スカルダにサラ、それにでかいのがガディだったな。今日は一体何のようだ？」

「手短に言います。あなたには伝えておかなくてはならないので」スカルダが丁重に話す。彼もまた、この迷宮に潜ったばかりの時に、このエルフの世話になっていた。

「シルバーが死にました」

「あ奴が？　生き返らせればよかろう」エルフが眉を寄せる。

「寺院に連れて行きましたが、坊主どもが蘇生を二度しくじったのです」

頑固そうな髭をなでていた手がはたと止まった。エルフの緑の瞳がスカルダの眼を見つめる。

「消滅したのか」

「はい」

「そうか、ロストか……」

ほんの一瞬だったが老エルフの表情が沈痛なものになったようにスカルダには思えた。常に不気嫌そうな顔を崩さないこの男の、こんな表情を見るのは初めてだった。

「カントで失敗したのでは仕方あるまいが……惜しい男じゃったな。お主らにとっても」（以下次号）

筆者あとがき

今回はやけに短いあとがきなので、もうお気づきのかたもいるでしょう。そう、ハンパに余ったスペースを埋めるための字数調整なのだ。そんなにあとがきを書くネタが、あるワケがないもんね。

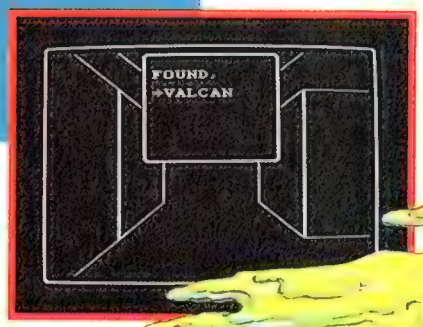
ところでVol. 9でスカルダは似顔絵ひとつ送られてこないとこぼしたところ、早速イラストを送ってくれた若林りりすさん他、どうもありがとうね。あ、ホントにこれだけで終わっちゃったよ。穴埋めだな。（ベニー松山）

華麗な筆致でつづる剣と魔法の迷宮世界

小説ウィザードリィ

隣り合わせの灰と青春⑦

by BENNY MATSUYAMA



ベニー松山作　イラスト／来弥純・品川るみ

前号までのあらすじ

地下迷宮へと突入したスカルダたち一行だったが、死亡・消滅した老魔法使いシルバーの代わりに参入させた黒衣の男・バルカンとスカルダのいさかいによって先行き不安な幕開けとなる。最下層を目指すパーティの前に横たわるのはあらゆる光を吸入してしまう漆黒の空間・ダークゾーン。スカルダとサラ、そしてガディはその中の一室に棲む老エルフにシルバーの死を告げる。彼の復活が望めぬと知った老エルフは沈痛な表情を見せた……。

SCENE 8

§ DARK ZONE 2 §

老エルフはこの迷宮に棲みついて以来二年の間に千人近い冒険者たちと顔を合わせてきた。実際に都市に流れてきた者はのべ一万を下らないと言われているから、第一層のこの部屋にすら、辿り着けたのはほんの一握りということになる。しかし、それにしても相当数なのは確かである。

現在も日に10人前後の冒険者がトレボー近衛隊にとり立てられるのを夢みてこの城塞都市へと流れ込んでいる。うち、逃げ出したり怪物の餌にならずに二度、三度と実戦を重ねられる者が約一割。さらに下層で質が淘汰され、今のところ全冒険者の数は200名ほどで安定している。実に2%の狭き門である。

その冒険者の中でも、スカルダたちのように名を覚えてもらえ、話すに足るとエルフに認められるのはごく一部の者に限られていた。少しでも気にいらぬ者が訪れてきたなら、問答無用で城へ帰す気難しさなのである。

スカルダたちにしても、どちらかというと師に対する弟子のような接し方をせざるを得ない、孤高な精神の持主だった。

そのエルフと対等に話すことのできた唯一の人物こそ、シルバーだったのだ。

それを知っているだけにスカルダたちには老エルフの受けた衝撃と悲しみが痛いほど判った。平静を装おうとしてはいるが、たった一人の理解者を失った感情は隠し切れない。彼の受けた精神的打撃はスカルダたちパーティの仲間より大きいかも知れなかった。

「あ奴も七十の峠を越した爺いじゃからな。カント寺院で消滅したとあらば天命だろう

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかり。
- ジャパ……パーティの一員。盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ベリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……謎の魔法使い。悪。
- 老エルフ……ダークゾーンに棲む術者。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- ワードナ……悪の大魔法使い。

Wizardry

て……」エルフは自分に言い聞かせるようにまた呟いた。

確かにシルバーは冒険者としては考えられない位高齢であった。たとえ鍛えに鍛えた戦士の肉体であれ、五十歳を過ぎるとあとは衰えていく一方である。もともと剣と魔法の力が支配する暴力の時代であるから、五十まで現役のまま生き延びる者は稀であり、多くの者はその前に一財産を築くかして各職業の第一戦を離れていく。この迷宮にも、まるっきり新参者としてやって来るのははとんどが希望に満ちた十代の者ばかりで、あとは三十代半ばまでの、他の地で実戦を重ねたある程度腕に覚えのある連中であった。

シルバーはトレボーの先代である父王がいまだ健在だった頃から城寒に住みついた、いわば一昔前の二級魔法使いだったもうとっくに隠居の身になっていたのだが、スカルダたちのたっての頼みで一年前からパーティに加わっていたのである。大魔道師と呼ばれる域までは達さなかったものの、全ての呪文をマスターした数少ない魔法使いとして近隣に知らぬ者のない男だった。

「言い訳にしかなりませんが、隠居のシルバーを引っ張り出したのは後悔してます。俺達の修業に付き合ってくれて……シルバー自身はトレボーの近衛隊など何の興味もなかったのに」

「いや、あれでなかなか戦いの中に身を置くのが好きな奴じゃったよ。戦いながら死んでいったなら本望だったろうて……それに、気の向かぬことには決して手を出さぬ男でな。お前たちに付き合うのが嫌だったら絶対に力なぞ貸さなかった者じゃ。あ奴は子がなかったからの、孫のような歳のお前たちが一人前になる手助けができるのがたまらなく嬉しかったんじゃろう。お前たちといると三十も若返った気持になれるとも、よく言っとった…」

いつになく饒舌になっているのに気付いてか、老エルフは少しの間黙り込んだ

「教えてくれんか、スカルダ。シルバーを殺したのはどの化物だったんじゃ？」

怪物に軽くあしらわれた屈辱を思い出し、スカルダは唇を噛む。

「初めて会った奴で名は知りませんが、恐らく悪魔系の怪物だと……」

「グレーターデーモンと呼ばれてるらしいわ」

サラが口をはさんだ。どうやら昨日のうちに情報を集めてきたらしい。驚いて顔を向けたスカルダに親指を立ててみせる。

「何せ仮睡も大凍もよせつけずに、逆に５レベルの魔道呪文をかけてくる怪物だもの。ちょっと調べたらすぐ種類を特定できたわ。予想通り魔界に住む悪魔系の中でもかなり高位の奴よ」

「なる程、あの化物相手では無理もない」老エルフがうなずいた。「呪文の抵抗力が異常に高い種族じゃからたとえ爆炎の呪文をかけたところでほぼ無効化されるだろうし、全身は下手な戦士どもより武装度のいい硬質の皮に

うに尋ねた。その眼に武を追い求める者特有の鋭い眼光が宿る。

妖刀村正――ムラマサブレードと呼ばれるこの剣は、現存する最高の剣・カシナートすら遠く及ばぬ強力な破壊力を秘めていると言われる伝説の魔剣である。スカルダが転職の道場でサムライ・マスターに見せてもらった日本刀オサフネと同じく、遥か昔に遠い異国から持ち込まれた数振の中の一本で、妖刀の俗称からも知れる通り敵には死を、そして手にする者には狂気をもたらすという最強の刀であった。

狂気、というと呪われた品のようだがそうではない。ただ、歴代の所有者がその切れ味に魅せられ、次々と血生臭い事件を引き起こしたことから、そのように不吉な伝説が生まれたのである。持主の心を映す剣とも呼ばれ邪悪な心を持つ者が手にすれば必ず破滅を招くと言われるのも、この血の歴史があったからであろう。

何しろ一度も実戦の経験がない者が持ったとしても、一撃で巨人族を絶命させるだけの威力を発揮するのである。侍なら誰でも村正を手にしたいと願ってやまなかった。

その村正の、最後の所有者となったのが、

剣客である。性格は極めて粗暴にして血を好み、剣を持たせれば最低一人は殺さないとおさまらぬとまで言われていた。

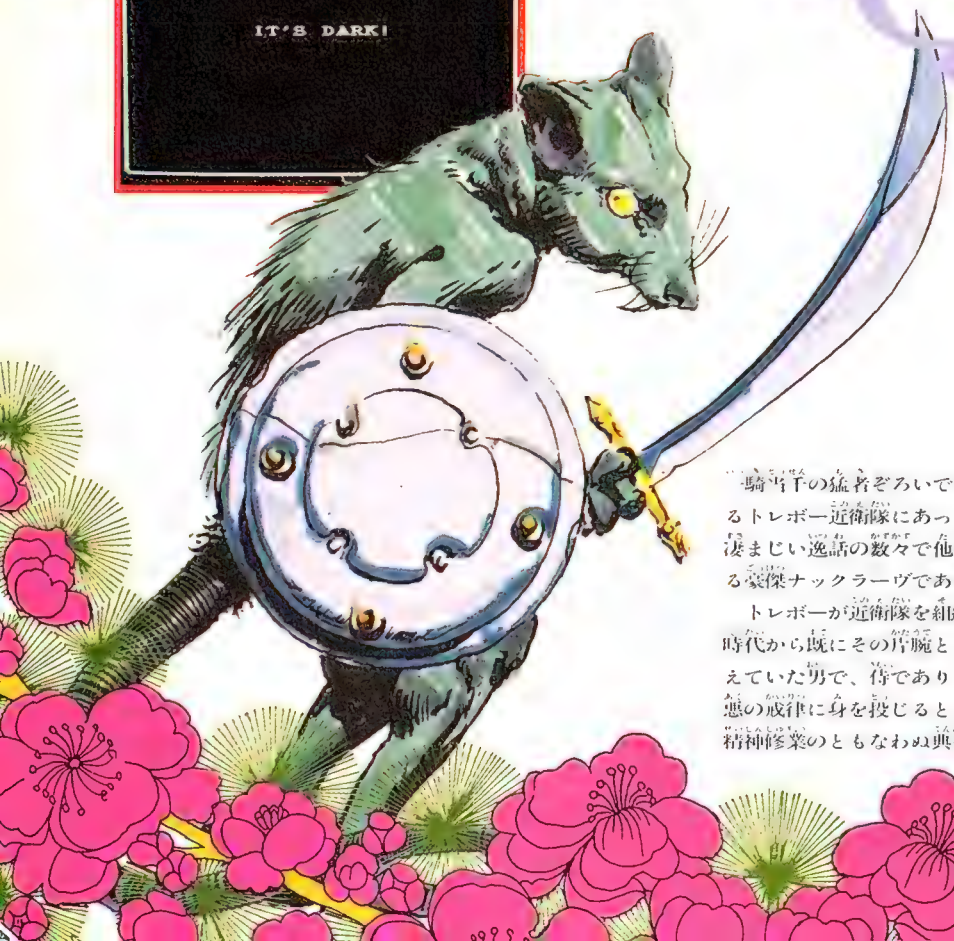
ナックラーヴにまつわる話ももはや伝説的で、一回の戦さで挙げた首級が百を下らなかったという噂をはじめ、トレボーとの戦争で滅びたある国では投降した王侯貴族を一人残らず斬り捨てたとか、たった一人で敵の本陣に切り込んで国王以下旗本隊全員を討ち取るなど、およそ武勇にかけては古今例を見ない超人ぶりであった。

しかしこと戦術に関しては決して秀でた才を持つとは言えず、総勢100名のワードナ討伐隊を指揮した彼は迷宮各所の罠をことごとく引当て、また神出鬼没の吸血鬼軍団に次々と仲間を奪われて、ついには迷宮奥深くで生き残った部下数名を自らの手で斬首し、そのまま自分も絶命したという。

こうして村正は闇の中に消え去った。今では迷宮に潜む野武士の手にあるとも、腹を空かせた火竜が飲み込んでしまったとも言われるが定かではない。また、屍となったナックラーヴが村正の妖気で蘇り、再び血を求めて迷宮を徘徊しているために発見されないのだという話もあった。

覆われとる。いくらお前たちがカシナートの剣を手にしていようと今のレベルで倒すのは難しかろう。確実に倒せるとすれば……」

「妖刀村正、ですね」スカルダが確認するよ



「そうじゃ。あの剣――いや、刀じゃな。あれならスライムに刃を立てるよりた易く、悪魔どもの皮を断ち切ることができよう。だが手に届くところにないのではしょうがないがな」そう言ってエルフは首を横に振った。

「見つかりませんか」とスカルダ。

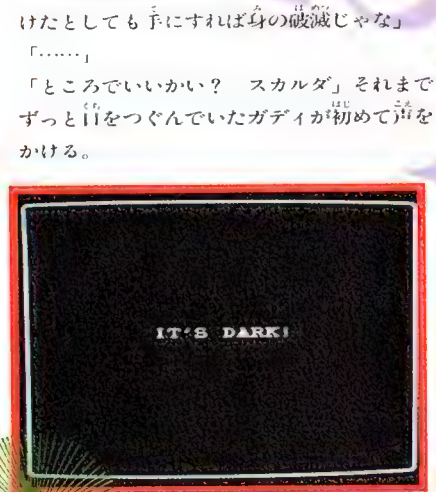
「見つからんだろうな。もしまた迷宮深くに転がってるとしたら……あれだけの人の血と怨念を吸った刀じゃ、それこそ邪悪な精が憑いて本物の妖刀になっとるじゃろ。万一見つけたとしても手にすれば身の破滅じゃな」

「……」

「ところでいいかい？　スカルダ」それまでずっと目をつぐんでいたガディが初めて声をかける。

一騎当千の猛者ぞろいで知られるトレボー近衛隊にあってなお凄まじい逸話の数々で他を圧する豪傑ナックラーヴであった。

トレボーが近衛隊を組織した時代から既にその片腕として仕えていた男で、侍でありながら悪の戒律に身を投じるという、精神修業のともなわぬ典型的な



「ああ、待たせたな」
「どうも変なんだ。先刻の一幕だけど」
「俺とバルカンか？」
どうも嫌なことを考えると唇を噛むのが癖になった、と思いつつスカルダが聞き返す。
「そうさ、と言ってももっぱらバルカンの方だけどね」
「どんな風に？」サラがスカルダの前を回り込むように顔をつき出して尋ねた
「殺気がしないのさ　あれだけ派手に呪文を唱えようとしたのに、スカルダからはいやってほど伝わってくる気配があいつからはまるでなかった」軽く眉を寄せ、「おかしいとは思わなかったのかい？　俺だけかな」
「あたしは魔法使いだもの　あなたたちみたいに殺気に敏感じゃないわ。それでもスカルダの殺気にはゾッとしたけど」姿勢をそのままに、サラは首を傾けてスカルダの顔を見上げた、「レディの手前、もう少し控えてもらいたいわね」
「あの状況でそうはいくか……殺気か　確かに妙だ」
あの時、二人の間の空気は異様に張りつめた。だが、思い出してみるとスカルダの"気"がバルカンを鏡のようにして跳ね返っていただけで、バルカン自身が殺気を発したので

閉ざされた黒い空間。不穏な言葉をも闇は吸い込む。

はなかった。

「バルカンというのは？」その時老エルフが彼にとっては耳慣れぬ名に対して説明を求めてきた。

「やはり御存知ないですか」サラがスカルダより早く応対する。「呪文は全て修めているらしい魔法使いなのですが、私の記憶にもないんです。ジャバが探してきたんですけど」

「ほう。呪文を全てな」エルフはさも興味深そうに傍らの片眼鏡をかけ、身を乗り出した。

その頃――。

エルフの部屋から数ブロック離れた場所を、人知れず一体の人影が移動していた。

ダークゾーンの中であるから、もちろん姿など見えよう筈もない。だが、それだけではなかった。かなりの速さで動いているのだが、石の床に足がこすれる音も、身につけたローブのすれ合う音すら立たないのである。

姿もなく、音もないのだから、もし誰かがこの人影とすれ違ったとしても、それと知ることは不可能だったろう。まるで闇夜に吹く生温い微風のような移動ぶりだった。

バルカンである。

不思議なことに、スカルダたちは誰一人として彼の気配を感じることができない。一切の光を吸収してしまうダークゾーンの中において、バルカンの所在を確認できるとすればそれは自分の鳴き声の反響を利用して飛ぶ蝙蝠か、その能力を持つ吸血鬼ぐらいだろう。

彼はそれをいいことに、スカルダがエルフの部屋入るや否や、残されたジャバ、ベリアルに気付かれぬよう隊列を離れたのである。

不可解な行動であった。いくら全呪文をマスターしたとはいえ、全ての職業の中で腕力・体力ともに最も劣る魔法使いが単独で歩き回るなど、考えられないことである。もし怪物に先手を取られたなら、軽くやわらかいローブの布地は爪や牙、剣の攻撃を面白いように通してしまうだろう。地下1階でも深手を受ける恐れが充分あった。

だが、そんなことは気にもとめない様子で、バルカンは滑るように歩いていく。

ふいに、それと気付かぬほどの唐突さで立ち止まった。ジャバたちの待機する辺りから10ブロック余り離れた場所である。迷宮内で、それもダークゾーン内でこれだけ距離を置くと、たとえ救いを求めたところで彼らの耳には届かない。

彼はゆっくりと両手を開げると、低く呪文を詠唱し始めた。

〝ティル・ブロム・マハマ・マハマーバーマ・ザハ・ガーラーナ……バモーリス！〟

暗闇の呪文・モーリスの亜型である。効果を逆転させる呪音〝バ〟によって一時的に闇を払う呪文だが、僧侶の魔法光に比べて持続時間があまりにも短いため、覚える者はほとんどいない。

しかし、同じ闇が源だけに、ダークゾーンにも効力が現れる。バルカンの周囲の闇が、直径2mほどの球形に中和された。

バルカンの目前に、急速に白いもやが固まりつつあった。それが、瞬く間にぼんやりとした人型に集束する。

最後に形造られた顔が、カッと眼を見開いた。

〝愚か者！〟

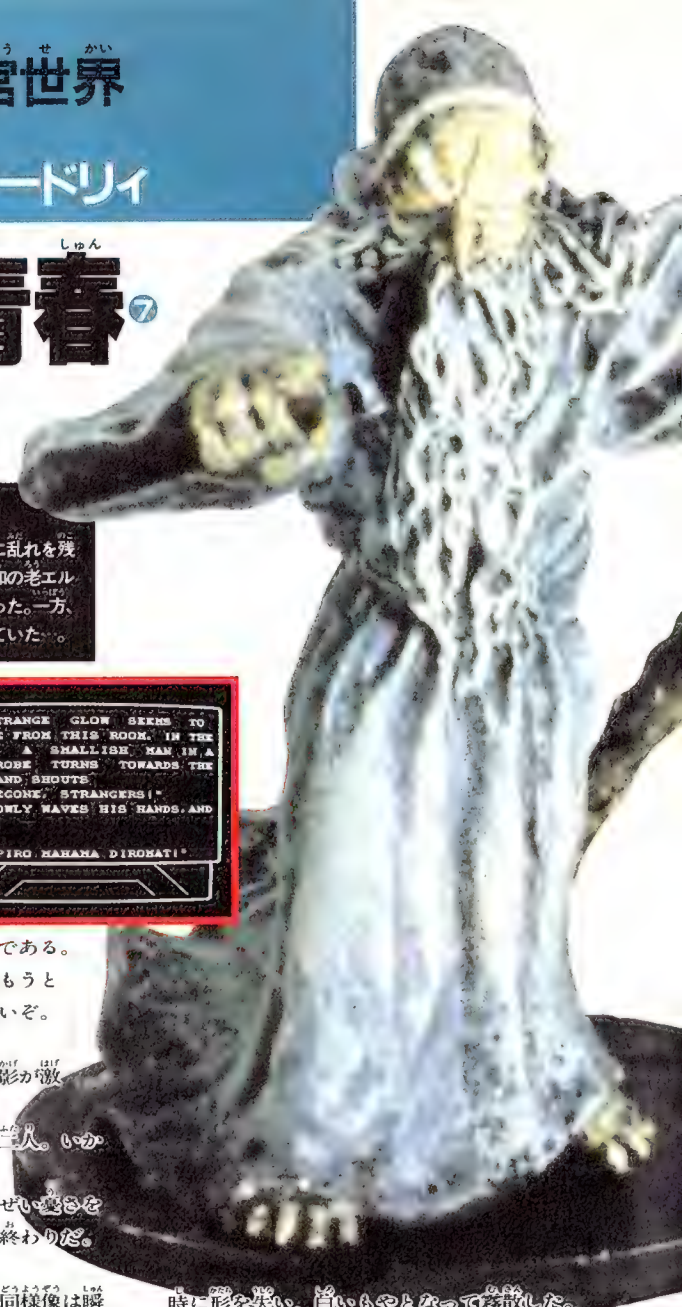
脳天を砕くような大音量で、激しい怒声が鳴り渡った。

（以下次号）

隣り合わせの灰と青春⑦

by BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作　イラスト／来弥純・品川るみ



前号までのあらすじ

ワードナの首を狙い、地下迷宮を往くスカルダー行。新参入のバルカンの造反によってチームワークに乱れを残したまま、パーティは闇の空間・ダークゾーンへと入っていく。途中、スカルダ、サラ、ガディは己知の老エルフの部屋を尋ね、シルバーの死を告げる。また、その場でバルカンに対する疑惑がさらに浮かび上がった。一方、闇の中を誰にも気取られぬまま姿を消したバルカンは、何やら妖しげな白い影と密談を始めようとしていた…。

SCENE 9

§ DARK ZONE 3 §

まるで雷の轟音のごとき怒声である。バルカンが鞭で打たれたように身体を震わせた。

白い人影は実体ではなかった。ある程度の魔力を持った者同士が行う遠隔念話――テレパスと、死者から流出する生体エネルギーに己れの姿を映した幻影である。多くの犠牲者が出るこの迷宮では生体エネルギーが常に溢れているため、この手の幻を造るには事欠かない。

霊気が強いおかげで幻影は不気味なほど生々しかったが、厚い石壁が送られてくる思念を阻むのか、全体的には焦点の定まらないぼやけた像となっていた。そのせいで顔などは若いようにも、ひからびたミイラのようにも見える。判るのは男であるらしいということだけだった。

怒声が続いた。

“くだらぬ理由で爆炎の呪文など唱えかけおって！　貴様の任務は奴らを全滅させることか？　この大たわけが!!”

「御覧になっておいでで……」バルカンが右腕を胸の前に置いた姿勢で応える。

“そんな浅い層での行動は全て水晶玉が映し出しておるわ。貴様がいらぬいさかいの種を播いたところもな”

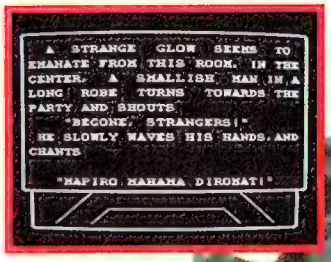
バルカンがオークを焼き殺したことを言っているのだろう。

「しかしあそこで逃がしてやる必要は全く……」

“言い訳はよい。今後勝手な真似は一切許さぬ。よく肝に命じておくがよい”

「はっ」バルカンが深く頭を下げた。

爆炎の呪文を使いこなすほどの術者でありスカルダを相手に一歩も退かぬ胆力の持主たるバルカンが、この相手に対しては相当怯えているようである。



“これより下層に降りると連絡はもうとれぬが、決して使命を忘れるでないぞ。貴様の目的は――どうした？”

バルカンが身構えたのを見て白影が激しく揺らめく。

「どうやら敵のようです。盗賊が二人。いかがいたしましょう」

“好きにして構わん。ここでせいぜい憂さを晴らしておけ。言い足りんが話は終わりだ。吉報を待っておるぞ”

そう言い残して、出現した時と同様像は瞬時に形を失い、白いもやとなって霧散した。

「憂さを晴らせか……それは有り難い」

バルカンの眼に喜悦の色が浮かんだ。獲物を目の前にして舌舐めずりをする肉食獣の眼である。

そこに予測通り二人の盗賊が現れた。

迷宮内に澱んだ瘴気に狂わされ、いつしか迷宮生活者となった冒険者のなれの果てであろう。奇襲者と呼ばれる、地下１階に住む者の中では強者の部類に入る連中だった。金属性の盾と短剣でそこそこに武装を固めている。

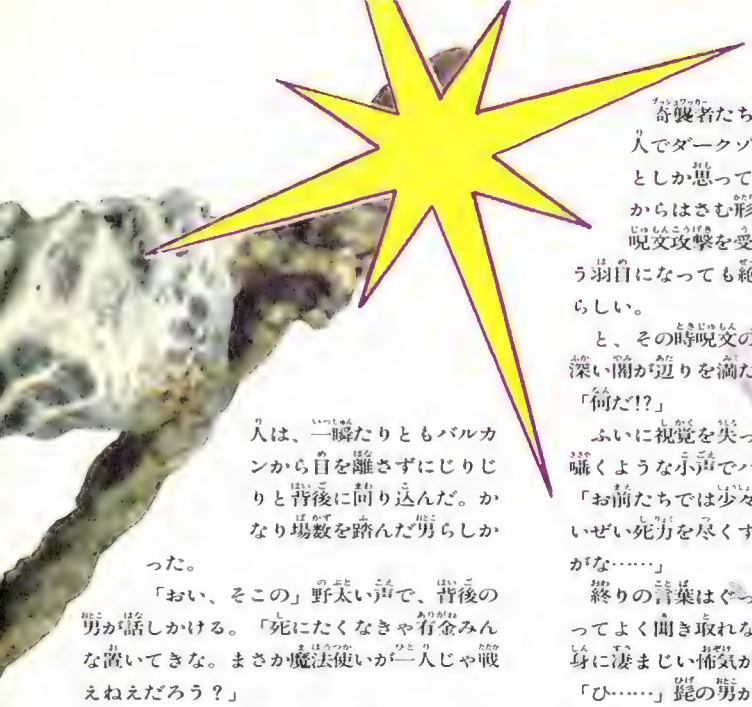
二人は初め、ダークゾーンにぽっかりと開いた空間に面食らったようだったが、すぐにバルカンの姿に気が付いた。

「こりゃあ運がいい。こんなところに魔法使いが一人か」盗賊の片方が髭だらけの顔を相棒に向ける。

盗賊にしてはかなり筋骨隆々としたもう一

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかり。
- ジャパ……パーティの一員。盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ベリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……謎の魔法使い。悪。
- 老エルフ……ダークゾーンに棲む術者。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- ワードナ……悪の大魔法使い。



人は、一瞬たりともバルカンから目を離さずにじりじりと背後に回り込んだ。かなり場数を踏んだ男らしかった。

「おい、そこの」野太い声で、背後の男が話しかける。「死にたくなきゃ有金みんな置いてきな。まさか魔法使いが一人じゃ戦えねえだろう？」

バルカンは押し黙ったまま何も言わぬ。

「なあに、つい調子に乗って独り歩きしちまうなんざ、新参者がよくやるこった。別に恥ずかしい話じゃねえよ。金さえ出しゃあそれで許してやらあ。魔法使いなら金なんざ使い途もねえだろ？」髭面が勝ち誇った顔つきをみせる。「べつに俺たちゃやりあっても構わねえんだぜ」

奇襲者たちはバルカンを、たった一人でダークゾーンに迷い込んだ新参者としか思っていなかった。また、前後からはさむ形になっているから同時に呪文攻撃を受ける心配もない。もし戦う羽目になっても絶対に勝てると考えているらしい。

と、その時呪文の効力が失せた。瞬く間に深い闇が辺りを満たす。

「何だ!?」

ふいに視覚を失って取り乱す二人の耳に、囁くような小声でバルカンの言葉が届いた。

「お前たちでは少々物足りんがまあいい。せいぜい死方を尽くすことだ。どっちみち死ぬがな……」

終りの言葉はぐっぐっという笑い声と混ざってよく聞き取れなかったものの、二人の全身に凄まじい怖気が疾った。

「ひ……」髭の男が込み上げてきた悲鳴を咽喉に詰まらせる。

それがその男がこの世で発した最後の言葉となった。

がちゃり。

べちゃ。

筋肉質の男は何か金属が床に落ち、続いて水気を大量に含んだ重いものが叩きつけられる音を聞いた。

「お、おい、どうした？」不吉な想像が頭をもたげてくるのに必死で抵抗しながら、男は耳を澄ます。が、やはり返事はない。

「相棒は死んだぞ。もうお前一人だ」

ぞっとする近さでバルカンの声が響く。

「ひやっ」

男が奇声をあげて手にした短剣を振り回した。しかし剣は空を切るばかりである。

「そうだ。そうでなくてはつまらん。もっと必死になれ」剣が薙ぎ払っている筈の空間から、さも愉快そうにバルカンが囁く。

「なああーっ」死の緊張に耐えられなくなった男が意味をなさない叫びを発した。そして闇雲に走りだそうとする。

びしゃっ。

液体が大量に飛び散る音がした。

「手応えがまるでない。失望したわ……」

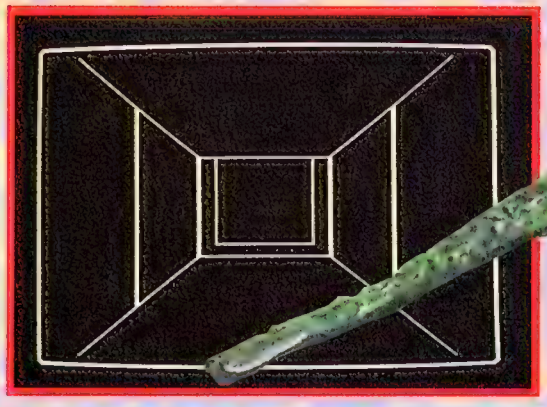
バルカンの呟く中、むっとする臭気が一面に広がった。

血の匂いだった。

「……結構待たせてくれるじゃねえか。中で茶でも出して貰ってるんじゃ――と、そんなにえのきく爺さんでもないか」

老エルフの部屋の外壁に寄り掛かったジャバが、誰にともなく呟いた。

スカルダたちがこの部屋に入ってからかな



り時間が経つ。先刻のオークの一件でかかった時間を合わせると、そろそろ他の冒険者たちもダークゾーンに入ってくるころである。

「これじゃ朝一番に宿を出た甲斐がないぜ」

「待つのは飽きたか」とベリアル。

「もううんざりだよ。こんなダークゾーンで息を殺してじっとしてるなんてな。宝箱の罠を外す時ぐらい疲れちまわあ」

「相変わらず堪え性がないな。忍者になっても本質は変化なしか」

「へっ。まあ転職した忍者連中に比べりゃインチキしたようなもんだしな。夕ベスカルダに聞きはぐっちまったけど、転職ってのはとんでもねえ修業をさせられるんだろ？」

「私も生まれてこのかた僧侶以外の職に就こうと思ったことがないので、詳しくは知らんが――例えば盗賊から戦士に転職するとなると」

「そんな馬鹿はいねえよ」すかさずジャバが茶々を入れる。

「例えばだ。黙って聞かんか。で、転職するとなると、盗賊と戦士では使う筋肉がまるで違う。というより盗賊はほとんど筋肉が必要あるまい？」

「ま、そうだな。ちょいと無理して重い武器を持つと、すぐに手がいかれちまう。そうなると罠を外す感覚も鈍るし」

「うむ。転職とはその感覚を犠牲にして、短時間に戦士に必要な筋力を鍛え上げるらしい。無論その負担は色々と出てきてな。反射神経から知力、五感から運気に至るまで軒並み低下してしまうという。今日のスカルダもそのせいでだいぶ苦しんでおったろう」

「するってえと俺はかなりいい目をみてるんだな。あの盗賊の短刀のおかげでよ」

「そのようだな。しかし何か身体に変調はないのか？　もう盗賊ではないのだからどこかに違いが出てもおかしくはないぞ」

「そういやあ」ジャバの声に若干不安気な調子が混ざる。「指先の感覚がちょっとしっくりこねえ。また宝箱を開けてねえから何とも言えねえが、まるで薄い手袋を一枚つけてるみたいでね」

「ほう」

「まあ忍者ってクラスに慣れ切ってねえからだろうけど」

通常なら忍者に転職が許されるのは悪の戒律に身を置く者だけである。中立の盗賊だったジャバが忍者についてろくに知らず、盗賊よりも罠を外す能力が劣るということに気付いていないのも無理はなかった。ただ盗賊と同様の能力を持ったまま、高い戦闘能力が持てるという話を聞いて、パーティの戦力補強のために盗賊の短刀の持つ変身能力を使ってしまったのだ。

ベリアルがもう少しそのことについて尋ねようとした時、扉の開く気配とスカルダたちの声が聞こえてきた。老エルフとの話が終わったようである。

「遅えぞ」不服そうにジャバが言う。

「悪い。話が長引いてね」応えるスカルダ。

「早速エレベーターへ向かおう。全員いるな」

「恐らく。バルカン――？」ジャバとの会話の間一度も口をはさまなかったのに気がつきベリアルが呼びかける。

「……ここにおる」やや遅れて応えがあった。

「よし、出発だ」

スカルダの号令のもと、一行はエルフの部屋の前をあとにした。

常闇の中、バルカンが姿を消していたことに、誰も気付いてはいなかった……。

SCENE 10

§ ELEVATOR A §

スカルダたちの目前の床に、ぽっかりと巨

✳DARK ZONE: ELEVATOR✳

大な縦穴が口を開いている。地下4階まで一気に掘り下げられた穴だ。

その上に、重装の戦士でも6人パーティなら楽に乗れるだけの広さを持った檻状の箱が浮かんでいた。床と天井が一枚岩で、その間の空間を太い鉄製の骨組が支えている。

檻とはいえ、火竜級の大きさの生物でなければ閉じ込めたことにならぬほど、大造りな代物である。

これこそ、ワードナ討伐隊が強力な魔道呪文の力を借りて設置した、魔法のエレベーターだった。

互いに反撥しあう磁力を帯びた岩を利用し、恒久的にかけておける効力の弱い魔法でも充分に昇降運動させられるよう組み上げられた、魔法の道具としてはかなり優れたものである。

これに乗れば、階段ルートでは多大な時間を費やす地下4階までの行程もほぼ一瞬でこなすことができた。

ダークゾーンの外れという不便な位置にありながら、中級以上の冒険者全パーティが連日利用する、いわばこの迷宮攻略の要であった。

スカルダたちももう何度となく使った道である。

6人は、前衛と後衛が固まるようにしてこのエリアに入ってきていた。ジャバ、ガディスカルダはほとんど肩を並べて歩いている。

先頭のジャバがエレベーターに乗り込もうとしたその時、ガディがいきなり肩に手をかけて引き戻した。

「危ない！」

急に後ろに引かれ、ガディにあお向けに寄りかかるようになったジャバが『何だ？』という表情を浮かべる。そのすぐ横をかすめるようにして、鈍く光る短刀のようなものが後方から恐ろしい勢いで通り抜けた。

キン！

それはエレベーターの中に飛び込むと、向かい側の鉄の骨組に当たり、弾かれた。くるくると回転しながら、ゆるやかな弧を描いてスカルダたちの頭上を越え、飛来した方向に戻っていく。

「！」

後方には今通り抜けてきたばかりの、ダークゾーンとの境界がある。そこはダークゾーンの闇と、光を通す空間の境で、まるで漆黒の壁面のようになっていた。

振り返ったスカルダたちが見たのは、その黒い壁から生え出した腕であった。その腕に吸い込まれるかの如く、跳ね返った短刀が収まる。

手裏剣か！

壁に生えた腕が逆手に握ったそれは、長さ20cm弱の刃渡りを持つ両刃の短刀だった。刃の部分は極めて長細い二等辺三角形をしており、それがすぼまるようにして革紐を巻いた握りになる。その柄の上部に、恐らく紐や鎖をつけるのに使うのであろう直径5cm程度の鉄輪がついている。“苦無”とも呼ばれる型の手裏剣だった。

手裏剣とは、忍者のためだけに造られ、受け継がれてきた一種独特な武具である。大きさ、重さこそ魔法使いでも扱える短刀と大差ないが、その刀身は比較にならぬほど硬く、そして鋭い。

そもそも忍者というクラスは、戦士や侍、ロードといった前衛クラスの中でも最も特殊な存在である。初めから忍者となるのはどれだけ素質に恵まれても無理といわれ、他のクラスで心技体ともほとんど限界にまで磨き上げた時、初めて転職が許されるのだ。

転職に要する訓練は過酷な肉体改造の連続であり、その時に仕込まれる独自の呼吸法は行っているだけで少しずつ筋力を強化していくという特異なものである。そうして生まれた肉体はまさしく殺戮のための凶器であり、事実その戦闘能力は武具を何ら身につけていない時にいかんなく発揮される。素手であっても、手刀で相手の首を切断できるのだ。

あまりに非人間的な能力を持つが故、悪の戒律の者にしか転職の許されぬクラスであった。

その忍者の力を最も効率よく生かせるのが、この奇妙な武器・手裏剣なのである。戦士が力、侍が“気”で敵を斬るように、忍者はそのスピードで切る。軽く鋭い手裏剣を使えばなまじ威力の高い長剣を使うより、はるかに大きなダメージを与えられるのだ。

今ではこの手裏剣の製法も、伝える者はごくわずかであった。忍者にしてみれば、侍の日本刀に相当する武器である。

トレボー城内の数少ない忍者でも、この武具を持っているのはただ一人しかいなかった。

「何のつもりだ。ハ・キム」ダークゾーンの腕に向かってスカルダが叫ぶ。

「ひひ……何ね、ちょいとした挨拶さ」闇の中から聞き取りづらいかすれ声が聞こえてきた。

闇の壁からゆっくりと、腕に続いて全身が抜け出てくる。

姿を現したのは、悪の鎧と呼ばれる最高級の鉄鎧に身を固めた、小供のように小柄な男だった。かなりの猫背のせいもあるが、戦士としては標準的な体格のスカルダの、半分ほどの身長しかない。

顔には、多くの忍者がそうであるように、布製の頭巾をかぶっていた。頭巾からのぞいた肌が病的に黄色く、細く吊り上がった眼は瞳孔が恐ろしく小さい。

腕だけがやけに長く、逞しかった。腕だけなら、巨漢のガディと比べても何の遜色もない。そのせ

誰もが相手にするのを嫌う迷宮の忍者たちを、手裏剣を持つ者から奪い取るためだけに殺しまくったのである。

迷宮内の忍者はほとんどが首を落とす技術しか学んでいないえせ忍者であるから、本来正式な修業を積んだハ・キムのような忍者の敵ではない。が、首を切られて命を落とす危険は大きく、好んで忍者どもの相手をする者はこの男を除いては皆無だった。実際に彼は幾度となく首を落とされて死んでいるのだが、その度にホビット族にしては異常とも言える生命力と持ち前の悪運で、カント寺院からことごとく生還しているのである。

不気味な男だった。

その男の、頭巾に隠れた口がもごもごと動く。かすれた声がまたもや流れだした。

「ところでよ。悪いんだがそのエレベーターを俺たちに先に使わせてくれねえかなあ。俺たちゃあ、ちと急いでるんでよ。ひひっ」

俺たち、と言った途端、まるでタイミングを計っていたようにハ・キムの後方の闇が盛り上がった。

いや、闇ではない。全身をつやのない黒で染め上げた鎧で包んだ、屈強の戦士がダークゾーンから出てきたのである。

背丈はスカルダほどだが、肉の量が桁違いに多い。総量で、ガディを上回っていそうだった。しかも驚くべきことに、その戦士はドワーフ族なのである。並のドワーフの1.5倍の大きさだった。

戦士はハ・キムのすぐ後ろまで歩み出ると、同じく黒いかぶとの面頬をはね上げた。すすでも塗りたくったかのように黒い肌の、髭だらけの男の顔がのぞく。半開きになった眼がスカルダたち全員を、何の感情もないかのように見回した。ただ視線がガディにさしかかった時、その眼にわずかながら鋭い光が宿る。

「ゴグレグ……」ガディが男の名を呟いた。戦士——ゴグレグが、驚くほど白い歯をむき出しにして、にっと口だけを歪めた。

「ハ・キムてめえっ。人を殺しかけといて次は道を譲れだと！　なめるのもたいがいにしやがれ！」

ガディに引っぱられなければ自分の頭に突き刺さっていたかも知れない手裏剣に、わずかの間ショック状態にあったジャバだったが、ようやく我を取り戻し、ハ・キムに突進しようとする。それをスカルダが腕で制する。

「やれやれ、どうも穏便に話がつけられないようですね。あなたが悪いんですよ、ハ・キム」

また別の声が響いた。同時に三人目の男が姿を現す。

真紅の法衣を着込み、白い金属でできた鎖かたびらをまとっている。氷の鎖かたびらと呼ばれる珍しい品である。

二十代半ばの、人間の僧侶だった。金色の髪を後ろになでつけた、端正な顔立ちの青年である。ただ、口元にへばりついた薄笑いがそのままなら気品のある顔をかなり下卑たものに見せている。目つきも理知的ではあったが、どこか狡猾そうな雰囲気を漂わせていた。

ハ・キムは上半身だけ回して青年を見ると、ひひっとだけ喉を鳴らした。

続いて、二人がそのエリアに入ってきた。

（以下次号）

いで、全体のイメージは小柄なゴリラのようである。

ハ・キムと呼ばれたその男は、ただでさえ細い目をさらに細めると、思いがけない素速さで一、二歩前に出た。

「ようジャバ。お前も忍者になったんだってなあ。それもこの俺を追い越してよ。ひひ……」

どこか人を苛々とさせる喋り方だった。わざと押し殺した感じのするかすれ声が一層不快感を刺激する。

ハ・キム——一年半ほど前に東方から流れてきたホビットである。やってきた当時はホビットにしては珍しい戦士だったが、世界的規模で見ても稀にしかない忍者の転職場にすぐさま赴き、それ以来実戦を積んできた生抜の忍者であった。目下レベル12に認定されており、ジャバを除いては城塞都市一の実力を持つ忍者と言われている。

『忍者殺し』というのが、ハ・キムの異名だった。その由来たるや想像を絶するもので、

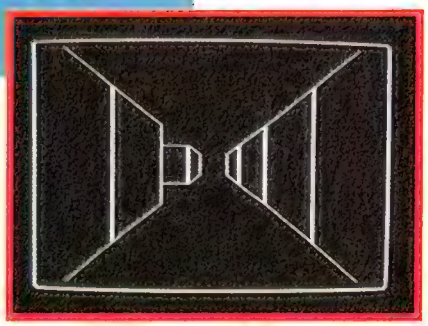
●当ページに使用しておりますメタルフィギュアは(有)アオシマ文化教材社より「ファンタスキィックアドベンチャーシリーズ」として発売されているものです。

問い合わせ先・0542—63—2400

隣り合わせの灰と青春 ⑨

BY BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作　イラスト／末弥純・品川るみ



●前号までのあらすじ

大魔術師ワードナの造り上げた巨大な地下迷宮で日夜修業を続ける冒険者たち。その一人であるスカルダ率いるパーティは、新参入のバルカンを加えて一路最下層へと向かっていた。しかしバルカンの造反で一行の足取りははかどらず、さらに闇にまぎれて隊列を離れたバルカンは謎の影と密会、不穏な動きを見せる。ようやく魔法のエレベーターへと辿り着いたものの、一行の背後からは別のパーティが迫りつつあった……。

SCENE 11

§ EVIL PARTY

青年僧の後についているのは、長い赤毛を頭の後ろで束ねた人間の少女だった。歳の頃は15、6と冒険者の中でも最も若い年代である。まだあどけない顔立ちながら、きっとした茶色の瞳が勝気そうな性格を示していた。一見おとなしそうに見えるサラとは違ったタイプの美少女であった。

少女は昨日までのジャバと同様、軽量で機敏さを失わない革の鎧を身に着け、腰に短剣を下げていた。そのいでたちから、彼女が女魔法使いの次に多い女盗賊だと見てとれる。

口元を固く結んだまま、少女はジャバを睨みつけていた。

残りの二人は、ホビットのハ・キムよりさらに頭一つ分背の低いノームの魔法使いだった。ローブの色が片方が濃い青、もう一人が緑だという以外はまるで鏡に映したようにそっくりである。常にひそひそと囁きあっては、時折含み笑いを漏らすのが不気味な中年の双児だった。

エレベーターの前で二組のパーティが向かい合った。片や城塞一の熟練度を誇るスカルダたち善のパーティ、片や全員レベル12のメンバーで固めたハ・キムたち悪のパーティである。互いにライバル視しあう善と悪の最強部隊だった。

しばしの沈黙が流れたあと、紅衣の僧侶―アルハイムが慇懃に一礼した。

「これはとんだ御無礼をば。しかしまあ善の戒律の方はこんなことをいつまでも根に持ったりはしないでしょうがね。でしょう？　スカルダ、ベリアル」

半ば挑発しているような口調だった。むっとするスカルダより早く、ベリアルが口を開く。

「謝り方も知らんとはまるでそこいらの小童どもと変わらんな、昔の修業時代と同じ、頭の中はさっぱり成長しとらん。それとも悪の戒律になると馬鹿になってしまうのかな、アルハイム？」

アルハイムの口元の笑みがすっと消えた。

「……ほう、歳をくったぶんだけ口は達者なようですね。それで実力があればシルバーも消滅せずに蘇生させられたんでしょうが……」

シルバーがロストしたニュースは既に冒険者の間を駆け巡っているらしい。ベリアルの表情が硬張ったのを見て双児の魔法使い兄妹・サンドラとルードラがくすくすといやらしい笑い声を立てた。この小人族の双児も外見からは予想できぬ危険な連中で、ひそひそ話にまぎれてふいに呪文を唱えてくるという、冒険者の中ではハ・キムと並ぶ嫌われ者である。

「そういえばまだシルバーに悔やみの言葉もあげてませんでしたね。気の毒なことです。仲間に恵まれなかった者の末路というものは特に」

僧侶にとっては最大級の屈辱である、パーティ内の消滅に触れられて歯を食いしばるベリアルを見て、アルハイムは再び口の端に微笑を浮かべた。

この青年僧は昔、トレボー領からさして遠くない寺院でベリアルとともに修業を続けていた善の僧であった、ベリアルの弟子にあたり、端正な容姿によるカリスマ性と、人間にしては類稀な僧侶としての才能から将来を期待されていた男だったのだが、いつしか悪に転じてしまったのである。

その後、放浪の旅を続けながら各地に伝わる様々な呪法を身につけ、ついこ月ほど前にレベル11の僧となってこの城にやってきたのだった。

「私に任せて下されば、見事蘇生して……」

「用件がそれだけなら俺たちは行くぞ」ベリアルに対する執拗な侮辱に耐えかねたスカルダが遮った。

「それにシルバーを消滅させたのはカント寺院の強欲坊主だ。マスターレベルにも達してない奴にどうこう言われる筋はない」

アルハイムがふん、と鼻を鳴らしてせせら笑った。

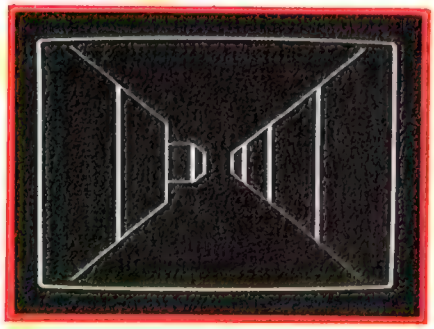
主な登場人物

- ●スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかり。
- ●ジャバ……パーティの一員。盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ●ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ●ベリアル……レベル13の僧侶。善。
- ●サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- ●シルバー……魔法使い。ロストした。
- ●バルカン……謎の魔法使い。悪。
- ●老エルフ……ダークゾーンに棲む術者。
- ●トレボー……城塞都市の狂君主。
- ●ワードナ……悪の大魔法使い。

「マスターレベルになぞ今日中になってみせますよ。だから先を急いでるんだと言ってるんです」
「それで道を譲れと？　悪いがこっちもそんな戯れ言を聞いてやるほど暇じゃないんでね。エレベーターが上がってくるまで待つんだな」
「な？　アルハイム、穏便に話をつけようなんざ無理なのさ。ひひひ……。スカルダよ、俺たちゃ腕ずくでも構わねえ」
ハ・キムがスカルダを見据えた。
「たかが順番争いで殺し合いをする気か」
「何でも転職したばかりだそうじゃねえか、スカルダよ。ひひっ」
どうやらこの男はシルバーのロストとスカルダの転職によるパーティの総合力低下を考えて、脅しをかけているようだった。しかし単なる脅しだけでなく、いきなり斬りかかってくるような緊迫感を漂わせている。ハ・キムという男は、それぐらいのことは平気でやりかねない。後方で絶えず囁き続けているサンドラとルードラも油断できなかった。
迷宮内でパーティ同士が戦うなどという行為は、たとえ善悪の対立があったとしても、あまりに危険すぎるため誰もが避ける。余程の実力差がない限り、相方ともかなりの深手を受けるからである。
この2パーティがぶつかりあえば、先刻のスカルダとバルカンの対決よりずっと恐ろしい戦いになるのは明らかだった。
「第一あなたたちは夜明けとともに宿を出たそうじゃないですか。急いでいるわりにはずいぶんゆっくりとここまで来たようですね」
アルハイムの問いにスカルダは黙ったままだった。バルカンと自分の争いが原因だなどと言えよう筈もない。
その時ようやく女盗賊が声を発した。悪のパーティの中にあって唯一中立・無戒律のラシャである。
「あたしはジャバたちと争うなんて御免よ」
アルハイムが小さく舌うちをした。いいところで味方に口をはさまれたのである。
「こうやってやりとりしてる間に下まで行けたんじゃないの？　ハ・キムばかりかアルハイムまで、やけに突っかかってるじゃない。
早いとこ穏便に話をつけてちょうだい」
きっぱりした口調だった。この得体の知れぬメンバーに囲まれながらも、意見はきっちり通しているらしい。
ハ・キムとアルハイムが少々困った様子で目くばせし合った。アルハイムがすぐさまラシャに、スカルダたちには聞こえないように耳打ちする。
〝追い抜かないといけないんですよ〟
ラシャが怪訝そうに眉をひそめる。
〝彼らには足止めを食ってもらうことになりましてね。ジャバに危害はないですから、あなたは口出しをしないで下さい。彼さえ無事ならいいでしょう？〟

魔

アルハイムの言い方に多少反発した表情を見せたラシャだったが、ハ・キムとアルハイムに何か考えがあることを知り、とりあえずおし黙った。
「それで、もう行ってもいいのかしら？」それまでずっと聞き役に回っていたサラが言った。「私もいい加減待ちくたびれちゃって。話を聞いてたらなんのことはない、ただの中傷やら理不尽な脅しばかりじゃないの。こっちには何の得もないわね」
「おお」アルハイムが大袈裟に両腕を広げる。「これはこれはサラ、いつも通りお美しい。酒場の入口でくだを巻いていた時には、今日もひどく酒が残るとばかり思っていましたが」
あ、という顔でサラが片手を口に当てる。「もし出会ったら解毒の呪文でもかけてさし上げようと考えていたのですよ。その様子ならもうベリアルに酒を抜いてもらったようですねえ。ところで」彼はいかにもずるそうに



口の端を吊り上げた。「我々が宿から城門に向かう途中、丁度城の木っ端役人が触令の書かれた札を立ててましてね。何でも夕べ酒場で呪文を唱えた不届き者がいて、そいつを三日間の強制労働の刑に処するということらしいんですよ」

――強制労働を三日!?

スカルダたちは目を丸くした。特にサラは危うく杖を取り落としそうになるほど驚いた。

強制労働とは、トレボーの城塞都市に生活する以上、拒否することのできない罰であった。

ワードナの迷宮に挑戦する者が街にやってくる一方で、罪人くずれの冒険者も多く流れ込んだため、窃盗や暴行、呪文の行使といった軽犯罪が増加したのがそもそもの始まりである。せっかくの冒険者を牢につないでいたのでは魔除けの奪還はおぼつかないし、かと言って野放しにもできないという実情から役人たちが考えついたのは、短期のうちにもう二度と罪を犯そうなどと考えぬほど過酷な労働をさせることだった。この労働とは訓練場の裏手にある荒れ地を日の出から日没まで途中一度の休憩をはさむだけで開墾するというもので、たとえ屈強の戦士であれ、一日で罪を犯した我が身を呪うと言われている。拒否した時には城外へ退去せねばならず冒険者にとっては受ける他ない罰なのである。

その強制労働を三日間など、華奢な女魔法使いのサラに耐えられるものではない。

「まだはっきりと呪文を唱えた者の姿を見た者はいないらしくて、目撃者は届け出ろとのことですよ。さて、どうしたものか」サラの反応を見て、アルハイムは満面に笑みをたたえる。

サラは平静を取りつくろってはいるが、顔面は蒼白だった。もともと白い肌がさらに白い。表面の時はクールなサラがこれだけ動揺しているのは珍しかった。

アルハイムは呪文を唱えたのがサラだと知った上で、あからさまに取引きを強要しているのである。先に行かせるなら訴え出たりはしないと。

しかしアルハイムの話は全くの嘘かも知れなかった。通ったあとに立てられた札のことなど、スカルダたちには確かめようもない。たかがエレベーターの順番をかけてなら、たとえはったりであってもこれほど効果的な脅しはなかった。アルハイムはこの手の駆け引きに関しては悪魔的に頭の切れる男だった。

「坊主のくせに汚ねえやり口だぜ」

ジャバが忌々しげに唾を吐いた。「だからてめえらはいやなんだ。自分のためならどんなことでもしやがる」

「そんなことを言ってるからいつまでたってもワードナを倒せないのよ」きつい口調でラシャが言った。

「何だと」

「何さ」

「とにかく」アルハイムが睨み合う二人の間に割って入る。「どうするかは早く決めて下さい。スカルダ」

「いいのよ、スカルダ」まだ血の気のひいた顔のままでサラが振り返った。「こんな脅しに乗る必要はないわ。早く行きましょう」

「いや」スカルダがサラの肩に手をかけた。そのまま後衛の三人より一歩前に出る。

悪のパーティの先頭にいるハ・キムとの距離は三歩半ほどである。

「先を譲ろう。何のたくらみがあるのかは知らんが、この程度のことで意地になってもしょうがないからな」彼はアルハイムに鋭い眼を向けた。「その代わり――」

「そこまで言っては野暮ですよ。もちろん、私は誰が呪文を使ったかなんて知りませんしね。さて、それじゃそこをどいてもらいましょうか。入口に陣取られたのではせっかくの御好意も受けられませんので」

スカルダたちはさも不愉快そうに横へ数歩ずれた。それを見てハ・キムがかすれた笑い声をたてる。

「素直でいいこった。遠慮なく乗らせてもらうぜ」

そう言った瞬間、蜥蜴のような素速さでハ・キムの身体が動いた。

――む!?

殺気がスカルダに伸びてくる。だが、肉体の反応は予想以上に鈍い。

スカルダが反応した時には、ハ・キムの腕に握られた手裏剣が彼の喉元に突きつけられていた。

まばたきほどの時間で、ハ・キムが間合いを詰めたのである。

「ひひ……」

スカルダを懐から見上げながら、ハ・キムはゆっくりと手裏剣を下ろした。そのまま滑るように横へ動く。

「やっぱり転職したばかりじゃあ、身体の方がついてこねえよなあ。今ならお前の首を簡単に跳ねちまえるぜ、スカルダよ」ハ・キムは嬉しそうに眼を細めた。「せいぜい頑張りな。早いとこ調子が戻るよう祈っててやるぜ。ひひっ」

「そいつはありがたいね」スカルダは憮然として咳いた。レベル12の忍者に遅れを取るのは仕方ないが、その相手

ひたひたと悪が来る

がこの男だとやはり腹が立つ。

「早く行けよ、この猿野郎め」

ジャバの罵声を浴びながら、ハ・キムは笑い声を残して身軽にエレベーターへと飛び乗った。

巨体のゴグレグが、ガチャリガチャリと漆黒の鎧を鳴り響かせて後に続く。

「ガディ」すれ違いざまゴグレグが初めて声を発した。低く響く声である。

「何だ」ガディの眼がゴグレグを追う。

「今日で、追いつく」

その言葉を言い終わらぬうちに、黒い姿はエレベーターの入口をくぐっていった。

「楽しみにしてるよ」エレベーターと反対方向の、ダークゾーンの暗闇に視線を移して、ガディは静かに応えた。

ゴグレグが完全に乗り込むのを待ってから、残りの四人がエレベーターに向かう。

「おい、ラシャ」アルハイムと並んで通り過ぎようとするラシャをジャバが呼び止めた。

「何よ」

「いつまでこんな奴らとつるんでる気だよ」

「さあね。少くともあんたにどうこう言われる筋はないわね」

ラシャは足を止めきつい視線を向けた。その向こうでアルハイムがにやつきながら様子をうかがっている。

「心配してやってるんじゃねえか。こいつらのやり口はとんでもねえ。いいか、早く手を切っちまえ」

ラシャの眼に怒りの色が浮かんだ。

「今さら心配なんかして欲しくないわ。あたしはあたしのやりたいようにやる。パーティの仲間でもないのに口を出すのはやめてちょうだい」

言い捨てて、ラシャはエレベーターに歩き出した。

「待てよ」ジャバが追おうとする。そのジャバの前にアルハイムが立ちはだかった。

「ラシャがああ言ってるんです。これ以上何を言っても無駄というものですよ。それに、我々は先を急いでましてね。そういった話をしたいのなら、城に帰ってからにでもしてもらいましょう」

そう言って微笑んでみせると、彼はくすくすと忍び笑いを続けるサンドラ・ルードラとともにエレベーターに乗り込んだ。

「へっ、いけ好かねえ連中だ。こんな奴らと組むなんざ、全くラシャの気が知れねえ」ジャバが誰にともなく呟いた。ゴトリ。

悪のパーティを乗せた岩盤のエレベーターが、下層に向かって動き出した。この昇降機は、床と天板とを支える金属柱に取りつけられたボタン状の突起を押すことによって魔法の浮力が調節され、望みの階層に移動するようになっている。ハ・キムらが指定したのは、無論地下四層目だった。

「そういや新しいメンバーに挨拶を忘れてたっけなあ」地底へと潜って行くエレベーターの中から、もう頭まで見えなくなったハ・キムの声が響いた。「そこの黒ずくめの。悪いがそいつらと一緒にいても今日は稼ぎにならねえぜ。ひひひひ……」

「どういう意味だ、ハ・キム」

スカルダが問いを発した時、既にエレベーターは闇の中に消え、ハ・キムのかすれた笑いだけが残っていた

（以下次号）

●当ページに使用しておりますメタルフィギュアは(有)アオシマ文化教材社より「ファンタスティックアドベンチャーシリーズ」として発売されているものです。

問い合わせ先・0542－63－2400

華麗な筆致でつづる剣と魔法の迷宮世界

小説ウィザードリィ

隣り合わせの灰と青春 ⑩

BY BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作　イラスト／末弥純・品川るみ

前号までのあらすじ

大魔術師ワードナから強大な魔法のアミュレットを奪い、大君主トレボーの近衛隊に取り立てられるべく日夜地下迷宮を彷徨う冒険者たち。その一人である若き戦士スカルダは、富や名声よりもさらなる力を求めて侍へと転職する。だが折悪しく仲間の魔法使いシルバーが稼生に失敗し、スカルダの転職による能力減退も含めてパーティの総合力は大きく低下してしまう。代わりに参入したのはスカルダらと反対の戒律を持つバルカン。チームワークに不安を残しつつ迷宮へと踏み入れた一行は、バルカンの造反によって大きく足並を乱される。不穏な動きを見せるバルカンに誰一人気付かぬまま、地下第4層を目ざすスカルダたちの背後に現れたのは、目下最大のライバルパーティと目される忍者ハ・キムの悪のパーティだった。先を譲った一行にハ・キムは不気味な捨て台詞を残して去って行く。スカルダの脳裏を不吉な予感がよぎっていった。

SCENE 12

§ MIDDLE FLOOR §

空気が、不気味な気配で満ちていた。暗い地下道である。小型ランプのかぼそい光に照らされた空間には、生命あるものの姿は欠片も見えない。

しかし明らかに、何かがその場に存在していた。実体のない何か……志半ばに倒れ、蘇生されることなくその一生を終えた冒険者たちの魂が、大量に空間を漂っているのである。

耳を澄ませば、死者の無念の呻きが幾重にもなって聞こえてきそうだった。

ワードナの大迷宮・第四層である。

魔法によって人為的に多数の怪物が配置されたこの迷宮では、冒険者たちは他所に比べて遙かに過酷な戦いを経験させられる。それ故通常なら上数年も修業を続けなければ到達できないマスターレベルにも、才能ある者であればわずか一年程で達することができた。若くして能力を高めたい者にとっては恰好の修業の地である。

だが、狂暴な化物たちとの絶え間ない死闘は、代わりに多くの落伍者を生み出していった。

なかでも、死者が最も多く出たと言われているのがこの地下4階だった。

これより上層に棲む怪物は小型ヒューマノイドのオーク・コボルドや、さして修業を積んでいない冒険者、魔法の影響で多少凶悪になった動物などである。邪悪な魔力を活力とする恐るべき不死の怪物も、せいぜいが蘇りきった屍が動き回る程度のものしかいない。

しかし第四層では、怪物の生態系ががらりとその様相を変える。

主に棲みついているのが人間の知能に野獣の肉体を持つ獣人系の魔物と、怪力を秘めた巨体の食人鬼である。そしてこの地方ではほとんど見ることのできない巨大昆虫類。強力な毒を持つ人蜘蛛や、人の屍肉を好む甲虫、そして炎を吐き散らすドラゴンフライがこの階層ではそこかしこで獲物が近付くのを待ち構えている。特に人蜘蛛は絶好の繁殖条件が揃っているらしく、常に大群で行動していた。

加えて即効性の毒を含んだ息を吹き出す中型の竜・ガストドラゴンや、ほぼ実体を持たない影状の不死怪物・シェイドなども頻繁に出現する。怪物の強さが格段に上昇するのである。

運、実力ともに兼ね備えた者でなければ、生き残れない道理であった。

「いつ来ても厭なとこだぜ」エレベーターを降りながらジャバが低く呟いた。「誰かに見つめられてるような気になっちまうのがどうもな。その誰かが成仏してねえ奴らの魂だってのもぞっとしねえ話だ」

スカルダたち一行は、ようやく地下4階のエレベータールームに辿り着いていた。

ハ・キム、アルハイムら悪のパーティに遅れること数分、彼らの能力からすれば夜明けとともに迷宮に入ってから相当の時間が経過したことになる。

ジャバに続いて全員がエレベーターから降り立った。

この階のエレベータールームは南北に延びる一本道の通路のほぼ中心に位置し、一行が向いている南はランプのか細い光が届かないほど深い闇が続いている。その先に、地下9階へと降りるための第2のエレベーターが設置されているのだった。

北側は重い扉で塞がれており、怪物の潜んでいる様子はない。

ハ・キムたちに遅れを取りたくなければ、今すぐ南へ進めばいい筈だった。彼らが通ったあとだけに、行手を阻む怪物は特屍となっているだろう。うまく敵に出喰わさなければ追いつく可能性も充分にある。

しかしスカルダは迷っていた。ハ・キムがエレベーターで降りる際に残した言葉が頭に引っ掛かっているのだ。

奴もアルハイムも、何か企みがあったのは間違いない。そうでなければあれほどしつ

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかり。
- ジャバ……パーティの一員。盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ベリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……謎の魔法使い。悪。
- 老エルフ……ダークゾーンに棲む術者。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- ワードナ……悪の大魔法使い。
- ハ・キム……レベル12の忍者。悪。
- アルハイム……レベル12の僧侶。悪。

こく追い抜こうとはしないだろう

　油断できない状況だった　謀略に長けたアルハイムのこと、スカルダたちの足を引っぱるための罠を仕掛けている可能性は極めて高い　エレベーターに細工がなかったのが意外なほどである

　現在二百名に近い数の冒険者のほとんどは、スカルダたちトップクラスのパーティに参入するか、もしくは自分たちより力のあるパーティが怪物に叩き潰されるのを願っていた。何しろもしトレボーが、誰かがワードナを倒して魔除けを取り返した時点で、近衛隊の新規参入を打ち切ってしまったとしたら、それ以外の冒険者たちは今までの苦労が水の泡ということになるのである。

　目下一番手につけるハ・キムたちが、早いうちにトップに立とうとスカルダたちに妨害工作を仕掛けてきても何ら不思議なことではなかった

「行かねえのかよ、スカルダ」ジャバがしびれを切らす

「どうも気に掛かるんでな。ハ・キムのことだ、足を踏み入れただけでドカンとくる罠なんてのも仕掛けてあるかも知れん」

「そりゃ悪いな　いきなり作動するヤツは俺にや外せねえ」

「とは言えここでこうしている訳にもいかないしな。つくづくこういうはったりに頭の回る奴らだよ」

「御免なさい。昨晩私が呪文なんか使わなければ、先を譲ることもなかったのに」サラがいつにないしおらしさで言った。先刻のアルハイムの答しのことを言っているのである

「きみのせいじゃないさ　先に行かせたのは俺だし、もし奴の答しが本当なら強制労働を一日だ　仲間の妖魔法使いがそんな目にあうのを放っておいたんじゃ夢見が悪い」

「でも……」

「悪いのはあの馬鹿者よ　あそこまで厚顔無恥な男になっていたとは思わなかったわ。あれが同門の出かと思うと情なくて涙が出る」ベリアルが激しい口調で言った。アルハイムに侮辱を受けたせいでかなり苛立っているようである

「全くハ・キムとあのアルハイムの野郎が組んでからろくなことねえ　ラシャの奴もよくあんな連中に合わせてられるもんだぜん、どうした？」

　振り返ったジャバはガディとスカルダ、そしてバルカンが自分の後ろを凝視しているのに気がついた。慌てて彼も前に向き直る。が、目の前は相も変わらず暗い通路である

「何も見えねえじゃねえか。例のいやらしい気配はするけどよ」

「黙って耳を澄ましてみろ。もう俺にも聞き取れるぞ」スカルダが眼を凝らしたまま呟く。

「？」

　そう言われて耳をそば立てたジャバは、今まで以上に聴力が上昇しているのを知った。盗賊の短刀によって変えられた身体の機能が自分自身まだ良く判っていないのである。耳に神経を集中しただけで、それまでの倍近い距離の音が拾えそうだった

　そのジャバの耳に、奇妙な音が飛び込んできた

　カサカサ、カサカサ

　乾いた物体が擦れ合う音だった。それが何重にも重なって、前方の闇から響いてくる。今まで気付かなかったのは、それがほとんど強弱のない連続的な音のためであった。

赤く染まる迷宮に修羅を見た

――何の音だ？

　ジャバがそう考えた瞬間、バルカンの低いしわがれ声が聴こえてきた。

「来る」

その言葉が合図であったかのように、暗闇の中に緑色の光点が浮かび上がった。一つや二つではない。少く見積もって五十以上の光点である。更にその奥の闇にも、わずかに光る点が無数に見てとれた。それがじわじわとスカルダたちに近づいてくる。

突然に一つの光点が、猛速くランプの光の中に飛び出してきた。

体長が1m余りの、毛むくじゃらの生物・大蜘蛛の前面についた一対の複眼が、緑の光点の正体だった。

毒々しい黄色とくすんだ茶色の剛毛を震わせ、それは昆虫特有の乱し難いスピードで八本の脚を動かしてシャンバに襲いかかってきたが、一瞬早くシャンバの剣が大蜘蛛の頭部を切り落とす。切断面から強烈な臭気とともに赤黒い体液が大量に噴き出し、蜘蛛の屍は全ての脚を痙攣させてその動きを止めた。

ひゅう。

シャンバが溜めていた息を吐き出した。

「あれが全部このお化け蜘蛛かよ。冗え数ごせありゃあ」

「百……二百は下らないわね。恐らくこの階の成虫が全て集まってるわよ」サラがすぐさま分析する。

仲間の血臭に警戒してか、緑の眼の群れは瞬間動きを止めた。が、すぐにまた前以上の速さで接近し始める。

「どうもおかしな匂いが混ざってると思ったんだ」ガディが用心深くカシナー下の剣を抜き放った。「ハ・キムの奴、虫寄せの香料を使ったみたいだな」

「なるほど、大蜘蛛でもこれだけ集めると足止めになるって訳だ。ろえたのはアルバイエだろう」スカフェダも剣を構える。

と同時に、二十匹近い蜘蛛が一つの生物であるかの如く、互いに身を擦り合わせながら突進してきた。全身からカサコソと音を立てる、巨大なアメーバのような密集ぶりである。

見事な罠だった。地下4階が大蜘蛛の巣であることを利用し、虫の好む匂いを放つ香料を下層に向かうエレベーターへの通路に撒き散らしたのである。

たとえどんなに強大な戦闘力を誇るパーティであっても、遅効性の毒を武器に持つ怪物の集団を相手にするのは危険であった。ガストラコンや副王人の毒息も恐ろしいものではあるが、この毒の効果はブレスを吐いている間しか持続せず、体力を奪いはしてもその後尾を引くものではない。

たかが大蜘蛛や、上層に棲む大虫、下層の翼竜の牙や爪から媒介される毒は、もし体内に注入された場合何らかの処置――毒消しの呪文や薬を施さない限り、いつまでもその者の体力をじわじわと減らし続ける。呪文切れなどで治療ができなければ、待っているのは確実な死であった。

もちろんベリアルほどの高僧であれば、解毒の呪文はおろか死以外の全ての症状――麻痺、石化――を元に戻し、肉体の損傷をも瞬時に再生させる快癒の呪文もマスターしているので、そうそう呪文切れになる心配はない。

しかしこれほど大量の大蜘蛛を突破しようとすれば、かなりの呪文を消費してしまうのは間違いなかった。

魔法を持たない者にとって、呪文所有者の無から炎や冷気を生み出す力はあたかも万能であるかのように感じられるが、現実には決してそうではない。引き起こす現象

のレベルによって７段階に分けられた呪文は、使用するごとにその段階に応じた精神領域に著しい負担をかけるのである。本格的な休息の取れない地下探索では、どんなに修業を積んだ術者であれ一日に使えるのは各レベル十回未満だった。

解毒の属する僧侶呪文の第４レベルには探索の間全員に不可視の防護壁を張り巡らす大盾の呪文がある。この分を除くとベリアルが治療に使用できるのは７、８回。もしこのレベルの呪文を使い切ってしまってから毒を受けたなら、下層での激烈を極める戦闘時に切札となる第6レベルの呪文・快癒を使わなければならない。

また、魔法使いの呪文で突破するにしても、最大の殺傷範囲を持つ爆炎の呪文ですら一度に焼き払えるのは二十匹強。たかが大蜘蛛を相手に強力な攻撃呪文を乱発すれば、この後最下層で危地に陥るのは目に見えていた。

経験を積むのに最適な下層への通路を塞ぎ、突破するには多数の呪文を浪費させる。スカルダたちの目的が実戦による自己鍛錬にあるのだから、かわしようのない罠であった。

「サラ、バルカン、大炎だ。こいつらを倒したらすぐに撤退する」スカルダが早口で指揮する。

大蜘蛛の先発部隊は今やパーティの眼前にまで迫っていた。何匹かがジャバたち前衛に飛びかかろうと毛むくじゃらの脚をたわめる。

次の瞬間、蜘蛛たちの足元が鮮かな緋色に浮かび上がった。続いてそこから激しい炎の渦が噴き上がる。

バルカンの大炎が炸裂したのである。

ぎしゃーっ。

先発隊の半数が燃えさかる火炎に包まれた。戻化する大蜘蛛の断末魔の叫びが炎に照らされる通路に反響する。吐き気を催すような生物の焦げる匂いが一面に広がった。

間髪を入れずに残りの半数にもサラの大炎が襲いかかる。前衛三人の数歩先は瞬時に炎の地獄と化した。

しかし大炎程度の熱量では、大蜘蛛クラスの怪物を確実に絶命させることはできない。比較的炎の弱い範囲にいた何匹かは生き残り、全身をくすぶらせながらも炎の中から突進してきた。

そのうちの一匹が、跳ねた空中で粉々に分解する。半ば戻化しかけた外骨格が散って、さながら爆煙のように舞い上がった。

ガディの一撃である。巨体から繰り出される剣の一振りは、中型のモンスターを容易に肉塊に変える威力を秘めている。

ひゅっ。

ジャバが再び鋭い呼吸音を洩らした。目にも止まらぬ早さで剣が疾る

ジャバに喰いつこうとした蜘蛛の脚が全て切断された。動く術を失った胴が勢いを残して転がり、絶命した。電光石火の早業であった。

残りの一匹が、炎によるダメージが最も少なかった。その大蜘蛛は死角を突くようにして、スカルダの懐に飛び込もうとする。

スカルダの脳裏に、蜘蛛の発する“気”の軌跡が閃いた。本体がその軌跡をなぞる。

寸前で蜘蛛をかわしざま、スカルダは剣を下から上に振り抜いた。“気”が刃先から放出され、蜘蛛の身体を一直線に貫く。

彼とすれ違う形になった大蜘蛛の背がぱっくりと割れる。そこから体液を飛び散らせながら、蜘蛛はスカルダの数歩後方で前のめりに崩れた。

前方でようやく炎の効果が失せた。まだくすぶっている蜘蛛たちの屍の向こうで、今片付けた数の十倍近い大蜘蛛が蠢いている。硬い外皮を鈍く光らせた甲虫も何匹か混ざって餌にありつく機会を狙っているようだった。

「次の奴らが襲ってくる前に退くぞ」

「しかしどうする。虫寄せの香料の効果は少くとも４、５時間は続くぞ。何もせずに待つか？」ベリアルが尋ねた。

「ひとつ考えがある。それが駄目ならバルカンの転移で下まで直行だな」

一行はすぐさまエレベーター内に退却した。見ると、後続の大蜘蛛たちが懲る懲る仲間の死骸を踏み越えてきつつある。

「ちっ。確かにこりゃ相手にしてたらきりがねえ。あの外道どもが」ジャバがハ・キムたちを罵づく。

「どうやってあの蜘蛛の山を抜けるつもりだスカルダ？　無理をするとそれこそアルハイムの思う壺だぞ」ベリアルの視線が蜘蛛の集団からスカルダに向けられた。

「上手くいったら御喝采だよ。この通路に漂ってる香料を消し去るのさ」

「何？」

全員が聞き返すようにスカルダを見る。が、蜘蛛の立てる乾いた音がひときわ高くなった。

「説明している暇はなさそうだ。バルカン、迅雷の呪文は使えるな？」

「無論」バルカンが即答する。

「よし、サラとバルカンで交互に迅雷を唱え

「下の階層じゃ使い途のなさそうな３レベルの呪文だけで、何とか突破する手を考えてみたのさ。即席にしては成功したみたいじゃないか　どうだい？」

「いや、大したものだ」目を丸くしていたベリアルが両手を広げた。「これならあと半時間と待たずにあの通路は正常に戻るだろう。昨日までの戦士とは思えんな」

「魔法使いだってそうそう思いつく方法じゃないわよ」とサラ

「運が良かったんだろうさ　半時間か……丁度いい休憩になるな」

る。近距離から遠距離へ、目標点は空中。大蜘蛛を威嚇すると同時に香料を焼き払う。レベル３の呪文がなくなるまで唱え続けろ！」

スカルダの号令一下、大蜘蛛の頭上に激しい閃光が弾けた　その光が蜘蛛を追い立てるように通路の奥へと伸び、無数の火花を散らす。眩い光が暗い地下道を一気に照らし上げた

大炎と同じ魔法使い系の第３レベルに属する電光の呪文・迅雷である。大炎に比べて敵の被る打撃が少なく滅多に使う呪文ではないが、その強力な閃光はあらゆる生物を怯ませる効果を持つ。また空気中の不純物に発火して火花を散らすため、香料の成分を焼いてしまうには最適の呪文だった

魔法に関しては素人に近いスカルダがこれほど適切な指示を下せたのは、侍への転職時に魔法学の基礎をかじらされたのと、戦闘における卓越した勘のおかげと言えよう。

通路の空気全体が香気成分を燃やされて白熱しだした。

「上層へ！」

スカルダの叫びとともに、エレベーターが上昇を始めた。熱気が吹き込むが、既に第３層に移動しかけているためさほどでもない。

地下３階でエレベーターが停止した時、ようやくジャバが口を開いた

「何だよ、今のは？　一体何が起こったってんだ？　俺にゃさっぱり判らねえ」

そう言ってスカルダは静かに目を閉じた。侍になって初めて、心の安まる一瞬だった。

（以下次号）

●当ページに使用しておりますメタルフィギュアは(有)アオシマ文化教材社より「ファンタスティックアドベンチャーシリーズ」として発売されているものです。

問い合わせ先・0542－63－2400

筆者あとがき

ついにこの小説も第10回、始まって以来半年近く経っちゃいました。半年あれば赤児も歩くとよく言われますが（んなこたねーか）最初はどん亀のようにのたのたと進んでいたスカルダ一行も、ようやく人並の速さでワードナの迷宮をうろついてくれるようになり、筆者としては今回のスカルダと同じく心が安まった限りです。

話のほうもキャラクターがほぼ出揃い、いよいよ佳境に入ったと言っても差しつかえないでしょう。あ、そういや必勝本Vol.10の目次のところに〝さあ～！　いよいよ小説も佳境に入る！〟と脳天気なコピーがついてたけどありゃマチガイね。で、前々回から登場した悪のライバルパーティが、これから先の物語に何らかの形でからんでくることになります。ともすれば主人公たちを食ってしまいそうな個性派が集まってるので、そうそうのさばらすワケにもいきませんが。

ところで最近は途中の回からこの小説を読み始めた人が多くなってきたらしく（半年も続けてりゃーね）、前の方のストーリーを知りたいというお便りがかなりの数きとります。

考えてみれば連載小説の読者というものは減りこそすれ増えそうにはないのに、これだけの支持を受けているというのは誠に嬉しい限り。せっかくの御要望を無視するとバチが当たりそうなので、今回は前号までのあらすじ、略して『前あら』スペースを倍にしてみました。どうです？　判りました？　やっぱ９話分を400字じゃ無理があるかなあ。ま、今回初めて読んだって、そんなに難解な物語じゃないから大丈夫でしょ（笑）　（ベニー松山）

華麗な筆致でつづる剣と魔法の迷宮世界

小説ウィザードリィ

隣り合わせの灰と青春 11

BY BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作　イラスト／来弥純・品川るみ

前号までのあらすじ

大魔術師ワードナから強大な魔法のアミュレットを奪い、大君主トレボーの近衛隊に取り立てられるべく日夜地下迷宮を彷徨う冒険者たち。その一人である若き戦士スカルダは、富や名声よりもさらなる力を求めて侍へと転職する。だが折悪しく仲間の魔法使いシルバーが蘇生に失敗し、スカルダの転職による能力減退も含めてパーティの総合力は大きく低下してしまう。代わりに参入したのはスカルダらと反対の戒律を持つバルカン。チームワークに不安を残しつつ迷宮へと踏み入れた一行は、バルカンの造反によって大きく足並を乱される。不穏な動きを見せるバルカンに誰一人気付かぬまま、地下第4層へと到着したスカルダたち。その眼前にハ・キムらライバルパーティの撒いた香料に引き寄せられた大蜘蛛の大軍が迫る。スカルダの奇策は効を奏すが……。

SCENE 13

§ TEMPLE OF CANT

湿気を含んだ生ぬるい空気が、狭い石畳の路地を這うように流れていた。暑くはないのに、いつの間にか肌がじっとりと汗ばむ。

日が中天にさしかかる時刻だったが、まるで黄昏刻のように薄暗い。

大空を、黒煙にも似た厚い雲塊が覆い尽くしていた。

その黒雲がとてつもない速さで渦巻き、吹き流される。かなり強い気流が、吹き荒れているらしい。まるで時がいつもの数十倍も早く進んでいるような雲の動きだった。

時折、吹き散らされた黒雲の隙間から強い太陽の光が降り注ぎ、古い街並をまばゆく照らしあげる。

トレボー城塞都市内、王城の北に位置する居住区画。

ほとんど装飾のない簡素な家々が、さして広くもない地域にひしめきあっている。この辺りに住んでいるのは主に呪い師や修業僧、またはトレボー軍の中でも下位の者と、あまり裕福とは言えぬ階層であるため、街並は極めて質素である。

平屋はほとんどない。二階を新たに建て増しした家が目立つのは、都市の発展に伴って市壁に囲まれている限られた土地を有効に使わなければならない、城塞都市の宿命のようなものであった。

この区画は特に建物の密度が高く、都市中央の王城から放射状に延びる大通りの他は、馬車も通れぬ路地が複雑に入り組んでいる。南を見上げると、せり出した家々に押し潰されそうな空に、天を突くが如きトレボー城の天守閣が浮かび上がって見えた。

その街並の中に埋もれるようにして、高い屋根を持つ礼拝堂がそびえ立っていた。

周囲の建物に比べてひと際高い。幅はそれほど広くなかったが、奥行きが相当ありそうである。

礼拝堂の前は小さな広場になっており、入口はそこから十段程の立派な石段を昇った高さにあった。細いアーチ型の大きな入口は扉が開け放たれ、狭い回廊が奥へ続いているのが見て取れる。古びた外見とは対照的に豪華な深紅の絨毯が敷き詰められていた。

数ある宗教の中でも、呪法による蘇生術に重点を置いた一派の総本山・カント寺院である。命を落とした冒険者のほとんどがここに運び込まれるという、この都市の重要施設の一つであった。

老衰や病以外で死んだ者は、放っておくと死霊などが取り憑きやすい。そのため死亡したまま仲間に連れ帰られた冒険者は、城門に控えている衛兵たちによってできる限り早くカント寺院に運び込まれ、魔物が近づけないように安置される。そして仲間から相応の寄付金が支払われ次第、蘇生術が施されるという仕組になっていた。

僧侶呪文の再生や復活でも蘇生はできるのだが、成功する確率が半々と確実さに欠けるため、大半の冒険者はここに仲間の蘇生を委ねる。寄付が高額であるうえに、もし失敗して屍が灰になったとしても返却は一切されないという、恐しく一方的な取引である。それでも、命には代えられなかった。

上空の暗雲が一層激しく渦巻き始めた。明け方雲一つなかったとは思えない天候の変化である。

小広場では、数人のカント僧が不安気に暗い空を見上げていた。

「奇妙な雲ですね」中でも最も歳若いエルフの青年僧が口を開いた。「遥か上層は晴天なのに、低空の層にだけあのような黒雲が……それも今まで見たこともないほどの速さで動いております。あれは一体？」

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかり。
- ジャバ……パーティの一員。盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ベリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……謎の魔法使い。悪。
- 老エルフ……ダークゾーンに棲む術者。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- ワードナ……悪の大魔法使い。
- ハ・キム……レベル12の忍者。悪。
- アルハイム……レベル12の僧侶。悪。

他の僧たちも一様に落ち着かぬ態度で雲を見詰めている。天空で巨大な円を描く暗雲は、まるでカント寺院を中心に渦巻いているようだった。

「あれは、魔法雲かも知れん」青年僧の数倍の年月を生きていそうなノームの僧侶がようやく呟いた。

「魔法雲？」

「うむ。とは言え儂も伝え聞いた話の上でしか知らんがな。あの不自然な雲は、もうかれこれ五十年も昔この城塞都市に一度だけ生じたという魔法雲と様子があまりに似ておる」

その場にいた僧の目が、全て老ノームに向けられた。

「凶兆でありましょうか」別の僧が尋ねる。

「いや、そういった類のものではないらしいが……何でも今では禁忌とされる大古の強大な魔法を呼び覚ました折に、その上空を埋め尽くしたのがこのように厚く、暗い魔法雲であったということだ」

「ではこの都市のどこかで、封じられた禁断の呪法が行われつつあると？」

「さて、それは判らぬ。ただの雷雲ということもあろう」ノームは静かに首を振った。「それより早く院内へ戻るとしよう。もうすぐ午後の礼拝が始まる」

まだ暗雲に気を取られながらも、老ノームを先頭にカント僧たちは寺院へと戻っていった。

それと入れ代わりに、一人の男が忽然と広場に姿を現した。

黒地の天鵞絨に赤、そして金と銀の糸で様々な刺繍の施された、高価そうな法衣に身を包んだ長身の男だった。更にその上から厚いマントを着込んでいる。

高く立てられたマントの襟が、半ば顔を隠すようであった。正面の合わせ目から、ようやく人相を見て取ることができる。

男には、頭髪が一本もなかった。それだけではない。髭はおろか眉まで、男の顔に毛髪は一本たりとも生えていなかった。

だが男の顔で目を引くものが、もっと他にあった。

スキンヘッドの頭部から顔全体、まぶたに至るまで、くまなく不気味な刺青が彫り込まれているのである。

鋭い眼の周りには赤い隈取りが入れられ、一見すると法衣の刺繍が顔にまで延びているように見える。南方の未開地で今だに信仰されている原始宗教の、呪師の使う仮面のようであった。

男は黒雲を見上げて満足そうに微笑むと、悠然と寺院の入口へと歩き出した。

入口の両脇には、不審者の侵入を防ぐために二人の衛兵が見張りに立っていた。カント寺院は基本的にあらゆる民に対して門戸を開いてはいるものの、高額の寄付金や死者の装具を狙う盗人が後を断たないため、トレボーから兵隊が派遣されている。

その衛兵を気にする様子もなく、刺青の男は石段を昇りきった。

「止まれ！」かぶとを目深にかぶった衛兵二人が槍を男の前で交差させ、行手を遮る。

男が歩みを止めた。

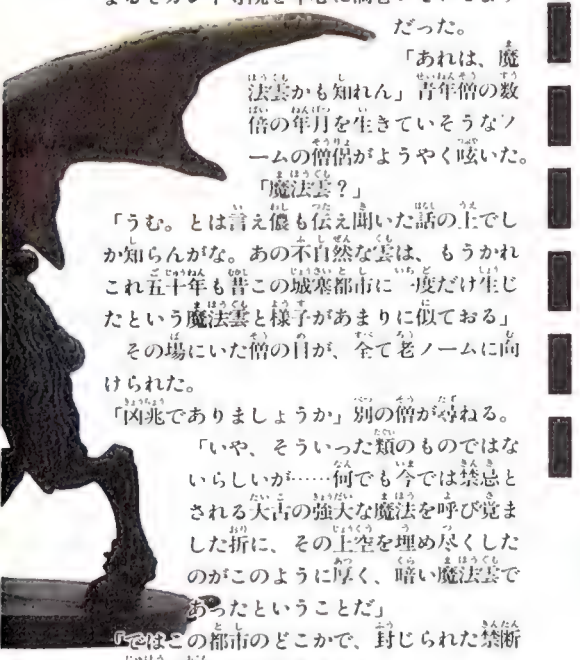
「この寺院に何用だ。貴様冒険者には見えんぞ」右側の、格下らしき衛兵がかぶとを押し上げて男を見た。「怪しい者は……うっ!!」

その時初めて、彼は男の異相に気づいた。いきなり視界に入った紋様だらけの面相に、驚きと恐怖で身体が硬直する。震えが槍を通じて左の衛兵に伝わった。

「どうした？」

同様に顔を上げた衛兵も息を呑んだ。慌てて槍を構えようとするが、緊張で身体が言うことをきかない。

ようやく二人が槍を構え直した時には、既に二呼吸分の時間が経って



いた。

「何奴！」

「魔物か！」

口々に叫んで衛兵が槍を突きつけようとした瞬間、それまで身動き一つしなかった男が静かだが腹に響く声で言った。

「馬鹿者。たとえ私の顔を知らずとも、この刺青に聞き覚えがあろう」

鋭い、針のような視線で衛兵を射る。二人はその眼に気圧されて思わず後ずさった。左の衛兵があっと短く声を漏らす。

「もしや……グレブナーグ様で？」

男がその衛兵を睨みつけた。

「もしや、ではない。伴ったなら早くその槍を下ろせ。私は中に用がある」

すぐさま敬礼の姿勢をとる衛兵たちを尻目にかけて、男　グレブナーグはカント寺院の中へと入っていった。

戦士を中心に侍、ローブそして忍者といったクラスで固められたトレボー近衛隊の中で、数少ない魔法使いにしてトレボー王の頭脳とまで呼ばれているのが、この男、グレブナーグであった。

魔法使いの呪文は全て身につけ、現在のレベルは15。戦における軍師としての天才的な能力と、顔中に施された奇怪な彫物から、“仮面の魔人”として敵味方双方に恐れられている男である。

勇猛ではあるが直情的なトレボーが、相次ぐ戦役で順調に領土の拡大を続けてこれたのも、例の魔除けの力と、グレブナーグの練り上げた戦略によるところが大きい。ワードナから魔除けを奪還するた

めに冒険者を募るという計画を立案したのも、実のところはこの男であった。

トレボーの懐刀として全幅の信頼を受ける、近衛隊きっての切れ者である。

赤い絨毯を踏みしめて、グレブナーグは寺院の奥へと進んでいた。

院内の雰囲気は暗く、冷たい。高い天井と壁の接点に設けられた明かり取りから光は入るものの、むしろ回廊の両側の壁に灯された蝋燭のか細い光のほうが強く感じる程度でしかない。

回廊は寺院の外観からは想像もつかぬ程長く延びていた。途中見事な彫刻で装飾された扉が幾つも壁に並んでいたが、グレブナーグはわき目もふらずに正面の、通路の終わりにある大扉に進んで行く。

グレブナーグが閉ざされた大扉の蔵き金を鳴らすと、眼の高さの横に細長いのぞき窓が開いた。そこからのぞいた眼が彼を視認すると、扉は数秒と待たずに重々しく開かれた。

扉の中は大きな礼拝室であった。

壮麗な祭壇の前には、二十名余りのカント僧が一堂に座して黙祷を捧げている。正午から始まる礼拝のために、寺院中のほとんどの僧が集まっているのである。

深々と頭を下げる扉番の老僧を無視し、グレブナーグは僧たちを回り込んで更に奥へと向かう。

礼拝室をはさんで丁度大扉の反対側に、地下へと通じる狭い階段が祭壇の陰に隠されていた。彼は慣れた手つきで隠し扉を開け、階段を下り始めた。

階段は緩やかな螺旋を描いて一本道に下っていく。礼拝の低い詠唱が響いてくる他は、グレブナーグの足音以外何の物音もしない。

高さにして三階分は下りた頃、ようやく視界が開けた。

そこは直径10m程の、ドーム状の地下室だった。すり鉢を伏せた形に壁と天井が一体化している。

その中央に、奇怪な祭壇が据えられていた。小型の棺のようなそれは黒い樫の木で組み上げられ、両端に角のある髑髏の像が向かい合わせに設置されている。像の大きく開かれた口の中には、赤い蠟燭が不吉な青い炎を揺らめかせていた。

そして像と像の中間、つまり祭壇の中心に信じられぬものがあった。

豚鬼の首である。半ば腐乱しかけたオークの頭部が、左右から青白い炎に照らされて一層不気味な陰影をつけていた。

忌しい邪教の呪術であった。それが、こともあろうに聖地であるカント寺院の地下深くで行われているのである。

祭壇をひとしきり見回すと、グレブナーグの顔にぞっとする笑みが浮かんだ。

「万事うまくいっておるわ。オークの頭も魂の炎もまだまだ持つ。これもこの地下室の霊的力場が並外れて強いおかげよな」

と、その時背後の階段から人の降りてくる気配がした。

振り向いたグレブナーグの目の前に、歳老いた僧侶が現れた。他の僧よりも重厚な趣きの法衣をまとった、見るからに位の高そうな僧である。

グレブナーグが来たのを聞いて、すぐさま駆けつけてきたらしい。半分息を切らせながら、老僧は怒りに燃えた眼で彼を見つめていた。それをグレブナーグは涼しい顔で受け流している。

「勝手に邪魔している、司祭殿」

「これはどういうことだ、グレブナーグ殿」

老司祭は湧る感情を必死に押さえて、ようやく言った。「我々には手も触れることの許されぬ汚れた邪教の祭壇を、この寺院の最も神聖な基部に置くなど儂は聞いておらん」

ふふん、とグレグナーグはせせら笑った。「話せば色々と面倒になろう。この程度のことでいちいち目くじらを立てなさるな」

「聖堂内に怪物の屍まで持ち込んでおいて何を言う！　そんな所業を認めている寺院などこの世にはないわ」司祭の身体が小刻みに震える。「それにあの雲は何だ？　あれはまさしく7つの領域を超える強大な魔法によって引き起こされた魔法雲。しかも我が寺院がその中心ではないか！　まさかこの場所で禁忌とされる古の呪法を行っているのではあるまいな。今日は朝から貴公が来るのを待って

おった。即刻その忌わしい祭壇を片付けて……」

「黙りあれ、司祭殿」グレブナーグがぴしゃりと言い放った。

有無を言わせぬ口調である。カント寺院の最高位である司祭に対し、遠慮というものがまるでない。

「よろしいか、司祭殿。私はトレボー陛下の勅命によって動いているのだ。私のやっていることは全て、陛下の御意志によるものと思って戴く。この意味が判るな」

「それ故我が教団の中でも許された者にしか入れぬこの場所に、部外者である貴公の立入りを許したのではないか。だが今貴公が行っているのは邪神崇拝に端を発する暗黒の呪法。このような真似を許しては教団の権威は地に落ちる。認める訳にはいかん」

「いい加減にしたらどうだ」グレブナーグの口調が威圧的なものになった。「私は許可を求めているのではない。この城塞都市はトレボー陛下の直轄領、いざとなれば衛兵数人どころか、一中隊を率いてこの寺院を制圧しても何ら構わぬのだ。あなたが使用させぬというのであればな」

司祭の顔色が変わった。

「何と、この伝統あるカント寺院を軍卒どもに踏みにじらせると」

「左様。あなたの許可など、私にとっては少少手間が増えるだけのことだ」

そう言うと、グレブナーグはもはや意気衰えた司祭に背を向け、邪教の祭壇に向き直った。

「早く立ち去るがいい。呪文の詠唱が始まると、ここはあなたたち僧侶の言う邪悪な瘴気に満たされる。司祭殿がその気をまとわりつかせていたのでは恰好がつきますまい」

司祭は力なく小ドームを出ようとしたが、ふと立ち止まり一言呟いた。

「人の魂を弄ぶのは滅びの魔法ぞ、グレブナーグ殿……」

聖域に漂う穢しき風の匂い

「それはお互いのこと。昨日の件では世話になった。後で礼を届けさせよう」

司祭が立ち去ると、グレブナーグは再び寒気のするような笑みを浮かべた。

「本来なら命を引きかえにする術が片手間で行え、邪魔な者は自然に葬り去れる。何も治療や蘇生ばかりが、カント寺院の使い途ではないわ――」

グレブナーグの両腕が、マントの下から差し上げられた。青い炎がかすかに揺れる。

「闇の御霊よ！」

蠟燭が激しく燃え上がり、像の口から炎が噴き出したかに見えた。

呪文の詠唱が始まった――

SCENE 14

§DEEP FLOORS§

そこは、血の海だった。

スカルダたちの足元に、大量の血液が飛び散っていた。

地下９階。最下層10階へと続く唯一の侵入口が開いている玄室である。

ハ・キムらの仕組んだ大蜘蛛の罠をスカルダの機転で鎮静化してから、約半時間が経過していた。

その遅れを取り戻すべく、地下４階南端の第２エレベーターで一気に

降下したのである。

地下９階に到達した時点で、強い血の匂いが周囲に充満していた。すぐ目の前にある扉から、むっとする臭気が流れ出してくる。

扉を蹴破り、玄室になだれ込んだ一行が眼にしたのは、己れの血と臓物に埋もれて転がっているモンスターの一群であった。

炎巨人に忍者、そしてレッサーデーモンの混成部隊だったらしい。怪力の巨人に魔力に秀でた悪魔、一撃必殺の技を持つ忍者の揃った、この階層でも相当手強い連中の筈である。

それが、完膚無きまでに叩きのめされていた。

炎巨人は冷気系の呪文で徹底的に攻められたらしく、数体ある屍は皆どす黒い紫色に変色している。部分によっては完全に凍結し、砕けてすらいた。

レッサーデーモンは人の倍ほども背丈のある、耐久力に優れた四本腕の悪魔である。それが胴を真一文字に切断され、床で絶命している。本来の棲家である魔界に戻る間もなかったようだった。

赤装束の忍者に至っては、全く原形をとどめていない。肉塊と化したものが床にこびりついているようにしか見えなかった。

床のところどころにある黒い染みは、どうやら解呪されたナイトストーカーであるらしい。相手の精気を吸い取り、積み重ねた経験をも奪うエナジードレイン攻撃を持つ恐ろしい不死怪物であったが、高レベルの僧侶の手にかかってはひとたまりもない。

ハ・キム、ゴグレグの悪のパーティの仕業であった。

恐るべき手並である。

地下９階ともなると、そこに棲む怪物の力は凄まじいの一言に尽きる。大炎クラスの呪文を覚えているものはざらで、多くの魔物が強力な火炎の息やエナジードレインなど、一瞬の気の緩みで即、パーティに壊滅的な打撃を与える特殊能力を備えているのである。耐久力も桁外れに高い。

それを、いかにも造作なく、一方的に屠ったのだ。

ハ・キムたちがこれ程の実力を持っていたとは、正直言ってスカルダも考えが及ばなかった。

「この切り口は凄いな」

レッサーデーモンの屍を見てガディが唸った。「ゴグレグだ。普通こうは斬れない」

「解呪も見事だ。五匹のナイトストーカーが完全に塵と化している。アルハイムめ、あ奴各地で学んだ呪法を解呪に取り入れておるらしい」

ベリアルが黒い染みに触れて調べる。バルカンも興味深そうにその様子を見ている。

「かなりのものね」サラが言った。「このぶんじゃ彼ら、すぐにでもワードナを倒しに行きそうだわ」

「おいおい、冗談じゃねえぜ。ここまできてハ・キムの馬鹿にワードナの首をかっさらわれたんじゃよ」

ジャバがスカルダを見る。

「急ごうぜ。今日中に以前のお前、とまではいかねえだろうが、レベル10ぐらいの調子は取り戻さなきゃ奴らに先を越されちまう」

「ああ」

「とにかくよ、俺はお前以外の奴と組んでワードナを倒すなんざまっぴら御免だからな」

有難い言葉だった。スカルダは無言でうなづくと、怪物たちの屍を乗り越えて玄室の奥へと歩き出した。

ジャバとは城塞都市にやって来た時以来パーティを組んできている。だが、今日この時ほど強い友情を感じたことはなかった。

玄室の北西の隅に、深い穴が口を開いていた。

床の厚い岩盤を、強力な酸のようなもので溶かした穴である。直径２mの円形の闇が、地中深くへと通じている。

ワードナの迷宮最下層・地下10階への、たった一つの侵入口であった。かつて、もはや全滅しかけていたワードナ討伐隊が、指揮官ナックラーヴの命のもと造った代物である。

ここを滑り降りれば、そこはワードナの根城となる。

スカルダはその穴の端に立ち、続いてきた仲間たちを見回した。

「行くぞ」

スカルダが飛び降りた。途中で緩い坂になるため、ロープの類は必要ない。

一定の間隔をおいて、全員が穴へと入っていく。

最後尾のサラが深い闇に姿を消した。玄室から、人の気配が消え失せた。

それが、ゆっくりと黒い羽根を伸ばした。紅い眼が妖しく光を放つ。

いつからそこにいたのか、高い天井の暗がりに大型の蝙蝠が一匹、逆さにぶら下がっていた。

それは不気味に眼を細めると、二、三度大きく羽ばたき、いずこへと飛び去った。その姿があっという間に闇に溶け込む。

再び静寂が訪れた。

（以下次号）

華麗な筆致でつづる剣と魔法の迷宮世界

小説ウィザードリィ

隣り合わせの灰と青春⑫

BY BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作　イラスト／末弥純・品川るみ

前号までのあらすじ

大魔術師ワードナから強大な魔法のアミュレットを奪い、大君主トレボーの近衛隊に取り立てられるべく日夜地下迷宮を彷徨う冒険者たち。その一人である若き戦士スカルダは、富や名声よりもさらなる力を求めて侍へと転職する。だが折悪しく仲間の魔法使いシルバーが蘇生に失敗し、スカルダの転職による能力減退も含めてパーティの総合力は大きく低下してしまう。代わりに参入したバルカンとともに迷宮へと乗り込む一行。しかし足並は乱れ、さらにライバルパーティであるハ・キムらの罠によって大蜘蛛の大群に襲われることになる。スカルダの機転で辛くも罠を抜け、一行はハ・キムの後を追う。途中徹底的に屠られた怪物の群れを目にし、ライバルたちの実力に脅威を覚えたスカルダは、急ぎ最下層へと続く穴に突入した。一方、城塞都市のカント寺院では、トレボーの側近グレフナークが妖しげな禁忌の呪法を取り行っていた。

SCENE 15

§ CAVERN OF WERDNA §

地下10階は地下迷宮というより、地下洞窟である。

他の階がワードナの魔力によって人工的に造られた迷路であるのに対し、この階はもともと地底の岩盤が固まる際に気泡がたまってできた空洞に、ある程度の手を加えて仕上げられた地下道だった。

壁は粗く削られて積み上げられた岩が、火竜やキメラの吐く炎によってガラス質を溶かされ、堅固に焼き固められている。天井や床は若干の傾斜がついているものの、もとが洞窟とは思えぬほどなめらかであった。大変な労力を必要とする作業であったが、巨人族という絶大な労働力を従えるワードナにとっては造作もないことらしかった。

怪物の手で造られた地底の魔窟である。悪の大魔術師として齢百以上を数えると言われるワードナの棲み家として、これ以上ふさわしい場所はなかった。

現在この階層にまで足を踏み入れているのはスカルダとハ・キムの2パーティのみで、それもここ一週間かそこらのことである。

それ以前にここに挑んだパーティも幾チームかはあった。だがほとんどの場合魔法使いが、中規模範囲の攻撃呪文では最強の大凍や低級な怪物なら瞬時に塵にしてしまう麻痺などの強力な呪文が属する5レベルの魔法域を覚えた途端に、己の力を過信して深入りするため、生きて帰ってきたパーティわずかに1チームであった。

そのパーティは、他の国で長年修業を積んできた、知識も経験も豊富なメンバーで構成されていた。スカルダたちがようやくレベル9に認定された頃、いきなりレベル12の実力を持って城塞都市にやってきて、すぐにでもワードナを仕留めるのではとの噂が立った連中であった。

中でもリーダー格だったドワーフの戦士は、北方の国で英雄視されていたほどの手練れだった。

しかしそのパーティも、生き残ったのはわずかにリーダーを含む二人だけである。誤まってワードナの部屋にまで入り込み、ワードナと護衛の怪物たちの先制攻撃を受けてしまったのだ。

慌てて転移の呪文で逃げた時には、もう二人だけになっていたという。そしてその二人も全身に治療不可能なまでに深手を刻まれ、城塞に辿り着いて間もなく息絶えた。

護衛の吸血鬼たちに4レベル分ものエナジードレインを受け、頭髪と髭が恐怖のあまり白く変色したリーダーが死ぬ間際にうわ言のように語ったことが、スカルダたち冒険者の持っているワードナの情報の全てだった。

地下10階は七つの地下洞に分かれており、その終点に怪物の護衛部隊が待機する玄室が造られている。各エリア間は転移地帯で一方通行に結ばれているので、言わば一本道のようなものであった。

ワードナの部屋である第7エリアを除いた各玄室には、それぞれ9階からの穴の真下に

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかり。
- ジャバ……パーティの一員。盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ベリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……謎の魔法使い。悪。
- 老エルフ……ダークゾーンに棲む術者。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- ワードナ……悪の大魔法使い。
- ハ・キム……レベル12の忍者。悪。
- アルハイム……レベル12の僧侶。悪。

テレポートする転移地帯も設けられていた。その横に地表まで脱出できる転移地帯まで用意されているところは、まるでワードナが冒険者に情けをかけているかにも見える。何せ転移の呪文なしで地表に戻るには、このテレポートを使う他ないのである。

護衛の怪物たちは、逆に一片の情もない凶悪な種族が揃っていた。

毒巨人を初めとする巨人族に、下手な魔法使いより高度な呪文をも操る竜族、更にはワードナ直属の、バンパイアロードを率いる吸血鬼部隊。ワードナに魂を売った高レベルの忍者や侍たちも加わって、その戦力は一軍団に匹敵するとも言われる。

そして、この層全域に、転移の呪文を妨害する結界が張り巡らされていた。強力な結界の魔法によって地下10階内へのテレポートは全て元の位置へと弾き返される。そのため呪文の温存がきかず、ワードナと戦うには最低でも護衛6部隊を撃破しなければならなかった。

今スカルダたちの握っている情報と言えば、この程度のことであった。

穴を降りたスカルダたちの前に、奇妙な石碑が置かれていた。

石碑には碑文が刻まれていた。その碑文が様々に色を変えて明滅している。

碑文は、魔法使いが好んで用いる古代文字で書かれていた。

ワードナの警告である。そこには、この層は自分の領地であり、それを侵す者には禍いが降りかかるなどという意味の言葉が並んでいる。

一行は石碑を一瞥すると、無言で洞窟の奥へと歩き出した。

いつもならこのような石碑にすら悪態をついてみせるジャバも、表情を厳しく引き締めたまま一言も発さない。

冒険者一の実力を秘めたパーティと言えども、やはり最下層の怪物どもはなめてかかれなかった。一瞬の判断の遅れをついて、全員に大打撃を与えてくる化物も数多い。

先頭を切るジャバは、可能な限り感覚を研ぎ澄ませていた。

曲がりくねった地下道は、第1の玄室までかなりの長さで続いている。

その曲がり角から、いつ巡回する魔物の集団に出喰わすとも限らないのだ。

だが、ジャバの意識の奥深くを別のものが占めていた。

――ラシャ。

不意に赤毛の少女の顔が頭に浮かび上がって、ジャバはハッと現実に引き戻された。

――何だってんだ、あいつは。いちいち俺に反撥しやがって。

彼の意識の中で、ラシャが今よりずっとあどけなく、幼い表情になる。

ジャバは自分が生まれ、15の歳まで育った村のことを思い出していた。

その村はこの城塞都市から南に三日ほど旅する、トレボー領にほど近い隣国にあった。

山での放牧を中心に、わずかばかりの農耕で暮らしを立てている貧しい小村である。

村に一人しかいない猟師の息子としてジャバは生まれた。

母は彼を産んで一月と経たずに死んだ。まだ歯も生えぬ彼の乳母を買って出たのが、ジャバに少し遅れて生まれたラシャの母であった。

彼が二歳の時に、父が人喰い熊と相討ちになって命を落とした。それからは、ラシャの家族がジャバの家族となった。

二人は本当の兄妹のように育った。

彼らが14歳になった年に、酷い旱魃が村を襲った。その年は作物の収穫がほとんどなく、家畜の山羊が何匹も死んだ。

ラシャの父が飼っていた山羊も半分以上が死に、翌年から雌は子供を生まなくなった。

ジャバがワードナ討伐の話を聞いたのはこの頃だった。作物の種もなく、家畜が減った今、とても四人では暮らしていけない。

ラシャの両親は彼を自分たちの息子として

育ててくれたが、彼はためらわずに村を出た。そうしなければ、家族が皆飢えることになる。

それに、トレボーの近衛隊に入れれば、晴れて王城に家族を住まわせることもできる。

そうして、ジャバは冒険者となった。

強かった父にあやかって戦士になりたかったが、相性が彼には素養がなかった。しかし人間にしてはかなり手先が器用で、強運に恵まれていたために、盗賊になれた。彼のように何の訓練も積まずにやってきた者の大半が、冒険者のどの職種も選べずに追い返されたのだから、かなりの幸運である。

同じ頃、新参者としてやってきたスカルダ、サラとパーティを組み、以来ずっと修業を続けてきた。

ラシャが彼の後を追ってきたのは、半年後だった。

彼女もまた、盗賊以外には向いていなかった。彼女がジャバの前に現れた時には、既に冒険者としての登録を済ませ、革の鎧に身を包んでいた。

兄と慕うジャバと共に暮らしたくて、考えた末の行動である。だが、一つのパーティに二人の盗賊は不要であった。

ジャバは村に帰るよう諭すとともに、彼女のパーティへの参加を断った。

当然ラシャは反撥した。そして当てつけるようにあちこちのパーティを渡り歩いた。

ハ・キムたちのパーティに入ったのは、アルハイムのやってきた三ヵ月前であった。

――あんな奴らと一緒にいて、あいつまで染まっちまったんじゃ、あいつの親父とお袋に申し訳が立たねえ。

そんなことを考えているうちに、いつしかジャバは周囲に神経を使わなくなっていた。

通路が大きく右に曲がっていた。その先の死角に、最初の玄室がある。

小さく呼びかけられて、ジャバはようやく埋没しかけていた意識を呼び覚ました。

呼んだのはガディだった。ジャバが足を止め、全員が停止する。

「何かの気配だ。扉の前辺りに、一人だけじゃなさそうだぞ」

扉とは、玄室の入口である。その前に、何かがいるらしかった。

「怪物かしら？」サラが尋ねる。

「まずそうだろうが、どんな奴かまでは判らないな」

ガディの聴覚は恐しく良い。扉の前にいる何かがたてた音を、誰より早く拾い上げたのである。

「音からして、大きな奴じゃなさそうだ。せいぜい人間程度」

「人間だ。二人のようだな」スカルダが言った。彼は音ではなく呼吸によって生じる気配を読んでいるため、より相手の像が絞り込める。

「二人組というと高位僧といったところか。よし、私が最初に静寂で連中の呪文を封じる。あとはまかせるぞ」

そう言ってベリアルが僧侶呪文特有の韻律

を持つ呪文の詠唱を始める。相手の位置まで判っているのだから、死角から出た瞬間に呪文を投げかけられるようタイミングを計ることもできる。

一行は素速く行動を開始した。

ジャバ、ガディとスカルダが密集隊型をとり、そのすぐあとにベリアルが続く。サラとバルカンはもしもの事態を考えて、いつでも援護の呪文が唱えられるように身構える。

それぞれ小型ランプを盾や衣服の陰に隠し、相手に気取られぬように通路を進む。

玄室の扉が死角から出た。

次の瞬間、静寂の呪文が低い唸りをあげてベリアルの口から奔しった。

薄暗い扉の前で、スカルダたちに気づいた僧侶が何か叫ぼうとする。が、既に呪文が効果を現しているので言葉にならない。

その際に前衛3人が突進していた。

ジャバは、ようやく立ち上がりかけている人影に向かった。

相手は無防備である。あとは剣を振り回すだけで首が容易に落ちる。

しかしジャバは何かが心に引っかかっていた。百分の一秒にも満たない間に、その奇妙な異和感が形れあがる。

今、目の前で立ち上がろうとしている相手のその動作に、どこか見覚えがあるのだ。まさに剣を振ろうとしている腕に、無意識下に抑制がかかる。

盾を持つ手を後ろに引いたため、ランプの光が漏れた。その光が赤毛と革鎧を照らす。

それは、ラシャであった。

「!」

ジャバは完全に動きを止めた。

眼前まで迫ってきた甲冑の人影に驚愕と恐怖の表情を見せていたラシャが、やっとそれが誰であるか気づいた。その好が確かめるように〝ジャバ?〟と動く。

もう一人に切りかかろうとしたガディとスカルダも、その場に立ち止まっていた。

高位僧と見えたもう一人は、アルハイムであった。

前衛たちが動きを止めたのを見て何事かと駆け寄ってきたベリアルたちも、相手が誰であるか気がついた。

鋼でできた玄室の扉のほぼ中央にアルハイムは立っていた。ガディのかざしたランプの光がその顔の上で踊る。

アルハイムの顔は、黄色く薄暗い明かりの下でもはっきり判るほど蒼白であった。いつも口の端にへばりつかせている皮肉な笑みも浮かべてはいない。

その時、やっとベリアルの呪文の効力が消え去った。

アルハイムの口元がわずかに歪んだ。無理に微笑もうとしていたようだった。

「随分早く追いつかれましたね。大蜘蛛はどうやってかわされたのです? 転移、それとも変化を五、六回ですかね?」

アルハイムは明らかに虚勢を張っていた。

「大層な罠を、御苦労だったな。だが今その話をするのはやめておいてやろう」スカルダが言った。

「――」

「そんなことより、何故こんなところにラシャと二人だけでいる? まさか地下10階で仲間割れもないだろうが」

「てめえ、ラシャにおかしな真似をしでかそうとしたんじゃあ――」ジャバが口を挟む。

「そんなんじゃないのよ、ジャバ」

震える声でラシャが呟いた。「ハ・キムたちは死んだわ。あっという間に、あの青い化物たちに……」

「何!?」スカルダが額頬を跳ね上げた。「ハ・キムや、ゴグレグがか? それに、青い化物って言ったな」

「そうよ。あたしとアルハイムはたった今、その扉から逃げてきたのよ」

そう言ってラシャは激しく肩を震わせた。感情が昂って、涙が溢れ出す。ジャバがその肩に手をかけた。

スカルダは重く、頑丈な鋼の扉に目をやった。その隙間から今にも、魔界の瘴気が噴き出してくるような気がする。

蒼き悪魔の咆哮が聞こえてきそうな、それは最下層への入口。

ハ・キムたちを襲った青い化物が何であるか、彼は確信を持っていた。
――奴だ。シルバーの命を奪い、俺をあざ笑ったあのグレーターデーモンが、この扉の向こうにいる。
そう思うと、全身の血が凄い勢いで逆流しそうであった。
「扉は魔法で施錠しました。たとえあの巨大な怪物でも、しばらくは開けられませんよ」
アルハイムが大きく息を吐いた。もう意地を張るのはやめたらしい。
「あとは私から話しましょう。我々のパーティが一瞬にして壊滅したさまをね」

SCENE 16
§ DEATH BLOW §

ハ・キムらは地下９階の玄室で手際良く怪物を片付け、意気揚々と最下層の地下道を進んでいた。
「ひひ、最高にいい気分だぜ。調子は上々だし、スカルダの奴らはそうすぐには降りて来れねえ筈だしよ」
「そう滅多に手には入らない香料でしたが、あれだけ蜘蛛が集まれば高い金を払った甲斐もあったでしょう」策がうまくいき、アルハイムが得意げに言う。
さざ波のように、サンドラとルードラの含み笑いが響く。ゴグレグはにこりともせず、周囲に気を配っている。
「本当に、ジャバは大丈夫なんでしょうね？」ラシャがアルハイムを睨んだ。
「もちろん。考えてもごらんなさい。いくら二百もの大群とはいえしょせんは大蜘蛛。彼らが命まで落とすような相手じゃありませんし、万一毒を受けたとしてもベリアルなら容易に治せるでしょう。それに、命に関わるほどの妨害は恨みになります。私はあの人たちを敵に回したくはないですからね。ただの足止めですよ」
「あれだけ邪魔すればもう敵に回してるようなもんじゃない」
「そんなに心配か？　可愛いもんだな、ラシャよ。ひひひ……」ハ・キムが歩きながら振り返り、眼を細める。「いいんだぜ、パーティを移っても。俺もようやく罠を外すのが板についてきたしよ」
「よしてよ。ジャバが頼んでこない限り、絶対あのパーティには入らないわ」ラシャが横を向いた。
ハ・キムはさもおかしそうに喉を一、二度鳴らすと、前に向き直った。
「ま、ワードナを殺るのは俺たちだ。もしジャバの奴に頼まれても、今抜けるのは損ってもんだぜ」
最初の玄室の扉は、もう目の前にあった。
ハ・キムが扉に忍び寄り、耳をつけて音を探る。もし護衛たちが待ち伏せているなら、押し殺した息遣いの一つも聞こえてくる。
だが、そんな気配はなかった。
ハ・キムの片手が上がるのを合図に、全員が態勢を整える。ゴグレグが扉に近づき、ハ・キムと共に手を掛けて、押した。
扉は滑らかに、ゆっくりと開いた。と、同時に一行は玄室内になだれ込む。
玄室は地下洞窟をさらにくり抜いた、小型の闘技場のようだった。
その中央に、二人のホビットが座っていた。赤い装束に身を包んだ、先刻地下９階で倒した忍者と同じ奴である。
ハ・キムたちにとっては、さして恐くもない相手だった。
「ひひ、ゴグレグよ、一気にたたむぞ」
ハ・キムが疾風の速さで突進した。その後ろを巨体に似合ぬ敏捷な動きでゴグレグが追う。
二人の忍者がゆらりと立ち上がった。
――？
アルハイムの中にぞくりとする悪感が生じた。忍者の様子がおかしい。
「ハ・キム！　気をつけろ、そいつらは――」
そう叫んだ瞬間、忍者たちの背後に淡い青色の火球が出現した。それが見る間に音もなく膨れあがる。
ハ・キムとゴグレグが突進をやめた。
火球は鼓動するように伸縮を続けている。大きさは既に直径３ｍ以上になっていた。
赤装束の忍者たちは、動きを止めたハ・キムたちに襲いかかるでもなく、火球の前に直立している。何かに憑かれているようであった。
青い炎の中で、何かの影が蠢いた。
「何だ？　こりゃあ」
ハ・キムがその言葉を言い終える前に、炎の中から鋭い４本の爪を持つ、巨大な青い腕が飛び出してきた。それが横薙ぎにハ・キムを襲う。
「ひっ」
完全に虚を衝かれたハ・キムは、自分の手首ほどの太さがある爪に、胴を思いきり薙ぎ払われた。軽量のハ・キムは面白いように弾け飛び、側面の壁に叩きつけられる。
それが合図であったかのごとく、同じ火球が周囲に一斉に現れた。最初のものを含めて六個の火玉が玄室内を埋め尽くす。
が、はあああ……。
火球の中の影が、煙状の息を吐き出した。
炎が消えた。
朦朧とする意識の中で、ハ・キムは６体の巨大な悪魔が次々と実体化するのを見た。

（以下次号）

隣り合わせの灰と青春 13

by BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作　イラスト／末弥純・品川るみ

前号までのあらすじ

大魔術師ワードナから強大な魔法のアミュレットを奪い、大君主トレボーの近衛隊に取り立てられるべく日夜地下迷路を彷徨う冒険者たち。その一人である若き戦士スカルダは、富や名声よりもさらなる力を求めて侍へと転職する。だが折悪しく仲間の魔法使いシルバーが蘇生に失敗し、スカルダの転職による能力減退も含めてパーティの総合力は大きく低下してしまう。代わりに参入したバルカンとともに迷宮へと乗り込む一行。しかし足並は乱れ、さらにライバルパーティであるハ・キムらの罠によって大蜘蛛の大群に襲われることになる。スカルダの機転で辛くも罠を抜け、ハ・キムを追って最下層へと突入した一行の前に、ハ・キムのパーティのメンバーであるアルハイムとラシャが現れる。スカルダたちと同等の実力を持つライバルパーティが一瞬にして壊滅させられ、二人はほうほうの体で逃げてきたのである。驚く一行に、アルハイムはその戦いの様子を語り始めた……。

SCENE 17

§ DEATH BLOW 2 §

ハ・キムを払い飛ばしたそれは、両腕を床につけ、しゃがみ込んだような姿勢で姿を現した。

それでも優に人の背の二倍はある。立ち上がれば、この玄室の天井近くまで届くであろう。

まさに巨大な悪魔であった。同じ魔界に住む種族レッサーデーモンも巨人族並みの巨体であるが、さらに二回り以上の大きさがある。

四肢には太い筋肉の束が幾本も浮き出し、その怪力を物語っている。

両腕の先に、剣のような爪が四本ずつ突き出ていた。一本一本が恐しく太く、鋭い。岩をも切り裂きそうな爪である。

その爪が床を軽く掻いた。まるで金属をこすりつけたような堅い音が響く。

背から、ばさりと翼が広がった。

がしゅう――。

噛み合わされた無数の牙の間から、蒸気と化した息が吐き出される。その向こうで、瞳のない無表情な眼が鈍く光る。

思わず恐怖で身をすくませてしまうような生物であった。

額からは羊のように太く曲がった角が、左右に二本生えている。その下に、猿の頭骨に似た顔があった。が、むしろ印象は爬虫類に近い。鋭利な牙が、耳まで裂けた口から溢れ出たかの如く生え揃っていた。

その口がゆっくりと、歪に開いた。丸い眼の上下から瞼が覆い、針のように細くなる。

笑っていた。自分たちより劣った者をあざ笑う、高い知脳を持った生命体の表情であった。

それが、立ち上がった。

背後にやや遅れて実体化した五体も、次々と巨体を揺るがして陵を上げる。

冒険者一の実力を持つと言われたスカルダのパーティを、たった一匹で敗走させた魔物である。その怪物が6体。

凄まじい部隊であった。

だが、アルハイムらはまだ、その力を知らない。

「ハ・キム！」

たった今思いきり石壁に叩きつけられたハ・キムに向かってアルハイムが叫ぶ。

あの爪の一撃をまともに喰らったのである。いくら強靱な魔法の防具・悪の鎧を着けているとはいえ、打撃による肉体の損傷はまぬがれない。常人であれば全身の骨が砕け散るほどの一撃であった。

肉体を鍛え抜いた忍者のハ・キムであれ、死んでいても不思議はなかった。

アルハイムの叫びで、ハ・キムの混濁した意識が呼び戻された。途端に激しい痛みが全

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかり。
- ジャバ……パーティの一員。盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ベリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……謎の魔法使い。悪。
- 老エルフ……ダークゾーンに棲む術者。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- ワードナ……悪の大魔法使い。
- ハ・キム……レベル12の忍者。悪。
- アルハイム……レベル12の僧侶。悪。

成されるがままの地獄絵の如し。

身を包む。肋が数本まとめてへし折られていた。

その激痛が、失神直前の意識を現実につなぎ止める。

彼は渾身の力をこめて跳ね起きると、信じ難い速さで地を疾った。

肉体そのものを凶器と化した忍者ならではのタフさである。

同時にゴグレグが、先頭の一匹に突進する。

赤装束の忍者がその行手を塞ごうとした。

「むっ」

ゴグレグはスピードをほとんど緩めず、右手の剣を斜めに振り降ろした。忍者が手甲をつけた腕でそれを防ごうとする。

しかし剣は止まらなかった。忍者の腕を手甲ごと切断すると、そのまま左肩から右脇腹まで真っ二つに切り裂いた。

凄まじい剣の威力である。切り裂きの剣と呼ばれる、カシナートの剣より若干劣る普及品だが、ゴグレグ専用に打ち直されて通常の倍は重さがある。その破壊力もさることながら、使いこなすゴグレグの腕力はとてつもないものがあった。

絶命した忍者を弾き飛ばして、ゴグレグはグレーターデーモンとの間合を一息に詰めた。ハ・キムがその横を走り抜け、後方の一匹へと向かう。

鋭い気合と共に、ゴグレグの剣が空気を裂いた。体重を乗せ、魔物の下腹部に切りつける。先刻レッサーデーモンを軽々と屠った一撃である。

剣がグレーターデーモンに触れた瞬間、ゴグレグは勝利を確信した。いかに巨体の怪物でも、この剣を腹部に受ければ致命傷になる。

だが彼の腕に伝わってきたのは、刃が肉を裂く感触ではなく、岩を叩いたような衝撃であった。

――ぬ!?

剣は魔物の腹にわずかに刃先を喰い込ませて止まっていた。それが筋肉の力でみるみる弾き出される。

がしゅっ。

遥か頭上にあるグレーターデーモンの口から大量の蒸気が放出された。

ゴグレグが飛び退く。それまで彼のいた空間を太い爪が凄い勢いで薙いだ。

後退するゴグレグの眼に、別のグレーターデーモンの身体を駆けあがるハ・キムの姿が映った。急所である頭部を狙っての、忍者独特の戦法である。しかしこれほど巨大な相手となると、ハ・キムの身軽さがなければできる芸当ではない。

己の5倍近い身長の化物に苦無を突き立て、ハ・キムは猿のような動きで登っていく。が、そこまでだった。肋骨のダメージがそのスピードを大きく殺していた。

グレーターデーモンの腕がハ・キムを捕えた。肩から引きはがすと、一度天井の高さにまで差し上げ、一気に床に投げつける。

「がはっ」

肺の中の空気が全て押し出された。岩盤に弾かれ、ハ・キムは大きくバウンドする。

再び床に落下する直前に、もう一人の赤忍者が視界に入ってきた。それが、ハ・キムの見たこの世で最後の光景であった。

赤忍者の剣が閃き、ハ・キムの首が転がる。その先に、踏み降ろしかけたグレーターデーモンの足があった。

胸の悪くなる音が響いた。骨が潰れ、液体の飛び散る音だ。グレーターデーモンの足の下で、ハ・キムの頭が踏み砕かれたのである。

こうなっては、いかなる魔法をもってしてももはや蘇生は不可能であった。

サンドラ、ルードラ兄妹が同時に同じ呪文を魔物の群れに投げかけた。二人の周囲の空気が張り詰め、温度が急激に低下する。

冷気で敵を凍結し、細胞を破壊していく呪文、大凍である。攻撃範囲は中規模だが、二重にかければ爆炎に匹敵する威力となる。現在この二人のできる最大の攻撃であった。

グレーターデーモンたちの中心で、空気が音を立てて凍り始める。その冷気が瞬時に拡大し、魔物は吹き荒ぶ氷雪の地獄に包まれる――筈であった。

だが、呪文はかき消えた。

呪文の無効化である。己にかけられた魔法を中和する、不死怪物や魔族などの一部が持つ強大な魔力だった。

サンドラとルードラが大きく眼を見開く。その刹那に、自分たちがたった今唱えたものと同じ韻律の詠唱が聞こえてきた。二人の顔に怯えの表情が疾る。

新たな火球がゴグレグの目前に出現した。魔界との接点である火球を通じて、新手のグレーターデーモンが実体化しようとしている。

「がああっ」ゴグレグが吼えた。

「やめろゴグレグ！　逃げるんだ！」

アルハイムが叫ぶより先に、ゴグレグの身体が火球の中に飛び込む。青い炎の中で二つの影がひとつにからみあい、火球とともに消失した。

―大凍が来る。

「逃げろ！」

魔物たちに背を向け、アルハイムが走り出す。その目の前に、茫然自失のラシャが棒立ちになっていた。

アルハイムは盾を投げ捨て、その腕でラシャの細い腰を抱えた。

押し開けられたままの扉に向かってアルハイムが走る。その後ろにサンドラたちが続く。

二体のグレーターデーモンが両腕を広げた。太い喉から絞り出される大凍の低い詠唱が、互いに共鳴し合って空気を震わせる。

アルハイムが玄室から転げ出ると同時に、想像を絶する冷気がサンドラとルードラを包む。二人の体内の水分が瞬時に凍結した。

アルハイムは振り向きざまに、あらゆる扉を一時的に閉めきる施錠の呪文を唱えた。扉が重い音を立てて閉じ始める。その向こうで、氷塊と化したサンドラたちが砕け散るのが見えた。

扉が閉まった。その扉に内側から大きな圧力がかかり、激しく軋る。

数秒の後、圧力がぴたりと消えた。それきり中からは何の物音も聞こえてはこなかった。

だが、アルハイムとラシャの耳には、獣の咆哮に似た魔物の哄笑がいつまでも鳴り響いていた……。

SCENE 18
§ FLACK §

「あのハ・キムが、あっさりとか――」スカルダが呟いた。

一行は玄室の前でキャンプを張っていた。

キャンプといっても、テントを用いての野営ではない。地下迷宮においては、魔物を寄せつけぬ結界のことを意味する。全員が車座になって、その周囲に聖水で魔法陣を描くのである。それで、もはや怪物は結界内の者に近づくことができず、呪文などで攻撃することもかなわなくなる。

ただしこの効果によって自分たちの呪文も攻撃性のあるものは全て封じこめられてしまうため、結界内に身を置いたまま敵と戦うこともまた不可能である。結界もさほどは持たず、あくまで短時間の休息用のものであった。

キャンプには、スカルダのパーティに加えてアルハイムとラシャがいた。

幾つものランプが中心に集められ、それを囲んで全員が膝を降ろしていた。

今ざっき、アルハイムの話が終ったところだった。

「恐らくゴグレグも生きてはいまい。火球は魔界とこの世界をつなぐ扉だ。あの中に飛び込んだなら、行きつく先は魔界――炎が渦を巻き、氷雪が荒れ狂うという異次元世界であろう。魔族でなければ一刻ともたぬ」

ベリアルが静かに言った。

「百戦錬磨の戦士でも駄目か――」ちらちらと燃えるランプの炎を見つめ、ガディがため息をつくように言葉を漏らす。

「身体の造りが魔物とは違うからな。我々の肌では焼けただれ、あるいは凍傷となってその部分が死に始める」

「……」

その時、スカルダとの一件以来ほとんど喋らなかったバルカンが口を開いた。

「どうするのだ。助けに行くか」

嘲笑の響きがあった。

「助ける？　ゴグレグをか」スカルダが聞き返す。

「魔界に突っ込んだ愚か者のほうではない。この扉の向こうの、屍たちのことだ。この男の話では絶望的なようだが、死んでからまだ、一刻とは経っていまい。蘇生する可能性も残っているかも知れん」

「玄室に殴り込めと言うのか」

「ほう、怖いか」

バルカンの口調が挑発的になってきた。

「何だと」

「豚鬼にかける情はあっても、人助けをする度胸がないとは、大した偽善者よな」

「こんな時に喧嘩を仕掛けるのはやめた方が良かろう」

ベリアルが割って入った。「しかしどちらにせよ、進退はここで決めねばなるまいな、スカルダ」

「ああ。確かにこうしてはいられない」

鋭い視線をバルカンに向けてスカルダが言った。「今日はこれ以上の訓練を諦めて城に逃げ帰るか、それともこの扉の向こうへ進むか――」

「問題はまだあの悪魔どもがいるかどうかという事だな。あれが6匹ではまず勝ち目はない」

「ただ、私たちが魔界に適していないように、悪魔にとってこの世界は長時間実体化していられる所じゃない筈よ」サラが言った。「時間から考えて、魔界に戻っている確率の方が高いと思うわ」

「俺もできれば先に進みたい。人助けになるかも知れないしな」

そう言ってスカルダは再びバルカンを睨みつけた。その視線をバルカンが正面から受ける」

「パーティに悪の戒律の者を入れたという噂は本当でしたか」

ようやく皮肉な笑みを取り戻してきたアルハイムが顔をあげた。「夕べその話を耳にした時にはまさかと思いましたがね」

「俺が引っ張ってきたのさ。シルバーの代わりとなると、そうそういねえもんでな」

ジャバが答える。

「私たち悪を嫌っているのは、貴方だと思ってましたよ」

「確かに好きじゃねえ。だがな、お前らにワ

ードナの首を持ってかれるのはもっと嫌だったんでな」

「もうその心配もないでしょう」

アルハイムは半ば自嘲するように声に出して笑う。その顔が、急に何かを思い出したような表情を浮かべた。

「そろそろ施錠の呪文が切れる頃です」

全員が扉を見た。何も変化はない。

ほっとして視線を戻そうとした時、突如扉が内側に開いた。

「何だ」ジャバが立ち上がる。

「待て。まだキャンプは解くな」

スカルダは用心深く立ち上がると、結界の円陣から数歩と離れていない玄室の入口を見つめた。

扉は完全に内側へ開ききっていた。

ハ・キムたちの使っていたランプは一つ残らず消えたか、踏み砕かれたらしく、玄室の奥は闇に包まれている。スカルダがかざしたランプの光がかろうじて入口近くの床を照らし、もとはサンドラとルードラだったらしい氷片をきらめかせた。

「アルハイム、施錠の魔法は効果が消えるとわざわざ扉を開けてくれるのか？」

「いえ」

「見たところ中にあの化物はいないようだ。しかし扉が勝手に開くとも思えんな」

ベリアルが言った。

「別の護衛か？」

「誘っているようだな、まるで。少くとも今まで、この迷宮でそんな洒落た敵にお目にかかったことはない」

スカルダは眼を閉じ、闇の中に潜む何者かの“気”を感じ取ろうと神経を集中させた。だが、玄室内からは何の気配も届いてこない。彼が視線を向けると、ガディも同様だといった風に首を軽く振った。

スカルダは意を決した。

「行こう。俺たちの目的は怪物どもを倒して己の技量を磨くことだ。御招待に応じてやろうじゃないか」

「そうこなくっちゃ」ガディが身体の重さを感じさせぬ軽やかさで立上がった。

「ラシャたちはどうする？」

ジャバが傍らに座るラシャを見ながら言う。アルハイムはともかく、まだハ・キムたちの死から受けたショックから立ち直りきっていないラシャを放っておく訳にもいかない。

「一度キャンプを解いてから、二人だけで結界を張り直してもらう。部屋の中にいる奴を片けたら、転送地帯からでも地上に戻ればいいだろう。いいな、アルハイム」

「結構です。いざとなればこの回廊を戻って帰りますんでね」アルハイムが口の端を歪めて笑った。

全員が立ち上がった。スカルダたち六人が隊列を組む。

「行くぞ。何が出るかは知らないが、相当じれてる筈だ」

結界が解けた。一行は迅速に入口に接近し、内部の様子を窺う。その背後で、アルハイムが再び聖水を振り撒いて魔法陣を描き始める。

最初にジャバが、続いてガディとスカルダが玄室内に躍り込んだ。間を置かずに残りの三人も続く。

玄室の中央に、ハ・キムの首なし死体が転がっていた。倒れている辺りは大きな血溜りになっている。そこから少し離れた場所に、踏み潰されて肉塊になっているハ・キムの頭部があった。

手前には、胴を二つに切られた赤忍者がぼろ布のように床にへばりついている。さらに——。

ハ・キムの屍のすぐ横に、も

う一人の赤忍者が絶命していた。それはまるで、カント寺院に安置された死体であるかのように横たわっている。

――妙だな。あの忍者には外傷がない。

スカルダがその屍に異和感を覚えた時、光の届かない部屋の隅の暗がりから、ぞっとする笑い声が響き渡った。

“ようこそ我が小劇場へお越し下さった。久し振りのお客――そう、トレボー王の差し向けた討伐隊がやって来た時以来の観客だ。手厚く歓迎いたしますぞ”

子供と老人が一緒に喋っているような声だった。

闇の中から、何かが飛び出した。

それは緑色の球体に見えた。それが凄い速さで縦に回転しながら、緩い放物線を描いて部屋の中央に落ちていく。

丁度ハ・キムの屍のすぐ向こうで、球体は着地し、回転を止めた。

“近頃やっとこの階に、冒険者たちが辿り着くようになったと聞いてたのですよ。二つのパーティがね。どうやらその片方は、ここに転がってるホビットのようだ。お会いできなくて残念ですな”

球に見えたものが、膝を抱えて身体を丸めた小男だということに、スカルダはようやく気がついた。

小男は軟体動物の伸縮運動を想像させる動きで四肢を伸ばし、立ち上がった。

奇怪な男であった。身長がホビットよりも小さいのだが、肉体的な特徴は人間の成人をそのまま縮小したようである。

男は緑色の道化服に身を包んでいた。その腕に、妙な形の錫杖を持っている。

顔には、無機質な笑みを浮かべた老人の面を被っていた。両端の吊り上がった口から、ちらちらと桃色の舌が覗く。

スカルダが頭の中でその姿と名前を結びつける前に、サラが短い叫び声を上げた。

「フラック！」

“御存知とは光栄です、お嬢さん”

フラックと呼ばれた小男は一礼すると、とんぼを切って後退した。“実に素敵だ！観客がいいと、私の舞台にますます磨きがかかる。では、楽しんで戴こう。まずはパートナーたちの挨拶だ”

シャン！　シャン！

男の手にした錫杖の飾りが澄んだ音を立てた。それが少しずつ早く、リズミカルになってくる。

シャンシャンシャンシャン……。

びくり、とハ・キムの屍が動いた。

傷のない赤忍者が音もなく上半身を起こす。

二つになった赤忍者が床に臓物をぶちまけながら、のたうち始めた。

死者たちが動き出す姿を見て、スカルダは小男がどんな敵であるのかをやっと思い出した。

フラック――その小さな外見からは予想もつかない、危険この上ない魔物である。

フラックとは種族ではなく個体であった。一体いつからこの世に生き続けているのかも判らない。いわば魔物の突然変異体である。

古書によればこの魔人は、どんな竜よりも強大な炎を吐き、“傀儡”と呼ばれる術で屍に命を吹き込め、忍者の元となったとまで伝えられる超絶的な体術をも有し、毒や石化などあらゆる特殊な攻撃を繰り出してくるという。生命力は極めて高く、もし殺したとしても数日で再生する不死性まで持っていた。

伝説として語られる数々の魔物の中でも、太古の魔神に等しく恐れられる凶悪な妖魔であった。

――こんな奴までも、ワードナの手下になっていたのか。

初めて迷宮に足を踏み入れて以来、久しく感じたことのなかった戦慄がスカルダを貫いた。それほどまでに、このフラックの恐ろしさは人々の心の中に植えつけられている。

首のないハ・キムがむくりと起き上がった。片手にはまだしっかりと、莫無型の手裏剣が握られている。

五体満足なほうの赤忍者も、死者とは思えぬ早さで跳ね起きた。

その時、スカルダの背後から突風が、駆け抜けた。

――！

フラックと二体の生きた屍が閃光に包まれた。それが瞬時に弾け、爆発する。とてつもない熱量の炎が一面に広がった。

バルカンの爆炎の呪文である。

「やった！」ジャパが叫んだ。

「待て！　油断するな――」

スカルダの言葉が終わる前に、炎の中から二体の影が飛び出してきた。（以下次号）

急告!!
小説ウィザードリィ
●ハイパーエンタテイメントノベル●
「隣り合わせの灰と青春」
単行本化決定!!
おかげさまをもちまして、この小説が一冊の本にまとまります。発売は11月下旬を予定。最初から読んでる人、途中から読んでる人、また読んだことない人、ゲームのように楽しい小説を、ぜひ御鑑賞ください。後悔させません。　編集部記

隣り合わせの灰と青春 14

by BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作　イラスト／末弥純・品川るみ

前号までのあらすじ

大魔術師ワードナから強大な魔法のアミュレットを奪い、大君主トレボーの近衛隊に取り立てられるべく日夜地下迷路を彷徨う冒険者たち。その一人である若き戦士スカルダは、富や名声よりもさらなる力を求めて侍へと転職する。だが折悪しく仲間の魔法使いシルバーが蘇生に失敗し、スカルダの転職による能力減退も含めてパーティの総合力は大きく低下してしまう。謎の男バルカンを連れて迷宮へ乗り込んだものの一行の足並は乱れ、更にライバルパーティの妨害で大きく遅れをとる。だが、スカルダたちに匹敵する実力を秘めた悪のパーティも、転職の契機となった強大な魔物・グレーターデーモンによって壊滅的な打撃を受けていた。なんとか逃げのびたアルハイムとラシャをキャンプに残して玄室へと踏み込んだ一行の前に現れたのは、伝説と化した邪悪な妖魔フラックと、頭部を砕かれたままゾンビとなったハ・キム。バルカンの爆炎で、死闘の幕が切って落とされた……。

SCENE 19

§FLACK 2§

爆（ティル）炎は火炎の最高位呪文にありながら、大炎や猛炎の一連の火炎系とは大きく異なる原理を持つ。

火炎系呪文の破壊力の源は、発火によって対象物を燃焼させることにある。炎は魔力の度合に応じて倍加され、この攻撃を受けた生物は外部から破壊されていく。高熱が外皮を炭化させ、次第に内部を蝕んでいくのである。だが、爆炎の基本原理は、全ての物質を構成する原子の中心にある原子核を融合・分解させ、その際に発生する高エネルギーを利用する。核反応の生み出す圧倒的な力を爆炎に転化するのである。

無論実際の空間で原子核を反応させた場合、術者はおろかその一帯が瞬時に消し飛ぶだけのエネルギーが生じる。そのため、この呪文の効果を引き出すための核反応は異なる次元の空間で行われ、そのエネルギーのごく一部だけを現実の空間に呼び起こすのである。次元を超える際にエネルギーは更に失われることになるが、それでも猛炎の呪文の数倍、優に一千度以上の超高熱火炎を広範囲に発生させることができる。

そして、その炎は爆心から凄まじい勢いで放射状に四散する。刃と化した火炎が殺傷範囲内の生物を破砕し、焼き尽くすのである。

究極の攻撃呪文にふさわしい、異質な破壊原理の魔法であった。

スカルダたちの前方玄室のほぼ中央を中心にして、直径10数mの円状に炎の壁が燃えさかっている。バルカンの神速の爆炎がそこに浴びせかけられたのだ。

並の魔物なら、数秒で炭化してしまう火勢である。高熱に耐性を持つ炎巨人でも、これほどの火炎を浴びればショックだけで絶命しかねない。

フラックがこの呪文をまともに受けた時、さしもの妖魔も無事ではすむまいと誰もが思った。

だが、時を越えて存在し続けた魔物は、それ以上の耐久力を小柄な肉体に宿していた。

車輪のように回転しながら、フラックが炎の海から跳び上がった。回転が火の粉を弾き飛ばし、炎によるそれ以上のダメージを消し去る。

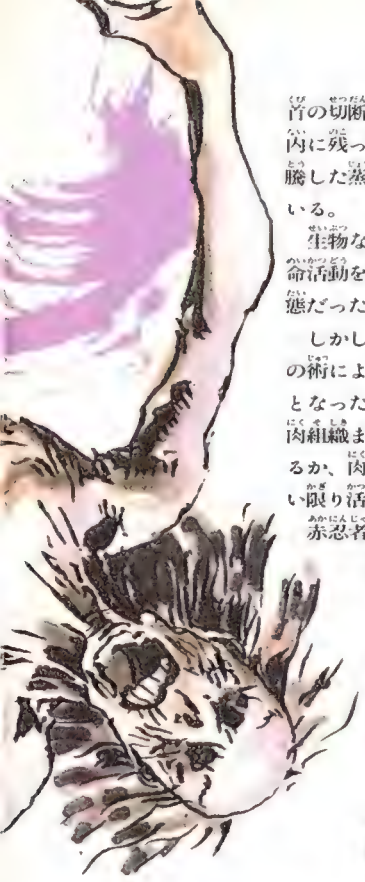
そのまま天井まで達すると、フラックは片手で天井にぶら下がった。

と同時に、炎の中から首のないハ・キムが飛び出していた。

装甲に覆われていない部分は半ば炭化し、

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかり。
- ジャパ……パーティの一員。盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ベリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……謎の魔法使い。悪。
- 老エルフ……ダークゾーンに棲む術者。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- グレブナーグ……トレボーの側近。魔法使い。
- ワードナ……悪の大魔法使い。
- ハ・キム……レベル12の忍者。悪。
- アルハイム……レベル12の僧侶。悪。
- ラシャ……レベル13の女盗賊。



首の切断面からはまだ体内に残っている血液が沸騰した蒸気を噴き上げている。

生物なら、とっくに生命活動を停止している状態だった。

しかしフラックの傀儡の術によって生きた死体となった者は、骨格や筋肉組織まで焼き尽くされるか、肉体を分断されない限り活動を停止しない。

赤忍者は爆風によって四散したが、事実上破壊不可能と言われる悪の鎧のために、ハ・キムの肉体は損傷をほとんど受けていなかった。

首のない死体が、矢のように動いた。そのスピードは生きていた時に比べて少しも衰えていない。むしろ無意識下の抑制がなくなり、腱の伸びきる限界まで肉体を駆使するため、以前にも増した動きになっている。

ゾンビなどの、操られた死体特有のぎこちない動作が微塵もなかった。

稲妻の速さで突進してくるハ・キムに、ガディの身体が反応した。カシナートの剣が唸りを上げ、ハ・キムの胴に叩き込まれる。

刃と装甲がぶつかり、激しい火花が散った。

ハ・キムは身体をくの字形に曲げ、炎の中にふっ飛んだ。丸太で殴られるようなガディの剣の一撃を、まともに鎧の腹部で受けたのだ。

元々鎧の装甲を破壊するために、様々な金属を絶妙の配分で溶かし込んだ高硬度合金を、極限まで鍛え上げて作られた代物がカシナートの剣である。いくら防護の魔法がかけられた鎧でも、ガディのような手練れが一振りすればたやすく刃が突き通る。

その剣で、胴部を薙ぎ払われたのである。自分の勢いも加わって、ハ・キムの身体は一気に両断されていてもおかしくなかった。

しかし、悪の戒律の者以外には禍いをもたらす魔性の防具・悪の鎧もまた、とてつもない防護能力を秘めていた。強大な呪いの力により、その装甲は硬く、それでいて柔軟性に富んでいる。

衝撃による肉体のダメージはともかく、悪の鎧それ自体は決して破壊されぬようになっていた。

首のないハ・キムは転がるように炎の中へと押し戻された。その炎が急激に弱まっていく。呪文の効力が消えかけているのだ。

天井のフラックがスカルダたちを見下ろしながら、狂ったように笑い始めた。

"ははは、惜しい！　もうちょっとで焼き殺されるところだった。そこの戦士の剣技も見事だが、どうやら私の傀儡には通用しなかったようだ"

そう叫ぶとフラックは前後に思いきり身体を振り、タイミングよく後方へ飛んだ。くるくると回転しながら、炎の壁の向こう側に降り立つ。

魔法の炎が消えた。

フラックの手前の床に、あおむけにハ・キムが倒れていた。鎧の隙間からぶすぶすと煙が立ち昇っている。

その焼けただれた屍が、再び起き上がった。

鎧に包まれていない上腕部や大腿部の、炭化しきった皮膚が次々と剥がれ落ちる。その下で赤黒い筋肉組織がびくびくと脈打つ。

不気味な怪物を相手に戦い抜いてきたスカルダたちですら、思わず吐き気を催すような醜悪な姿であった。しかもそれがつい先刻言葉を交わしたハ・キムなのである。

ぞくり、とスカルダの背に悪感が疾った。今のガディの一撃は鎧の上からでも内臓を破裂させるだけの衝撃を与えている。生物なら即死している必殺の剣だ。

それでも起き上がってくるハ・キムを止めるには、肉体を徹底的に破壊するしかない。

だが、敵対していた男の首なし死体でも、怪物相手に戦うのとは違う。生き残るためには見知った者の屍に剣をふるわねばならない状況に、スカルダは怒りと同時に激しい嫌悪を感じていた。

「ちっ」

ガディが小さく舌打ちする。その腕から軽く血が滲み出していた。

ハ・キムを切りつけた瞬間、蛇のように伸びてきた手裏剣に切り裂かれたのである。目にも止まらぬ早業であった。

「ガディ」スカルダが前方から眼をそらさずに聞く。

「大丈夫だ。だけどこれはかなり厄介だぞ。ハ・キムはただのゾンビじゃない」

再びフラックの声が響いた。

"そろそろ本番と行こう。ゆっくり御覧あれ"

にゅうっとフラックの面の口が広がった。

ひゅごう。

そこから大量の息が吸い込まれる。暗い喉の奥から赤い光が漏れ始めた。

ふいにフラックの身体が沈む。次の瞬間、その姿は弾かれたように宙に舞った。

空中から、パーティに凄まじい炎が降り注いだ。

フラックのブレスである。猛炎以上の火力を持つ炎を、フラックが吐き出したのだ。

一瞬ではあるが数百度の火炎がスカルダたちに叩きつけられた。吹きつける炎は鎧や法衣の内側にまで入り込み、広範囲の火傷を生じさせる。

「うおっ」

スカルダは盾で火の粉を振り払った。もう一度このブレスを受けると火傷で絶命するメンバーが出かねない。すぐに反撃に転じねばならなかった。

シャン！

錫杖の音が聞こえてきた。

——フラックはどこだ!?

「上だ！」すぐ横でガディが叫ぶ。

見上げたスカルダの眼が、天井を這う影を捕えた。

錫杖を口にくわえ、フラックは両手足を天井にはりつかせていた。丁度、四つ這いになったような姿勢である。

顔が、真後ろを向いていた。180°回転した首が、背中の上からパーティを見下ろしている。

そのままフラックは天井を駆け、スカルダたちの頭上に迫りつつあった。

「ハ・キムがまた来る！　スカルダ、"気"で斬れ！」

ガディが早口で言った。「フラックは何とかする。ハ・キムの身体を断つんだ！」

その時、フラックの身体が天井を離れた。全身を錐揉みさせて一行に襲いかかる。

だがスカルダはそれを無視し、今にも飛びかかろうと身をかがめているハ・キムに向かって走り出していた。

死者とは思えぬ速さで、ハ・キムが動き出

した。激しい筋肉の伸縮に、焼けて柔軟性を失った皮膚が大量に飛び散る。

ガードも何もなかった。両腕を広げ、隙あらば相手に掴みかかろうとする構えである。操っているフラックは、敵の息の根を止めること以外の指令を死体に与えていないのであろう。

それだけに恐ろしい相手あった。防御に注意を払わないぶん、いかなる場合にも攻撃を仕掛けてくる。一撃で倒せなければ、己の攻撃でできた隙を突かれるのである。

スカルダはハ・キムに向かって走りながら“気”を集中させていた。二度の戦闘を経て、わずかながらもこの方法に慣れ始めている。

だが、自分の“気”の集中に比例して伝わってきた敵の“気”が、ハ・キムからは全く感じられなかった。

“気”とは、殺気とも言う通り、その気配から派生する圧力である。そして気配は生命活動の源である呼吸によって生じる。

つまり、息をしている限り気配を完全に消し去ることは不可能に近い。逆に相手が呼吸をしなければ、いかに熟練の侍であろうとその“気”を察知できない。

かつて侍ナツクラーヴ率いる討伐隊が奇襲に破れたのも、呼吸を必要としない不死怪物の吸血鬼が気配を一切感じさせなかったせいであった。

頭を失い、骨と肉の塊と化したハ・キムに気配はない。今までの敵のように“気”の動きで先を読むことはできないのである。

ハ・キムが迫っていた。

スカルダは上体を低くし、ほぼ滑り込むようにして剣を横一文字に振り抜いた。悪の鎧に守られていない両脚を狙ったのだ。

だが、カシナートの剣は空間を一閃しただけであった。たわめられていた“気”が剣先から放出され、消失していく。

咄嗟に、スカルダは身体を右に倒した。そうして思い切り床を蹴り、横ざまに飛び退く。

左の首筋に触れるほど近くを、ハ・キムの右手に握られた苦無が通り過ぎて行った。

スカルダの剣を跳躍でかわしたハ・キムが、頭上を飛び越す瞬間に首を掻き切ろうと腕を伸ばしてきたのである。

どっと冷汗が噴き出すのを感じながら、スカルダは瞬時に体勢を立て直した。

避けていなければ首が落ちていたタイミングだった。あと一瞬でも反応が遅れていたら、確実に頸動脈を切断されていたであろう。

スカルダ自身何故避けられたのかはっきりとは判らなかった。ただ、奇妙な“気”を感じてそれを避けたのである。

ハ・キムのものでは無論なかった。

再びかすかな“気”が忍び寄ってきた。ハ・キムが着地した背の後方から、地を這うようにである。

振り向きざま、スカルダは床すれすれに蹴りを放った。

装甲版で固められたつま先が、獣の姿勢で突進してきたハ・キムを捉えた。鎧の脇腹の部分ではあるものの、重い蹴りはホビットの軽い身体をすくい上げ、大きく跳ね飛ばした。

その時、スカルダの頭脳に何かが閃いた。

頭もなく、全身が焼けただれたハ・キムに感覚器官は残っていない。このゾンビがこれだけ正確に相手の位置を知ることができるのは、すぐ向こうでガディたちと戦っているフラックが同時に操っているからに他ならなかった。

ハ・キムの動作に先行する奇妙な“気”は、フラックの念動だったのである。

そうと判れば、ハ・キムの速い動きとて容易に予測できる。

スカルダは大きく息を吸い、“気”を圧縮し始めた。もはや次にハ・キムがどう攻撃をかけてくるかが前もって読み取れる。迷いが消え、全身が強いエネルギーで満たされてきた。

宙で受け身を取ったハ・キムは、着地と同時にスカルダへと飛びかかった。無理なアクションのために完全に足首がねじれている。痛覚のないゾンビならではの凄まじい攻勢であった。

が、それを予期していたスカルダにとって、ジャンプしたハ・キムは恰好の的となった。

――ハ・キム、成仏しろ。

下をくぐるようにして、スカルダは剣を後ろから前に振り出す。刃と化した“気”が悪の鎧の前面から背まで突き抜け、ハ・キムの身体を縦に貫いていった。

カシナートの剣自体は全く鎧に当たっていない。“気”だけがハ・キムを一閃したのである。

勢いを保ったまま、ハ・キムはスカルダの頭上を通過していった。そして後方にもんどりうって落下し、床にのびる。

ハ・キムは倒れたまま数秒の間四肢を狂ったようにばたつかせていた。必死に起き上がろうとしているのである。

ふいに人形の操り糸が切れたかの如く、手足の力が抜けた。大の字形になって、それきりハ・キムは動かなくなった。

幻しの刃が弧を描く。

傷一つない鎧の中で、ハ・キムの屍が背骨に沿って両断されていた。装甲に阻まれることなく、“気”が垂直断ち割ったのである。

それが転職の道場で見た、サムライ・マスターの居合と同種のものであることに、スカルダはまだ気づいていなかった。

ガディの左腕が石化していた。柄を握りしめたまま硬直した腕はぴくりとも動かない。

落下してきたフラックに、錫杖で叩かれたのである。奇怪な形状をした杖の秘めた、恐るべき魔力であった。

対峙するフラックは、片腕になっていた。

ガディの誘いに乗り、ガードの開いた左腕に一撃を見舞った瞬間に、ジャバの剣が肩の付け根から切り落としたのである。

フラックの面が、憤怒の形相に変わっていた。黒い穴だけの眼が吊り上がり、口はその目尻と同じ位置まで裂けている。

気の弱い物なら気絶してしまいそうな凄まじい表情である。カッと開いた口からは、桃色の舌が炎のように激しくのたくっているのが見える。

たかが人間と侮っていた連中に腕を切り落とされたのである。フラックは完全に怒り狂っていた。

“おのれ”

蠢く舌の間から、呪詛の言葉が漏れる。

“この二百年、傷すら受けなかった私の身体に、よくも”

その時、フラックの顔に驚きのようなものが浮かんだ。自分の操っていたハ・キムが、スカルダの手で倒されたのである。

一瞬の隙をついて、ベリアルの呪文が浴びせかけられた。

両肘を脇腹につけ、片手ずつ印を結んだ前腕を前に突き出した姿勢でベリアルの喉が鳴動し始める。周囲の空気が呼応してびりびりと震え出す。

ゴウ！

空気の震動がフラックを包み込んだ。とてつもない圧力にフラックの姿が歪む。

攻撃呪文の少ない僧侶系スペルの中で、最大の破壊力を持つ魔法・死言である。それを耳にするだけで禍いを招くと言う封印された死の言葉を、攻撃対象の周囲に起こした空気震動によって間接的に発音させ、大槌以上の物理的ダメージを与える広範囲破砕呪文であった。

鳴動する空間の中で、フラックの肉体にあらゆる方向から打撃が加えられていた。まるで姿の見えない何かに囲まれて、連続的に殴打されているようである。

“おのれえっ”

フラックの叫びが上がった。

魔法使いと僧侶の最強呪文を受けたうえに、ジャバに片腕を落とされているのである。絶大な耐久力を誇るさしもの妖魔もそろそろ限界であった。

最後の力をふり絞り、フラックが跳ねた。

どこにこれだけの力が残っていたのかと思うほどの速さだった。錫杖を回転させながら、ジャバ目がけて飛びかかってくる。

ジャバの間合に入る直前で、錫杖が床を叩いた。フラックはそれを支点に空中で方向転換する。

フェイントである。フラックの狙いは片腕の使えぬガディであった。錫杖がガディの首筋に向けて繰り出される。

だが、ガディはその動きを読んでいた。

剣を振り上げて錫杖を弾き、返す刀でフラックの腹腹に切りつける。刃が道化服の内側に潜り込み、弾力の高い肉体を裂く手応えが伝わってきた。

ガディの剣に挟られながら、フラックの全身の傷から眼も眩むような緑色光が噴き出した。

光は腕の切断面はもとより、フラックの内部に通じる眼窩や口からも溢れ

ている。まるで身体の中心で爆発が起こっているようであった。

“があああああ――”

尾を引く叫びを残して、フラックの肉体が閃光に包まれた。

緑色光が消えた時、フラックもまた消失していた。初めから全てが幻影だったかの如く、錫杖も道化服も残らず消え去っている。

ガディの足元で、小さな何かが動いた。

10cmほどの長さの、ピンク色の肉であった。濡れて光沢を放つ肉塊が、石の床の上で蠕動を繰り返ししている。

フラックの舌である。それだけが消滅せずに、蛞蝓のように地を這っているのだ。

痙攣しているのではなかった。それは意志を持ち、ガディから離れようと必死に移動していた。

これが、フラックの本体であった。フラックの姿自体は舌の生み出した特殊細胞にすぎず、舌状の肉塊こそが頭脳であり、心臓であったのだ。

ガディが剣で突こうとした途端、それは床に染み込むように姿を消した。他の空間に転移したのだ。

本体が無事な限り、いずれフラックは蘇るであろう。しかし、それは今ではない。

一行は、伝説の魔人に打ち勝ったのである。

（以下次号）

急告!!

小説ウィザードリィ

●ハイパーエンタテイメントノベル●

「隣り合わせの灰と青春」単行本化決定!!

おかげさまをもちまして、この小説が一冊の本にまとまります。発売は11月下旬を予定。最初から読んでる人、途中から読んでる人、まだ読んだことない人、ゲームのように楽しい小説を、ぜひ御鑑賞ください。

筆者あとがき

２ヵ月ぶりのあとがきなので書きたいことが沢山あるのですが、せっかく単行本化決定なんだから、今回はマジメに僕とウィザードリィの出会いを語ってみましょうか（『バックランドで～』みたいね）。

それはかれこれ５年前、僕がまだ宝島編集部のあの町山氏が卒業した高校に通っていた頃のお話。今ではパソコンといえば何にでもついてるディスクが、アメリカ産の高級パソコン・アップルIIぐらいにしか普及してなかった時代だ。そのアップルのまがいもの・トパーズというコンピューターが、なぜか学校にあった。

当時ファンタジー世界に興味を持ち始めていた僕はこのアップルもどきを借り、ウィズの原版で遊ぶことになる。それは一度地下迷宮に入ったが最後地上に戻るまでセーブもできず、先制攻撃時にも呪文が使えるために怪物に驚かされるとほぼ全滅で、さらにモンスターのグラフィックは抽象的なものが二十種程度、キャンプをはるのにディスクのアクセスが１分近いと言うＦＣ版ウィズに比べてかなり見劣りする代物だったけど、僕の心の中に“ファンタジー小説を書きたい！”という欲求を引き起こすには十分だった。

そして去年、末弥純氏の描き上げた迷宮世界の怪物たちをひっさげて、グレードアップしたウィズが僕の前に帰ってきた。それから『隣り合わせの～』のストーリーが浮かび上がるまで、さほどの時を要さなっかたのは言うまでもないだろう……なーんてね。やっぱり大上段に構えたキザは似合わないねえ。とにかく目下急ピッチでラストに向けて執筆しております。単行本ともども、よろしく。

そう言えば学校のトパーズ、まだ返してないんだっけ（笑）。

（ベニー松山）

編集部からのお知らせ

なお、「隣り合わせの灰と青春」は63年11月第１金曜日発売号（vol. 22）まで連載される予定です。同小説は、この号で完結しますが、さらにベニー松山氏がエピローグを加筆し、単行本になります。いよいよ佳境に入った「隣り合わせの灰と青春」。クライマックスが近い！

華麗な筆致でつづる剣と魔法の迷宮世界

小説ウィザードリィ

隣り合わせの灰と青春 15

by BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作　イラスト／末弥純・品川るみ

前号までのあらすじ

大魔術師ワードナから強大な魔法のアミュレットを奪い、大君主トレボーの近衛隊に取り立てられるべく日夜地下迷路を彷徨う冒険者たち。その一人である若き戦士スカルダは、富や名声よりもさらなる力を求めて侍へと転職する。だが折悪しく仲間の魔法使いシルバーが蘇生に失敗し、スカルダの転職による能力減退も含めてパーティの総合力は大きく低下してしまう。謎の男バルカンを連れて迷宮へ乗り込んだものの一行の足並は乱れ、更にライバルパーティの妨害で大きく遅れをとる。だが、スカルダたちに匹敵する実力を秘めた悪のパーティも、転職の契機となった強大な魔物・グレーターデーモンによって壊滅的な打撃を受けていた。続いて姿を現した伝説の妖魔フラックと、頭を砕かれたままゾンビと化した忍者ハ・キムが一行に襲いかかる。フラックの変幻自在の体術と炎、そして破壊不可能な鎧に身を守られたハ・キムに苦戦しながらも、スカルダたちはこれを撃退した。

SCENE 20

§ TELEPORTER §

サラが、大凍を唱えるために左右に広げていた両腕の力を抜いた。

一行の他に、玄室内で動くものは皆無であった。スカルダに肉体を分断され、操り主のフラックをも失ったハ・キムはもはや身動ぎする気配もない。焼け焦げた醜い骸である。

ふっとサラは気を緩めた。

途端に全身に鈍い痛みが疾った。フラックの吐いた炎で受けた、火傷の痛みである。

迷宮に入る際にベリアルが唱えた大盾の呪文のおかげで、パーティ全員の肉体は目に見えない魔法障壁に覆われている。これは身体の表面をくまなく革鎧で包んでいるのと同じ効果があり、怪物の爪や牙の勢いを殺したり呪文や炎のダメージをある程度緩和してくれる。

そのおかげでハ・キムの屍のように肌が焦げる心配はなかったが、それでも高熱による体力の消耗と軽度の火傷はまぬがれない。

滅多に刀傷を受けることのない魔法使いは痛覚に特に弱い。サラにはその痛みが耐え難いものに感じられていた。

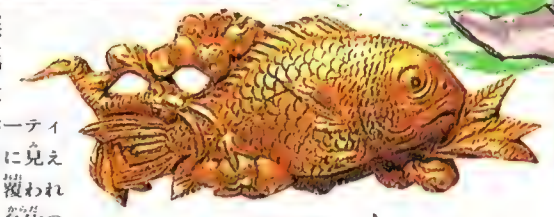
脚の力が抜け、意識が急速に遠のいていく。

――倒れる。

そう思った瞬間、力強い腕がサラの胴を抱え上げた。失いかけた意識が戻ってくる。

眼を開けると、見慣れた顔がサラを覗き込んでいた。

スカルダだった。気を抜く寸前まで確かに



ハ・キムの屍の向こうにいたスカルダが、倒れかけた身体を横抱きに支えている。

「気がついたか」

「　　ええ。危なく床に寝込んじゃうところだったみたいね」

サラは力なく微笑んだ。

「無理するな。ベリアル、治療を頼む」

「うむ。どうやらサラが一番酷く炎を受けているようだな」

サラの胸の前に右手をかざし、ベリアルは

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかり。
- ジャバ……パーティの一員。盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ベリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……謎の魔法使い。悪。
- 老エルフ……ダークゾーンに棲む術者。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- グレプナーグ……トレボーの側近。魔法使い。
- ワードナ……悪の大魔法使い。
- ハ・キム……レベル12の忍者。悪。
- アルハイム……レベル12の僧侶。悪。

呪文を唱え始めた。詠唱のリズムに合わせて左手が複雑な軌跡を描く。数秒で右の掌が暖い光を放ち出した。

火傷の痛みが、溶けるようにやわらいでいく。傷を癒し、体力を回復させる呪文の中では最大の効果を持つ僧侶系第5レベルの呪文・大治である。

みるみるうちにサラの身体に活力が戻ってきた。火傷はもうほとんど痛まない。

ベリアルが詠唱を終えた。

「どうかな？　封傷をかけておいてもいいぞ」

「いいえ、もう大丈夫。朝は解毒もしてもらったし、今日は随分お世話になっているわ」

そう言ってサラは軽くウィンクした。

「その余裕があれば心配あるまい」ベリアルは頷くと、背後のガディに視線を向けた。「次はガディの腕を何とかせんとな」

立ち去るベリアルを眼の端に捕えながら、サラはまだ自分を抱えたままのスカルダを見た。

パーティ前方にかがみ込んでいるガディに心配そうな視線を送っていたスカルダが、ようやくそれに気づく

「どうした？」

「よくあそこから、私が倒れる前に支えられたと思って」サラが玄室の奥を指さす。

指の先に、ハ・キムの死体がある。先程までスカルダが立っていた地点だ。

「ここまで15mはあるわ。私が気を失ってから駆けつけても、絶対に間に合わない」

「確かにね。しかし元気になった途端に質問かい？」半ばあきれ顔でスカルダが言う。

「魔法使いの行動規範は知的好奇心の充足だもの。この距離じゃあどう考えても転移の呪文を使ったか――この層では無理ね――私が倒れ始める数秒前に走り出したと考えなければ説明できないわ。答えて」

サラの真剣な眼差しに、スカルダはやれやれとかぶりを振った。

「その通り。きみが火傷の痛みに耐えられなくなる少し前に、俺は駆け出してた」

「どうして」

「きみが倒れるのが判っていたからさ」

訳が判らない、というサラの表情を見てスカルダは続けた。「待はね、他人の〝気〟を読むことができるんだ。あの時、痛みに苦しみ出したきみの〝気〟が俺に伝わってきた。危い、と感じて駆けつけてみたら、案の定きみの身体が倒れ出したという訳だ」

「それって、相手の考えていることが読めるってこと？」少し戸惑った様子でサラが尋ねる。

「まだ良くは判らないけど、そうじゃないみたいだ。ただ、相手が次にどう動こうとしているか、その動きがほんの少し前に判る精度さ。それに俺自身の〝気〟を集中させないと、相手の〝気〟も伝わっちゃこない」

「なるほど」サラが一瞬だけ、ほっとしたような顔つきになった。「じゃ、今私が何をしようとしてるか判る？」

「えっ？」

スカルダの脳裏に、もうかなり前から腰に回したままの腕を引き剥がそうとするサラの〝気〟が伝わってきた。

倒れかけた身体を支えたまま、既にサラが自分の足で立っていることをすっかり忘れていたのである。スカルダは慌てて身体を離した。

「あっ、悪い！　別に悪気があってこうしてた訳じゃなくて――」

サラの疑わしげな眼にスカルダは黙り込んだ。こうなっては言い訳にしかならない。

が、予想に反してサラは微笑むと、くるりと後ろを向いた。

「どうやら心の中が読めないってのは本当らしいわね」

「？」

「本心は、ずっと抱えていて欲しいって思ってたんだけど」

「な――」

今度は驚きのあまり、スカルダは喉を詰まらせた。と、サラが軽く舌を出して振り向く。

「嘘。しばらくはこの手でからかえそうね。でも本当に、危ないところをありがとう」

ふふっと笑うと、唖然とするスカルダを残し、サラはガディとベリアルの方に歩き出した。

ガディの前に、ひしゃげた黒い金属塊が転がっていた。

フラックと戦っている間は全く気がつかなかった。床を這うフラックの本体を眼で追った時、偶然視界に入ったのである。

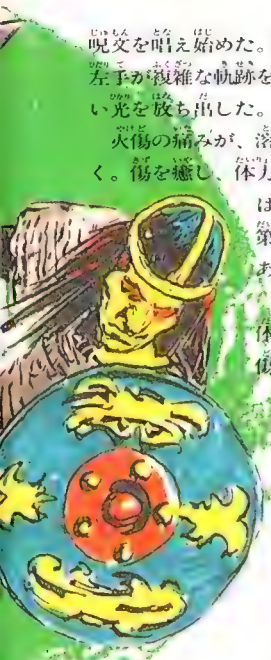
直径15cmほどの、潰れた鋼板であった。バルカンの爆炎で床が黒ずんでいるため、注意して見ないとそこにあることすら判らない。

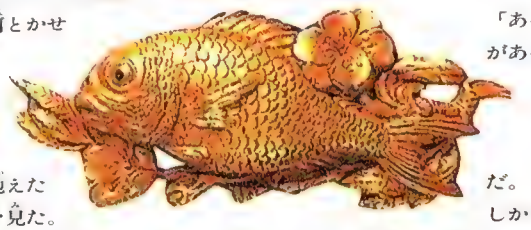
それを拾うべくガディは身をかがめた。筋肉のひきつれで石化した左腕の付根が激しく痛んだが、構わず金属塊に手を伸ばす。

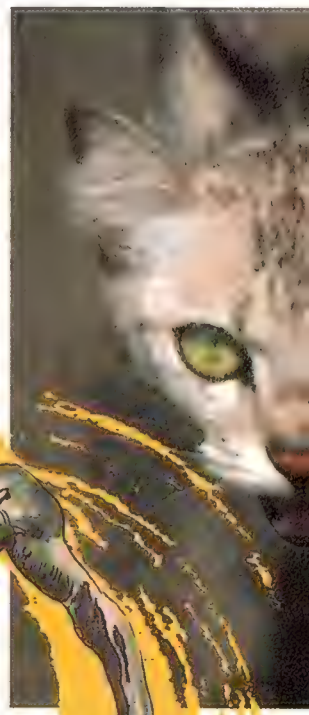
高熱の炎に焙られていたせいで、それはまだかなりの熱を持っていた。手甲を通じてさえ、生物に触れたかのような温度が伝わってくる。

それを摑んだ拍子に左手に持ったままの盾が地面に触れてねじれた。

信じ難い激痛がガディの神経を駆け抜けた。声にならない叫びを上げ、思わず金属塊を取







り落とす。
金属塊が、裏返った。
白い歯があった。折れた歯が数本、鋼板に突き刺さっている。
そこに、サラの治療を終えたベリアルがやって来た。
「全く無茶をしたものだ。フラックの攻撃をわざと受けるなど気違い沙汰だぞ。伝承によれば、石化で済んでまだ幸運だというからな
どうした？　早く診せてみんか」
ガディが気づいた風もないので、ベリアルはその手元を覗き込んだ。
金属塊に食い込んだ純白の歯が目に入る。ベリアルはその白さに見覚えがあった。
「これは」
「ゴグレグの、面頬だよ。自茶苦茶にひしゃげてて、そうは見えないけどね」
ガディがそれから眼をそらさずに呟いた。
「魔界に吸い込まれる前に外れたんだろうな」
口調に、悲しげな響きがあった。
ややあって、ベリアルが口を開いた。
「尋ねてもいいか」
「ああ」ガディが頷を上げる。
「ゴグレグと、お主のことだ。お主が言わぬので聞かずにおいたが、今となっては当のゴグレグもこの世にはないのでな」
「やっぱり、気になるよなあ」
「うむ」
ガディとゴグレグの関わりを、ベリアルは尋ねているのだった。
数年に渡る廻国修業を続けていたベリアルがこの迷宮の冒険に参加したのは、今から約一年前である。時を同じくしてガディが城塞都市に流れ着き、街で隠居生活を送っていたシルバーともどもスカルダたちの仲間となった。
ゴグレグがやって来たのは、それから一月と経たぬうちであった。

ドワーフとしては異常な体躯を誇るゴグレグに、当時幾つもの有力パーティが声をかけた。しかしゴグレグはためらわず、評判の悪いハ・キムのパーティに参加を申し出た。
中には断られて腹を立て、酒場でゴグレグに斬りかかった者もいた。ハ・キムと並んで恐れられていた血の気の多い悪の戦士であったが、その日を限りに冒険者を廃業した。素手のゴグレグに両手両足を砕かれたのだ。
そのゴグレグが流れてきた当初から、異様なまでの闘争心をむき出しにしていた相手がガディであった。
冒険者一の戦士の座を狙うのであれば、同等以上の力を持つスカルダもいた。が、ゴグレグの眼は常にガディに向けられていた。
そこに何らかの理由があることを全員が薄々気づいてはいたが、ガディ本人が何も語らぬため、誰も聞こうとはしなかったのである。それにガディは必要なこと以外、あまり話さない質であった。
「あいつは、俺と果たし合いをするつもりだったんだ」
「何と」
ベリアルが驚きの声を上げた。果たし合いと言えば手加減なしの真剣勝負である。ガディほどの戦士同士がぶつかり合えば、どちらかが必ず命を落としていただろう。
「あいつがマスターレベルになったら、そうすることになっていた。明日にも、やりあったかも知れなかった」
「何故そんな馬鹿げたことを。私が僧侶だからこそ言うが、幾ら魔法で蘇生ができるとはいえ、己の命を軽んじるのは愚か者だぞ。まして果たし合いなどとは」ガディの治療も忘れ、ベリアルはまくしたてた。
「そうしなきゃおさまらない理由が、あいつにはあったのさ」
床の上の面頬に視線を落とし、ガディは立ち上がった。「ワードナと戦い、帰ってきたパーティがいたのを知ってるだろ？」
「うむ。お主がこの街に来るより少し前、私がまだ冒険者ではなく、修業僧としてここにいた頃の話だな。確か北方の戦役で数々の殊勲をあげたドワーフが指揮していた」
ベリアルはいぶかしげに眉を寄せた。「どうしてそんな話を？」
「吸血鬼たちに数レベルのエナジードレインを受けて、街に戻ってすぐに男は死んだ」
ガディは続けた。「俺は以前旅先で、ここに向かうそのパーティに出会ったんだ。で、たまたまリーダーのドワーフと野試合をすることになった。本当にくだらない理由でね。もちろん真剣勝負じゃなかったんだけど、どういう訳か俺が勝っちまった」
「レベル12だった戦士にか」
「ああ。それがまずかった。話は大袈裟になって北の国に伝わり、その試合でドワーフが深い傷を負ったということになったらしかった。そこにきて連中がこの迷宮で全滅した」

「お主との勝負で手傷を受けたばっかりに、と思われた訳だな」

「そう。そのドワーフこそ、ゴグレグの兄だったのさ」

「そうだったのか」

ようやく得心がいったという顔でベリアルが言う「お主を兄の仇だと」

しかしガディは首を横に振った。

「そうじゃないんだ。あいつの目的は英雄と呼ばれた兄を越えること、つまりその兄を負かした俺に勝つことだった」

「どっちにせよ、お主にとってろくなことではないな」

「まあね。でも俺はゴグレグを嫌いじゃなかった」

「どうして？」

いつの間にか、サラが側に来ていた。途中から話を聞いていたらしい。

「あいつにとってこの迷宮での戦いは、トレボーの近衛隊に入って報賞を得るための手段じゃなく、自分の腕を磨く術だった。そういう奴には好感が持てる。俺はね」

そう言ってガディは後方のスカルダをちらりと振り返った。スカルダはまだ呆然としたままで、背後の扉からキャンプを解いたアルハイムとラシャが入ってくるのにも気づかない様子である。

「どうしたんだい、ありゃ。仮睡でもかけられたみたいな顔してるぞ」

「さあ」サラがとぼける。

すぐ横を、ラシャが小走りに通り抜けた。玄室の奥で宝物を探っているジャバに喜々とした様子で向かっていく。

ゆっくりとした足取りで、例の笑みを浮かべたアルハイムが近づいてきた。

「見事な手並ですね。あのフラックを相手に、この程度の被害で済むとは。もっとも石化した腕は快癒を使う他ないでしょうがね」

「だったら先刻の罠の償いにでも、あなたが治してくれれば？　私たちはまだ先に行くつもりだけど、あなたはもう地上に戻るつもりでしょう。大蜘蛛たちのおかげで、私とバルカンは第３レベルの呪文を全て使い切る羽目になったんだから」愚痴を含んだ調子でサラが言った。酒場での件で脅されたうえに罠まで仕掛けられ、かなり腹を立てている。

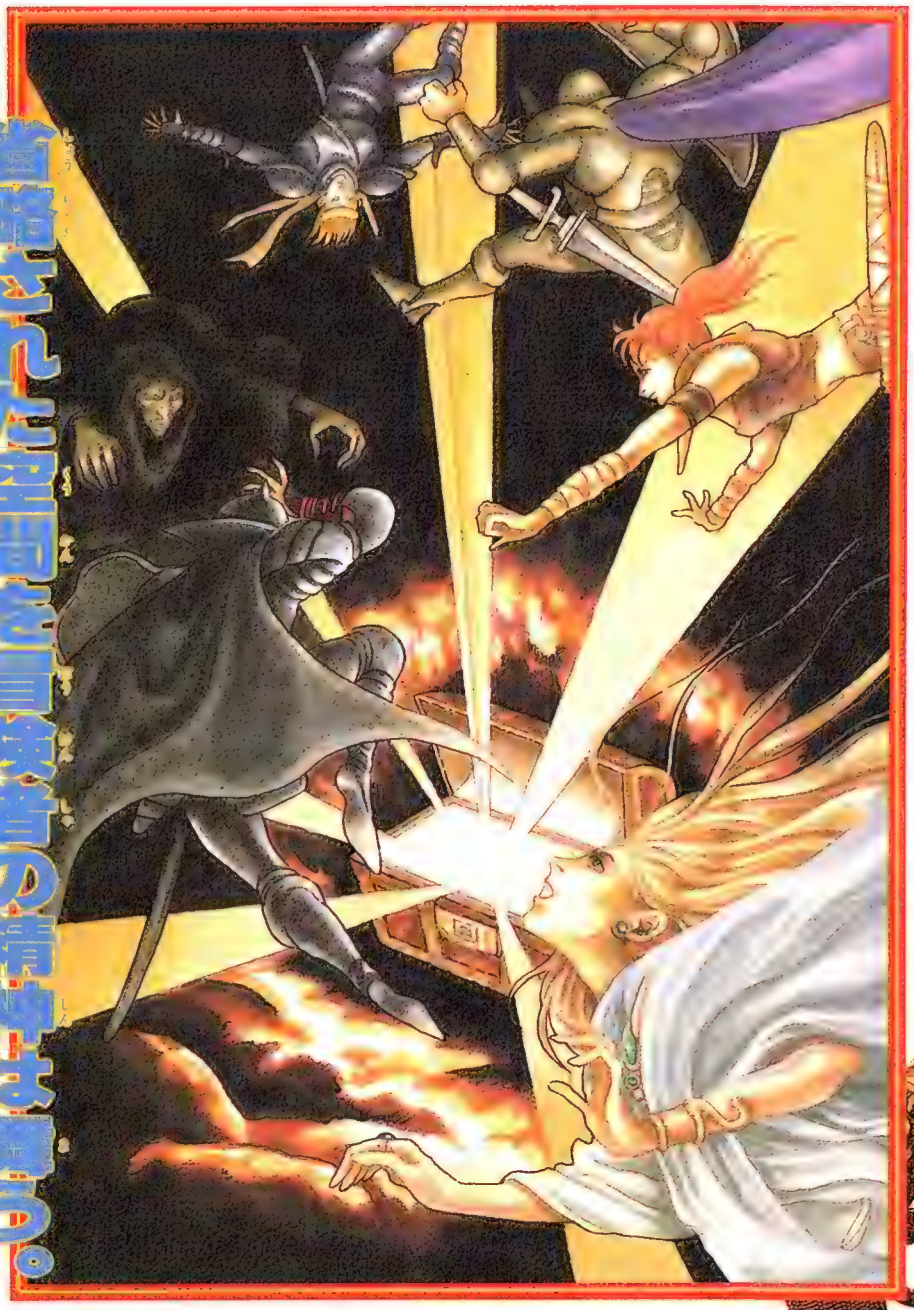
「へえ。あの蜘蛛の大群を、大炎や迅雷で。どうやったのか知りたいものですが、罠など私は知りませんよ。私たちが通ったあと、蜘蛛が集まってきただけじゃないですか」

アルハイムはあくまでしらを切り通すつもりらしかった。

「それにもしあなたたちが快癒の呪文切れで全滅でもしてくれれば、また私にもワードナの首を狙うチャンスがありますのでね」

「黙れ、貴様のような未熟者の力など借りずともよいわ。とっとと立ち去れ」ベリアルがアルハイムを睨む。

僧侶系呪文の第６レベルに属する快癒は、高い段階の麻痺である石化を治療できる唯一の呪文であり、さらに瀕死の状態にある者を瞬時に全快させる体力回復の効果も兼ね備えている。強大な魔物が徘徊する迷宮においては最も頼りになる呪文のひとつであったが、レベル13のベリアルですら第６レベルの魔法の使用回数は５回に満たないため、できる限り温存しておきたい魔法レベルであった。



省略された空間を冒険者の精神は飛ぶ。

「言われなくても帰りますよ。一刻も早く次のメンバーを集めなくちゃなりませんのでね」

ベリアルから眼をそらすように、アルハイムは部屋の奥に視線を移した。

玄室の壁に隠されていた宝箱を調べているジャバとラシャ、それにハ・キムの屍の前にかがみ込んだバルカンがいる。

「バルカンに目をつけたわね」サラが言った。

「引き抜いたって構わないわよ。見ての通りスカルダとうまくいかないみたいだし」

「そのようですね」

アルハイムがそう呟いた時、ジャバが短い叫び声をあげた。

重力が、消え失せた。

壁に、かなり大きなくぼみがあった。人間程度の生物なら、楽に隠れることができる。

そこに幅1mほどの、頑丈そうな箱が置かれていた。

この玄室の守護にあたる怪物が、自分の宝物類を格納しておく宝箱であった。蓋には錠前が据えつけられ、鍵を外さない限りそうそう開きそうにはない。

ジャバはくぼみの様子を窺いながら、用心深く宝箱に近づいていった。

ワードナの護衛兵として迷宮に放たれた怪物は全て、何らかの手段で他の場所から返り

込まれている。封印された地の底の住人を始め、極寒あるいは猛暑の秘境にしかいない生物たちが、まるで迷宮の奥深くから沸き出るかの如く次々とやってくるのである。

その、鳥も通わぬ場所から召喚される怪物の中には、今では失われた製法で造られた魔法の品を携えたものもいた。かつてそれらの土地に迷い込んで息絶えた冒険者から剥ぎ取られたのか、それとも強大な魔法に支配された古代王国の遺産を受け継いでいるのかは判らなかったが、現在製造されている魔法の品とは比較にならない代物が怪物たちによって迷宮に持ち込まれているのである。

この最下層のように玄室が護衛の詰所として機能しているところでは、ほぼ確実と言っていいほど宝箱が隠されていた。ハ・キムの悪の鎧やスカルダたちのカシナートの剣も、この宝箱の中から入手した品であった。

宝箱のほとんどには、普通の錠の他に他者が開ける気を起こさぬよう、複雑な罠が仕掛けられている。飛び出してくる毒針や広範囲に爆烈する箱、それに転送の罠などである。

特に転送の罠は険呑であった。解除に失敗した途端に転移の魔法が作動し、パーティが瞬時に迷宮のどこかへと飛ばされてしまうのである。

運が悪ければ壁の中に実体化し、永久に助からない可能性もある罠なのだ。

その他にも、呪文所有者の持つ魔力に反応して麻痺症状を引き起こす毒風など、迂闊に作動させるとパーティが危地に陥ってしまうような数々の罠が確認されていた。

箱を放っておけば罠を引き当てる心配もないが、それでは強力なアイテムを手に入れることもない。

そこで、盗賊の出番となる。

盗賊は戦闘においては、ほとんど攻撃力を持っていない。扱える武器は短剣どまりで、他の職業から転職でもしない限り魔法も使えないのである。

しかし宝箱を前にした時、その鋭い眼と勘は巧妙に隠された罠を見抜き、繊細な指先は幾重にも仕掛けられた作動トリガーを苦もなく解除していく。

他に罠を外す感覚を身につけているのは高レベルの忍者ぐらいで、それも盗賊の域には遠く及ばない。冒険者のパーティのほぼ全てに盗賊が入っているのも、この能力抜きに宝物を手にする術がないからである。

ジャバは罠の解除に関しては冒険者一とまで言われた盗賊であった。事実最後に罠を作動させたのは2ヶ月ほど前の毒針で、以来一昨日まで百回近い解除を連続して成功させている。

だが、忍者になった瞬間から自分の指先の鋭敏さが大きく失われていることを、ジャバはまだ気づいてはいなかった。

くぼみには何も隠れていなかった。ジャバは宝箱の前に片膝で座ると、宝箱には一切触れずに鍵穴や蓋の合わせ目を覗き始めた。

一昨日の探索の時には空だった箱である。もし罠がないようなら、恐らく今日も空のままであろう。

しかし鍵穴の奥を含め、隙間から合計三本の糸が内部に張られていた。髪の毛を使った割合単純なトラップで、これに気づかずに箱を開けようとすると蓋に結びつけられた毛が罠の作動トリガーを引く仕組になっている。

解除するには残らず糸を切断してしまえば良かった。

――この手のタイプは転送の罠だろうが、どうってこたあねえな。毛に気づかないとやばいが、こんな仕掛けじゃ作動するかどうかも怪しいもんだぜ。

ジャバは盗賊時代から愛用のピックを取り出すと、早速作業にとりかかった。

握りの先に針金のついたピックは容易に蓋との隙間に滑り込み、潰して尖らせた刃状の先端部で一本目の毛を切断する。

二本目を切ろうとピックを動かした時、ジャバは指先にわずかな震えを感じた。

――おかしいな。

「やったじゃない！　フラックを倒したのよ！」間近でいきなりラシャの声が響いた。罠に神経を集中していたため、接近する足音に気づかなかったのだ。

指が滑った。が、ピックは辛うじて二本目を切断した。

ジャバは大きく息を吐いた。

「この馬鹿！　罠が作動するところだったじゃねえか!!」

「あ、ごめん」

黙るラシャを軽くこずき、ジャバは最後の一本を切るべく鍵穴に針金を差し込んだ。

これまでの二本と違い、穴の奥に見える一本は突いた形で切断しなければならない。だが、ジャバにとっては簡単すぎる作業の筈であった。狙いを定め、シャバはゆっくりとピックを差し込む。

切った、かに思えた。一瞬の後、凄い勢いで蓋が開くまでは。

「しまった！　テレポーターを――」

ジャバの叫びは箱から噴き出す閃光にかき消された足が床から離れ、上下感覚が消失する。ジャバは夢中でラシャの手を握り締めた。

光とともに、玄室の中から8人の姿が消え去った。　（以下次号）

隣り合わせの灰と青春 16

by BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作　イラスト　末弥純・品川るみ

前号までのあらすじ

大魔術師ワードナから強大な魔法のアミュレットを奪い、大君主トレボーの近衛隊に取り立てられるべく日夜地下迷路を彷徨う冒険者たち。その一人である若き戦士スカルダは、富や名声よりもさらなる力を求めて侍へと転職する。だが折悪しく仲間の魔法使いシルバーが蘇生に失敗し、スカルダの転職による能力減退も含めてパーティの総合力は大きく低下してしまう。謎の男バルカンを連れて迷宮へ乗り込んだものの一行の足並は乱れ、更にライバルパーティの妨害で大きく遅れをとる。しかし、スカルダたちに匹敵する実力を秘めた悪のパーティも、転職の契機となった強大な魔物・グレーターデーモンによって壊滅的な打撃を受けていた。続いて姿を現した伝説の妖魔フラックと、頭を砕かれたままゾンビと化した忍者ハ・キムに苦戦しながらも、何とかこれを撃退する一行。一息ついたのも束の間、忍者になったジャバが宝箱の罠を外しそこない、テレポーターが作動してしまう……。

SCENE21 § CAPTURE §

地下迷宮第一層。

ダークゾーンの小部屋で、老エルフは一心に書物に目を通していた。

机の両端には、相当量の書物が積み上げられている。老エルフは手にしていた本を閉じると片端の書物の一番上に置き、反対側から新たな一冊を取り上げた。若干高く積まれたそちら側が、まだ調べていない本の山らしい。机の中央に、細かな彫刻で縁どられた銀製の鏡が立てられていた。朝、スカルダたちがここを訪れた時には机上になかった品である。

その磨き上げられた鏡面に、闇に包まれた地上の街が映し出されていた。

本来なら夕刻と呼ぶにも早い時間であった。しかし昼前から都市上空を覆い始めた黒雲が更に厚く垂れこめ、今では陽の光を完全に遮ってしまっている。

老エルフは書物をめくる手を休めると、魔法の鏡の映す暗い城塞都市に視線を移した。

鏡面には、数々の商店が立ち並ぶ大通りの様子が映し出されていた。いつもなら露天商がびっしりと陣取り、大勢の客が行き交うこの南門への通りも、今日ばかりはほとんど人が出ていない。天空の雲の赤を知らなければ、深夜と見まごうような光景である。

老エルフが低く呪文を唱える。

瞬時に映像がカント寺院前の広場に切り変わった。視点が高くなり、寺院の高い屋根の上から見下ろしているように見える。

舌打ちすると老エルフは呪文を続けた。鏡の映像が目まぐるしく変わり、様々な視点から見た街が映し出される。

南大路の映像に戻り、再びカント寺院の上からの視点になったところで呪文が途切れた。そこで映像は固定される。

「こんなことならもっと視点を増やしておけば良かったわ」老エルフは独り呟いた。

魔法の鏡は水晶球などを使った幻視に比べて大した準備を必要とせず、手軽に像を結ばせることができる便利な品である。見たい場所に小型の銀盤を設置しておけば、いつでもそれを通した光景が鏡面に映し出される。滅多に地上に出ることのない老エルフは街の各所にこの銀盤を埋め込み、鏡を地上の眼として利用していた。

しかしさしたる魔力を消費しないだけ、幻視できる場所は銀盤の視点がある地点に限られてしまう。自由度がないのである。

二十数ヵ所ある視点からの映像に、これまでのところエルフの欲する情報はなかった。

老エルフはもう確認済みの書物の、一番下になっている本を見た。最初に調べた書物である。

それは、1ページ目が記されてから現在までにマスター・レベルの魔法使いとなった者全ての名がある名簿であった。この名簿は魔法の力で自己増殖し、7レベルの呪文を修めた魔法使いが誕生するごとに、自動的にその名を刻んでいくのである。そこにはシルバーの名や老エルフの本当の名、そしてワードナの名などが記されている。

だが、スカルダたちが新たに仲間にしたという男・バルカンの名は、名簿のどこにも見当たらなかった。

考えられないことであった。あらゆる術者の力を持ってしても、この書物にかけられた強大な古代の魔法を封じられはしない。

「あの魔法嵐と言いバルカンと言い、解せぬばかりじゃわい」

そう言って再び本を開こうとした老エルフの眼が、正面の扉に向けられた。

扉で隔てたダークゾーンの闇の中に、何者かの気配があった。

「誰じゃ!?」

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかり。
- ジャバ……パーティの一員。盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ベリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……謎の魔法使い。悪。
- 老エルフ……ダークゾーンに棲む術者。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- グレプナーグ……トレボーの側近。魔法使い。
- ワードナ……悪の大魔法使い。
- ハ・キム……レベル12の忍者。悪。
- アルハイム……レベル12の僧侶。悪。

応えはなかった。と、ゆっくりと扉が開く。

老エルフは対転移の呪文を唱え始めた。名も用件も言わずに部屋に入ってくるような冒険者は、すぐさま地上に放り出すことに決めている。

濃密な闇の壁の中から、全身をロープで包んだ人物が姿を現した。

頭をも包み隠した奇妙な姿であった。冒険者のする格好ではない。

「気の短いことだ」

扉が閉まると同時に、人影が呟いた。男の声である。

エルフの詠唱が止まった。フードのせいでくぐもってはいるが、その声には聞き覚えがあった。

男が続けた。

「五十年前、あんた――ハスターガルと、そしてワードナが復活させた超古代の魔術。その一端が遂に解読されたぞ。あの雲はまさにその行使によって生じた魔法雲よ」

「お前は――」

エルフの問いに答えるかのように、男はフードを引き上げた。その顔がランプの光に照らされる。

老エルフが、息をのんだ。

ガディは、ようやく自分の身体に重さが戻ってくるのを感じていた。

ジャバが宝箱に仕掛けられた転移の罠を作動させてから、恐ろしく長い時間が経過したように思える。しかしそれは実際には瞬きほどの時間でしかない。

そこに、ガディの肉体が実体化した。

足元に堅い床の感触があった。少なくとも岩塊の中への転移はまぬがれたらしい。

視覚が急速に回復し始めた。同時に、石化したままの左腕からの痛みで意識が明瞭になっていく。

目の前に、ベリアルが立っていた。まだ五感の混乱が続いているらしく、しきりに頭を振っている。

他には何の気配もなかった。

ガディは辺りを見回した。が、ランプの光が近くの床を微かに照らすだけで、周囲は深い闇に包まれている。回廊ではなく、玄室の中央付近に実体化したようだった。

「どこだここは」よろけそうになりながらベリアルが言った。

「玄室のどれからしいね。久し振りにジャバが罠を引いちまったな」

「転移の罠か――お主の他は？」

やっと感覚が元に戻ったらしく、ベリアルは頭を振るのをやめた。

「ここにいるのは俺たちだけだ。どうやらバラバラに飛ばされちまったようだよ」

「本当か」

驚いたベリアルが周囲を見る。しかし見えるのは闇ばかりである。

ベリアルの驚きも無理はなかった。テレポーターは転移の呪文と同じく、パーティ6人をまとめて瞬間移動する罠である。パーティが分散させられることなど、通常は考えられない事態であった。

「アルハイムとラシャで、8人あの部屋にいたのがまずかったんだ。皆無事だといいんだけど」

「うむ。とにかく我々二人だけでは危険だ。ここがどの玄室かを確認し、転送地帯でこの層の起点に戻るとしよう。スカルダたちが無事なら必ずそこに来る筈だ」

「その前に腕の治療を」

頷む、と言おうとした瞬間、ガディは背後からとてつもない妖気を感じた。

まるで心臓を鷲掴みにされ、握り潰されるような悪感が奔る。それは、ガディが生まれて初めて味わう、心の底からの恐怖であった。弾かれたようにガディは振り向いた。左肩の痛みも、気にはならない。

暗い闇の奥底で、何かが動いていた。明度に余程敏感な眼を持っていない限り、闇に溶け込んで判別できないほど淡く、それは紫色に光っている。

霧のようであった。紫の霧が10mほど向こうで凝り固まっている。

ふいに、それが人の形を取り始めた。

――これは!?

その時、後ろでベリアルが短い叫びをあげた。

ガディが慌てて振り返ろうとする。眼の端に棒立ちになったベリアルの姿が映る。

だが、それ以上振り向けなかった。ガディの首筋に、鋭いものが突きつけられていた。

それは恐ろしく長い、深紅の爪であった。その爪が、ガディの頸動脈の真上の皮膚を軽くへこませるようにして押しつけられている。あと少し力を加えただけで、血が滲んできそうであった。

敵の気配は皆無の筈であった。

「動くな」

天井から深みのある男の声が響いてきた。

「動けば貴様と、そこの僧侶の命はない」

爪は、その天井から伸びていた。

ガディの身のこなしなら、この爪に致命傷を与えられる前に飛び退くこともできる。背後の妖気を感じた瞬間からわずかに腰を落としているため、一動作で床を蹴れる状態にあった。

しかし、ベリアルは既に身体の自由を奪われているようであった。ここでガディが一撃をかわして態勢を立て直しても、ベリアルは助けられない。

周りを囲まれていることにも、ガディは気づいていた。気配はなかったが、少なく見積もって五体以上の敵が動き回る音が聞こえてくる。

闇の中で、真っ赤な眼がちらちらと光った。一瞬だけ、それがランプの光の範囲をよぎる。か細い光の中に、その頭部が浮かび上がった。

蒼白い、人に似た顔であった。

かっと開かれた口から、異様に発達した犬歯が見える。血のように紅い眼も、人間やエルフのものではあり得なかった。

不死と呼ばれるものの中でも最も高等な部類に属する人型怪物・吸血鬼であった。不死怪物らしからぬ素早い動作から繰り出される鋭い爪に、高レベル戦士の鍛え上げられた肉体をも瞬時に麻痺させる毒と、2レベルに値する精気を吸い取るエナジードレイン能力を持つ恐るべき化物である。

その吸血鬼が五匹以上。いかに冒険者最強の戦士とうたわれるガディでも、一匹片づけるのがせいぜいであった。しかも左腕は石化している。

天井の奴も凄腕だった。気を抜いている時ならいざ知らず、神経を集中した時のガディはわずかな空気の流れでも敵を察知する。そのガディに気づかれることなく爪を突きつけるなど、そうそうできる芸当ではなかった。

霧の放つ妖気も、更に強まっていた。振り向きたかったが、動く訳にはいかない。

まさに絶体絶命の状況であった。

「下手な考えは起こさぬことだ。殺そうと思えば、今すぐ殺せる」

「何故そうしない？　吸血鬼どもの餌食にでもするつもりか」眼球だけを動かして上方の相手を見ようとしながらガディが言った。

見えない相手が、笑ったようだった。

「それも面白いが、今は生かしておいてやる。貴様は頭が働いていないと困るのでな」

吸血鬼が一匹、背後から近づいてきた。ガディの身体がぴくりと動く。

「抵抗するなら、僧侶の方から殺す」

天井からの声に、ガディは身を固くした。吸血鬼相手に接近するぐらいなら戦って死にたかったが、ベリアルの命もかかっている。もはや逆らう術はなかった。

吸血鬼の爪が、軽く右腕を刺した。途端に右腕全体の感覚が失せる。局部的な麻痺である。これで、ガディは両腕をもがれたも同然であった。

首に当てられていた爪が上に引かれる。

ガディは天井を見た。

その瞬間に、それは逆さにぶら下がっていた天井から離れた。マントがばさりと音を立てる。宙で半回転し、それはガディの目の前に降り立った。

金色の髪を持つ、長身の男であった。王族や貴族の礼服のような、この地の底に似つかわしくない群青の衣に身を包んでいる。

恐ろしいほどに、美しい顔をしていた。この世に完璧な美貌があるとすれば、まさしくそれであった。

男の目も、やはり血の色をしていた。開きかけた唇の間から、尖った二本の牙が覗く。

「こちらから出向こうと思っていたが、その手間が省けたな」

無表情な男の顔に、軽く微笑が浮かんだ。

「私は吸血鬼の王・バンパイアロード。ようこそ、我らが支配者の棲処へ」

周囲が明るくなった。壁に取りつけられた燭台に、一斉に火が灯されたのである。

妖気の正体に、ガディは気づいた。

「ワードナ――」

振り向いたガディの眼に、薄暗い蝋燭の光に照らされた玉座が映った。先程、霧のわだかまっていた辺りである。

水晶や金銀、黒曜石などで装飾された豪奢な玉座に、一人の男が座っていた。ゆったりとした黒のローブを身につけ、白い髭が足元まで伸びている。うつむいているため顔は良く見えなかったが、高齢の老人であることは間違いなかった。

噂に聞いた、ワードナの姿であった。

ガディとベリアルは、ワードナの玄室に転移していたのである。

六匹の吸血鬼が、二人を囲んでいた。その不死なる者どもの天敵である僧侶のベリアルは、バンパイアロードによって一早く麻痺させられている。

現在、反撃の望みは万に一つもあり得なかった。

二匹の吸血鬼がガディを強引に振り向かせた。ワードナの玉座が視界から外れる。

「さて」バンパイアロードが片腕の指を伸ばし、ガディに向けた。「そろそろ質問に答えてもらおう」

「何」

キキッ。

天井から突然、一匹の蝙蝠が飛び立った。それはガディの回りを二、三度回ると、バンパイアロードの肩に降りる。並の二倍の大きさのある、黒い吸血蝙蝠であった。

スカルダの漂流する回想

「私の下僕が報告してくれてな。貴様らのパーティに奇妙な奴がいると聞いた」

バルカンのことか。

どうやら吸血鬼どもが自分を生かしているのは、バルカンについて何か聞き出すためだとガディは悟った。

「さあな。俺の仲間にはおかしな奴が多くてね」

今、ガディにできるのは、何とか時間を引き延ばすことであった。ここで迂闊なことを喋ると、ベリアルともども化物の餌食にされてしまう。

「ほう」バンパイアロードの紅い眼が、すっと細くなった。「我々を目の前にして、へらず口を叩ける者も珍しい」

ガディに向けられた爪が、瞬時に1m近く伸びる。紅く光る先端が、ガディの眼球直前で止まった。

ガディは眼を閉じなかった。そのまま、爪の向こうのバンパイアロードを睨んでいる。

バンパイアロードの唇が、楽しげに吊り上がった。

「その強情が、どこまで持つかな」

爪の先から、毒液が噴き出す。

刺すような痛みとともに、ガディの視界が暗黒に染まった。

SCENE22

§ SKALLDA §

スカルダの故郷は遥か西方の、深い森の中であった。

彼の記憶に、両親の姿はなかった。物心ついた時から樵を営む祖父と二人で、森の奥の小屋に暮らしていた。

一番近い町でも、そこから半日はかかった。8歳になって祖父とその町に出るまで、スカルダは祖父以外の人間、それにエルフやドワーフたちを見たことがなかった。

スカルダは、森が好きだった。森の木々や、そこに棲む動物たちが好きだった。一日の大半を森を駆け、動物と戯れることに費していた。

初めて町に連れられた年から、祖父は自分が町に出る時にはスカルダも同行させるようになった。だが、スカルダはそれが嫌だった。

幼い彼の心には、活気溢れる町があたかも死んでいるかのように感じられた。そこは騒騒しいばかりで、森のような優しさがない。耳をすませば聴こえてくる木々の囁きや、動物たちの笑い声がなかった。

祖父もスカルダの思いに気づいているようだったが、それでも半年に一度は必ず彼を町に連れて行き、買出しの手伝いをさせた。

歳月は流れた。スカルダは十五になり逞しくなっていたが、不思議なことに祖父は一度も樵仕事を手伝わせなかった。

その冬に、祖父は老衰で死んだ。寒い朝、ベッドの上で眠っているかのように冷たくなっていた。

前の晩、祖父はスカルダを呼んだ。

「スカルダ、まだ森は好きか」

「はい」

「儂はもう長くはあるまい。儂が死んだら、お前はどうする気だ」

「迷っています」スカルダは真剣な面持ちで答えた。

できれば森で暮らしていきたかった。だが、樵としての知識と経験はまるでない。それに、祖父は好きであったが、木々を切り倒す樵仕事には魅力が感じられなかった。

「お前は森に好かれとる。ここにいても、何年か暮らしてはいけるだろう。だが、それでは駄目だ」

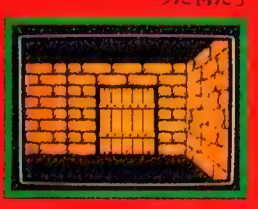
「何故です」

「森や、あの小さな町が全てではない。もっと広い世界に出て、守るべき大切なものを探すのだ」

「守るべきもの？」

「そうだ。それを持った者は、持たぬ者よりずっと強くなれる。この世を生き抜く力になる」

祖父が、ふっと遠い目をした。「お前の父はそれを持っていた。父である儂よりも早く死んだが、この人生は悔いの残るものではなかった筈だ」



「父さんが　」

「良いか、スカルダ。森を出て旅に出ろ。そして、自分の生き方を見つけ出せ」

それが、祖父の遺言になった。翌日、スカルダは埋葬を済ま

せるとすぐに旅仕度を整え、その日のうちに出発した。

それから半年余り、スカルダの放浪の旅は続いた。その間に彼は、祖父との生活だけでは知り得なかった、様々なことを学んだ。荒涼とした海岸や、美しい田園地帯、巨大な城塞とそこに住む貴族、呪文所有者の魔力の素晴らしさと恐ろしさ、そして人との出会いと別れ　経験した全てのものが、まだ少年だったスカルダを次第に青年へと変えていった。そして、百々森を取り囲んで培った肉体が、かなりの荒事に耐えられるということも知った。

これだろうか？　とスカルダは考えた。祖父が言い残した大切なものとは、誰にも負けない力を身につけることだろうか、と。

その頃、宮廷ワードナ討伐の話がスカルダの耳に飛び込んできた。それまで宮廷の者しか利用できなかった訓練場が開放され、冒険者として登録した者なら誰でも、戦士や魔法使いとなるのに必要な基礎的訓練が受けられるのである。しかも見事ワードナを討ち果た

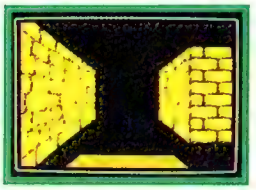
せば、近衛隊として貴族の仲間入りもできる。

彼はすぐさまトレボー領へと向かい、城塞都市に入った。

街外れの登録所で能力測定を受けた結果スカルダには戦士か盗賊になるだけの素養があったが、彼は迷うことなく戦士を選んだ。

転職とは異なり、初めてこれらの職業になる者の肉体には他職業の癖がついていない。スカルダはさほどの苦労もなく、戦士の基礎を身につけることができた。

冒険者によるワードナ討伐が始まってからまだ一月と経ってはいなかったが、街には多くの者たちが集まっていた。おかげでパーティを組む仲間は、その夜に見つかった。



そのうちの二人は、スカルダと同じく当日登録を済ませたばかりであった。一人はスカルダの数人前に検査を受けていた男で、戦士志望のところを不合格にされ、大騒ぎの末に盗賊に落着いたジャバである。

そしてもう一人、高名な魔術師の弟子だと言う魔法使いの美少女がサラであった。

迷宮で修業を始めて一年が経過した。パーティのメンバーは頻繁に変わっていったが、スカルダとジャバ、サラの三人は常に一緒にやってきた。やがてベリアルとシルバーが加わり、ガディが仲間となる。

絶え間ない怪物たちとの戦いで経験を積み、スカルダは日ごとにその腕を上げていった。

スカルダにとってはワードナすら、いつか倒すべき敵の一人に過ぎなかった。戦い続ける理由は一つ、戦いに勝つためであった。

それが何の為であるのか、彼にはまだ、見えてはいなかった。

誰かに肩を激しく揺すられて、スカルダは目が覚めた。

背に堅い床があった。倒れたまま、気を失っていたらしい。

正面に、相変わらず薄笑いを浮かべているアルハイムの顔があった。

「ようやく起きてくれましたか」

「どうしたんだ……ここは？」

朦朧とした意識を振り払って、スカルダは半身を起こす。

傍らに、気絶したサラが倒れていた。

「サラ！」

スカルダは飛び起きると、素早くサラを抱え上げた。

「心配ありませんよ。あなた同様気を失っているだけです」アルハイムが静かに言った。

サラの意識が戻った。

「……また倒れたの？」

「違うらしい。立てるか」先刻のこともあり、スカルダは慌ててサラから離れようとする。

「ううん、立てない」

「嘘だ」

「判る？」

「判るね」

「残念。それじゃからかえないわ」

「ふざけてる場合じゃないですよ、お二方」

アルハイムが諍いを切らした。「ジャバが転移の罠に引っかかったおかげで、我々は分散してしまったようです」

「一難去ってまた一難か」

スカルダはサラを立たせると、辺りを見た。

地下洞のどこかであった。

「見覚えはあるな」

「多分、第６の地下洞だわ」サラが呟いた。

その記憶が正しければ、ここはワードナの玄室のある第７エリアの手前の地下洞であった。この通路の終点の玄室に、第７の地下洞に通じる転移地帯があるのである。

スカルダたちも、幾度か歩いた場所であった。

「全く巻き込まれた私はいい迷惑ですよ。地上に帰ろうって時に、こんなところまで飛ばされたんですからね。罠の解除にかけては城塞都市一などと、誰が言ったのやら」

「内心喜んでるんじゃないの？　もしこれで私たちパーティの誰かが欠けでもすれば、それこそあなたの希望通りだものね」

「この街で、他のパーティの無事を願う者などいませんよ。例え、善であってもね」

アルハイムが憂みのある笑いを浮べた。「あるのはパーティの仲間と、敵だけです」

「今はどうだ」

スカルダが言った。「どっちにせよ、地上に戻るならこの先の玄室にいる護衛を片づけなきゃならない。お前は俺たちの敵か、それとも味方か？」

「あなたさえいいならばパーティを組みますよ。私だって最下層を独りで歩くほど自信過剰じゃない」

「決まりだ。いいな、サラ」

嫌そうな顔をするサラに言い聞かせるようにスカルダは言った。

「仕方ないでしょうね。三人だって危ないんだから」

不機嫌そうであった。よりによってアルハイムと組む羽目になったのだから、無理もなかった。

「アルハイム、俺たちはどの位のびていた？」

「４、５分といったところですか」

「よし、急ごう。皆が無事ならこの層の起点にいる筈だ。遅れ過ぎると捜しに来かねない」

「他人の心配が先とは贅沢な話だ。こっちが死ぬかもしれないって時に」

アルハイムが肩をすくめた。「戒律が悪なら我が身が第一、仲間の捜索など絶対にしませんがね」

三人は玄室に向けて進み始めた。

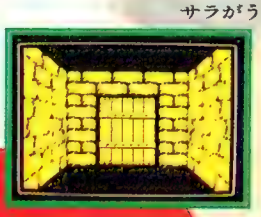
ここ、第６の地下道は他のエリアに比べて格段に短い。スカルダたちはほどなく玄室の扉の前に達した。

扉の外観は、第一の玄室と変わりがない。

スカルダは立ち止まると、二人に眼で合図した。

――行くぞ。

サラがうなづき、アルハイムは無言で唇の端を歪める。



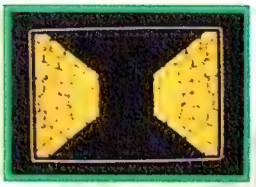
足を扉にかけ、一気に蹴り開けた。

薄暗い玄室の中扉から10mと離れていない位置に護衛の一団がいた。それらが一斉にスカルダを振り向く。

緑がかったローブをまとった、六人の人間たちであった。

ワードナに５レベルまでの魔導師呪文が使えるだけの魔力を授かった、魔法使い部隊である。

もとはどこからか集められてきたごろつきの集団らしく、本来の魔法使いたちのような知能は持ち合わせていなかったが、ワードナに与えられた呪いのローブの力で大凍クラスの呪文を唱えてくる。一人でも仕留め損なうと、大きな打撃を受ける恐れがあった。



魔法使いたちの反応は思いの他素早かった。玄室に踊り込んだスカルダたちを見るや、間髪入れずに呪文の詠唱を始める。

サラの大凍が、わずかに遅れた。

――まずい！

スカルダは直感で、サラより先に四人の敵が呪文を唱え終えることを察知していた。そのうち一人を斬り倒しても、このままでは三回の大凍がスカルダたちに降り注ぐ。

スカルダはともかく、体力的に劣る魔法使いのサラが耐えられるものではない。

唯一の望みはアルハイムの支援呪文であった。

魔法使いのように、強力な攻撃魔法を持ちながら腕力のない敵を多数相手にする場合、僧侶は敵の呪文を封じ込める静寂の呪文自体に殺傷効果はないものの、一度呪文を封じてしまえば剣すら扱えない魔法使いなど、豚鬼にも劣る戦闘力しかないからである。

アルハイムが先にこの呪文を唱えられれば、形勢は逆転する筈であった。

敵集団に向かって駆ける一瞬の間に、スカルダは考えを巡らせていた。

その時背後から低い唸りが巻き起こった。アルハイムの呪文が効果を現したのである。

しかしそれは、静寂の呪文ではなかった。凄まじい突風がスカルダの横を通り抜ける。

――何だ？

前方の空気が激しく渦を巻いていた。その渦が、今まさに詠唱を終えようとする魔法使いたちを包み込んだ。

スカルダは足を止めていた。

目の前の空間が、鮮血で染まった。六人のローブが切り裂かれ、噴き出した血が空中で渦巻きと化す。

僧侶系第６レベルの呪文・空刃であった。超高速でかき回された空気が真空の刃を造り上げ、対象物に無数の傷をい刻みつけるかまいたちの呪文である。

血の渦巻きは、真空の刃が血液を吸い上げたために生じたものであった。

僧侶には珍しい、強力な中規模攻撃呪文である。しかし同レベルに快癒の呪文があり、ほとんど使用する者はいない。

非実ベリアルは使ったことがないため、スカルダも空刃を見るのは初めてであった。

六人が血飛沫を上げて次々と倒れる。

瞬時に一集団を切り刻んだ呪文に、スカルダは驚愕を覚えていた。その威力と、第６レベルの魔法を使ったことに対してである。

そのせいで、背後の壁を這うように走る影に気づくのが一瞬遅れた。

影は、サラに向かっていた。

危ない、と叫ぶより先に身体が動いていた。サラの首筋へと伸びる“気”の軌跡に、自分の肉体を滑り込ませる。

壁に叩きつけるように振ったカシナートの剣が、影――茶忍者の胸に深く食い込んだ。

だが、忍者の手にしていた短刀も、スカルダの首の側面を抉っていた。間に入らなければ、サラの首は確実に切断されていたであろう。

大量の血液が噴き出すのが判った。意識が急速に遠のき、全身の力が抜けていく。

視界が完全に暗くなる寸前に、サラの声が聞こえたような気がした。

スカルダが再び意識を取り戻した時、目を赤くしたサラの顔がそこにあった。

床の上に正座したサラの膝を枕に、彼は寝かされていた。

「サラ……無事か」

必死の思いで声を絞り出す。しかしそれは自分でも信じられぬほどか細かった。

サラの表情が、パッと明るくなった。

「スカルダ！　持ち直したのね」

「言った通りでしょう。大治でも充分助かるものですよ」

スカルダの足下にアルハイムが立っていた。

「もう一度唱えておけばもう立ち上がれるでしょうよ」

呪文の詠唱を始めたアルハイムをサラは上目で睨みつけたが、すぐスカルダに向き直る。

「何だってあんな無茶を……転職直後の肉体は蘇生する可能性が極めて低いって言うわ。もしあのまま完全に心臓が止まっていたら……」

大粒の涙が溢れてきて、サラは顔をそむけた。十七の若さで数々の高位魔法を操る気丈な娘が、二年に渡る過酷な修行の間一度も見せたことのない涙であった。

「肉弾戦は俺の仕事だからな。それにもう仲間の――それもきみが死ぬなんてのは御免だよ」アルハイムの大治でかなり力を取り戻し、ようやく人並の声でスカルダは言った。「しかし味方の魔法に驚いて敵を見逃すなんて、まるで迷宮に入ってきたばかりの新参者みたいだな」

「それよ」

サラがまた涙の乾かない顔を上げた。「空刃の呪文でしょう？　あんな魔法を使ったのに、失血死しそうだったあなたにまで快癒の呪文を惜しんだのよ」

「またその話ですか」

不快そうにアルハイムが声を上げた。どうやらスカルダの意識がなかった間にも、同じようなやりとりがあったらしい。

「大治で充分、と見たからですよ。現にスカルダはこうして生きている。感謝されても責められる筋はないと思いますがね」

「私だって呪文の素人じゃないわ。スカルダの心臓は停止する寸前だった。快癒なら確実に助かるけれど、効果にばらつきのある大治では、あの時助かる見込みは半分もなかった筈よ」

「さあてね」

アルハイムが肩をすくめた。

「もし死んでいたとしたら、運が悪かったってことですよ。快癒という呪文は、最後の最後までとっておくもの」

「空刃は使っても」

「そのおかげで魔法使いどもは片づいたでしょう。静寂の効果が全員に及ぶなど、それこそ半分以下の確率ですよ」

「それとこれとは」

「サラ、もうよせ」

そう言って、スカルダは身体を起こした。完全とはいかないが、普通に行動するぐらいの体力は回復している。大量に失った血液も、呪文による増血作用で元に戻りつつあった。

「俺は助かったんだ。それでいいさ」

まだ何か言いたげなサラを制し、腕組をしたアルハイムを見る。

「世話をかけたな、アルハイム」

「当然でしょう。我々はパーティの仲間なんですから」

それだけ言って背を向けると、アルハイムは魔法使いたちの倒れている血の海に向かって歩き出した。

立ち上がって後を追いながらも、スカルダの心にはサラの言葉が引っかかっていた。

“快癒なら確実に助かったが、大治では見込みは半分以下――”

――ことによるとこの男は、本気で俺の死を願っていたのかも知れないな。

奸計に長けたアルハイムをどこまで信用できるか計りかねながら、スカルダは血まみれの屍を調べている当人の傍らに立った。

アルハイムの足下に、貧相な魔法使いの一人が転がっていた。

「こいつだけはまだ息があります。虫の息ですがね」　（以下次号）

隣り合わせの灰と青春

最終回

by BENNY MATSUYAMA

ベニー松山作　イラスト／末弥純・品川るみ

前号までのあらすじ

宝箱に仕掛けられた空間転移の罠により、地下迷宮最下層で3グループに分断された一行。ワードナの玄室へと転移させられたガディとペリアルは吸血鬼部隊によって捕獲され、魔人バンパイアロードの手でバルカンについての尋問を受け始める。一方、合流地点に向かって行動を開始したスカルダとサラ、そしてアルハイムは、第6の玄室で待ち構える魔法使いたちを何とか一掃するものの、隠れていた忍者の一撃からサラをかばったスカルダが深傷を負ってしまっていた。大量出血のため死にかけたスカルダであったが、アルハイムの唱えた大治の呪文の助けで運良く一命を取りとめる。しかしサラはもう1ランク上の治療呪文・快癒でなければスカルダの助かる見込みは半分にも満たなかったとアルハイムを責める。その場は収まったものの、スカルダの心中にはアルハイムへの疑念が巻き起こり始めた。その頃、残るジャバ、バルカンたちもまた、怪物との死闘を繰り広げていた……。

SCENE 23

§ 7TH AREA §

ごう！

魔獣が咆えた。凄まじい咆哮に空気がびりびりと震動する。

奇怪な生物であった。頭部から腹部は巨大な獅子のそれでありながら、そこから後ろの半身は黒い山羊の身体である。前肢からは鋭い爪が伸び、後肢は硬い蹄に包まれている。

獅子の背には蝙蝠のものに似た厚い翼が生え、魔獣が身動きするたびにバサバサと音を立てる。

多種の生物の肉体を合成した、異様な魔物である。だが、もっと異常な特徴を、それは持っていた。

獅子のものと、背の中央から生えた山羊のもの、そしてぬめりを持つ長い尾の先にある蛇のもの。魔獣には、三種の頭があるのである。

魔法によって生み出された合成獣・キメラであった。いつの時代に造り出されたのかも判らなかったが、今では一つの種となってどこかの高山地帯に生息しているらしく、迷宮下層に大量に送り込まれている。

獅子の頭が、もう一度咆えた。山羊の蹄が石床を掻き、ぐねぐねとくねる尾の先で大蛇の口が炎の息を漏らす。

巨体をたわめ、キメラは跳躍しようとした。

「うるせえっ」

白刃が一閃した。次の瞬間獅子の首が落ち、黒山羊の頭が跳ね飛ぶ。

魔獣は前のめりに倒れ、絶命した。

「こんな時に騒ぐんじゃねえ」

ジャバであった。

それで、戦闘は終了していた。最下層の、第五エリアの玄室である。

キメラの屍のすぐそばには、喉を掻きむしるようにして悶死している四人の魔法使いが転がっていた。いずれも唇や爪が青黒く変色し、極度の酸欠状態にあったことを示している。

中規模範囲の空間の酸素を全て消滅させる魔法使い系第六レベルの呪文・窒息である。空気中はもとより、既に血液中に取り込まれた体内の酸素までも消し去るため、有効半径内の生物を瞬時に酸欠死させる恐るべき呪文が、魔法使い部隊を襲ったのである。

バルカンの仕業だった。

護衛の全滅した今や、玄室内にいるのはジャバとバルカン、それにラシャの三人だけであった。

「凄い……」

ジャバの背にかくまわれるようにして立っていたラシャが呟いた。「本当にジャバ？」

キメラを一撃で葬った剣技のことを言って

主な登場人物

- スカルダ……主人公。レベル13の戦士から侍に転職したばかり。
- ジャバ……パーティの一員。盗賊だったが魔法の品で忍者に。中立。
- ガディ……レベル13の戦士。中立。
- ペリアル……レベル13の僧侶。善。
- サラ……レベル12の女魔法使い。中立。
- シルバー……魔法使い。ロストした。
- バルカン……謎の魔法使い。悪。
- 老エルフ……ダークゾーンに棲む術者。
- トレボー……城塞都市の狂君主。
- グレプナーグ……トレボーの側近。魔法使い。
- ワードナ……悪の大魔法使い。
- ハ・キム……レベル12の忍者。悪。
- アルハイム……レベル12の僧侶。悪。
- ラシャ……レベル13の女盗賊。

待望

単行本「隣り合わせの灰と春春」は11月19日頃発売予定 定価980円

いるのである。

「凄かねえよ。畜生、ボルタックのくそおやじめ！　あの短刀で忍者になっても害はねえなんてぬかしやがって、指先が鈍くなってやがる。いくら戦えるようになったって、罠を引いちゃあ――」

転移の罠を作動させてしまった後悔と怒りで、ジャバは言葉を詰まらせた。

ラシャの表情がパッと明るくなった。

「じゃあさ、あたしをパーティに入れればいいじゃない。ジャバはもう盗賊じゃないんだし、一つのパーティに忍者と盗賊がいたっておかしくないでしょ？」

「それどころじゃねえだろう、馬鹿！」

ジャバがラシャを睨みつけた。

と、その時バルカンの声が響いた。

「行くぞ」

見ると、バルカンは次の第６エリアへと向かう転移地帯に向けて歩きだしている。

「待てよ、バルカン。もしバラバラになった時はこの階の起点に向かうことにしてるんだ。そっちじゃねえ――」

言いながら、ジャバは違和感を感じていた。しかし、重要だと判っていながら、それが何に対してなのかはっきりしない。

「片腕が石化したままの戦士と転職したての侍が、そうそう護衛どもを突破できるものか。こちらから探されれば、手遅れになるかも知れんぞ」

バルカンは振り返らずに言った。「不安なら来んでもいい。俺一人でもこと足りる」

「ラシャ、お前は帰れ」

唐突に、ジャバが言った。その眼は、バルカンの背を見据えたままである。

「どうしてさ。一緒に行くよ」

「危ねえんだよ。足手まといだ」

転移地帯に踏み込んだバルカンの姿が消えるのが見えた。その肉体はもう、次の地下道にあるであろう。

「今日命があったのも運が良かっただけだ。お前はこの迷宮にゃ向いてねえ――」

ジャバが、ラシャを見た。「村に帰れ」

「何で」

ラシャの両目に大粒の涙が溢れ出していた。

「どうして連れてってくれないのさ。あんただって　ジャバだって、勝手に村を出ていっちまったくせに。昔は、いつだって一緒だったのに、自分だけで勝手に決めて……いつ死ぬかも知れないこんな迷宮に来て。あたしはあの村で、ただ帰りを待ってるの？　知らないうちに死んでいても？　いやよ、そんなのは、絶対に　」

「ラシャ　－」

ジャバはこれまでラシャがどんな思いでこの迷宮を生き抜いてきたか、深く考えたことはなかった。ただ反抗し、駄々をこねているだけだと思っていた。それだけに、ラシャの言葉は痛かった。

「判った。街にいてもいい、俺がワードナを倒して近衛隊に入ったら、一緒に親父とお袋を迎えに行こう」

「本当？」

「嘘をついてどうすんだ。ただ、もう地下には入るな。いいな」

「うん」

「じゃあもう城へ戻れ。俺はバルカンとスカルダたちを探しに行ってくる。罠を引いちまった俺が行かなきゃあ、申し訳が立たねえからな」

「うん――」

「行ってくるぜ」

ジャバは駆け出した。その姿が、闇に溶け込むように消失する。

「ジャバ――」

ラシャは何度か来て覚えている起点への転移地帯に目を向け、再びジャバの消えた場所に視線を移した。

そして、歩き出した。

最下層第７エリア――。

悪の大魔術師ワードナが吸血鬼部隊に護られて立てこもっている、最後の砦である。

他の６エリアと同じく、曲がりくねった地下道と一つの玄室で構成された地底洞窟であった。

だがそこに、帰る術はなかった。他のエリアに必ず存在していた転移地帯が、そこにはないのである。

それは完全に独立した、出口なしのエリアであった。

その暗い地下道を、三体の人影が移動していた。

スカルダたちである。スカルダを先頭に、アルハイムとサラで三角形型の隊列を組み、ワードナの玄室のあるべき終点に向かって歩を進めている。

三人とも、緊張した顔つきをしていた。アルハイムですら、いつの間にか口の端の笑いが消えている。

本来なら、第六の玄室から最下層の起点に戻り、ガディやジャバの合流を待つ筈であった。

だがそのうちの二人が吸血鬼どもに捕えられ、ワードナの玄室に監禁されているとの情報をスカルダたちは得ていた。護衛の対応の早さに疑問を抱いたアルハイムが、もはや死ぬ寸前だった魔法使いの一人から、その伝令があったことを訊き出したのである。

助かりようのないほど深傷を受けていた魔法使いは、もともとワードナに対して忠誠心を持ってはいなかったらしく、アルハイムの封傷と開傷を使った拷問であっさりとそのことを吐き、ほどなく力尽きた。

話によれば殺されてはいないらしい。しかしそれも長いことではない。

城に戻り、応援を呼ぶ時間はなかった。それ以前に、最下層に降りてこれる冒険者が他にいる訳もない。

仲間を見殺しにしたくなければ、すぐに行動を起こすしかなかった。ワードナの玄室に侵入し、捕われている二人が身につけているであろう転移のかぶとの能力で上層へテレポートする……。

ワードナを倒せない以上、残された方法はこれだけであった。

初めスカルダは単独で向かおうとした。が、サラが強く反対した。途中複数の敵と遭遇した時、呪文の使えぬスカルダ一人ではどうにもならない、と。

スカルダとしては、このあまりに危険な救出行にサラを連れていきたくなかったが、確かにサラの意見は正論であった。もし一人で行って返り討ちになれば、自分だけでなく捕虜の二人の命もなくなる。スカルダは渋々この案を受け入れた。

意外なのは、アルハイムまで同行を願い出たことであった。

便宜上パーティを組んだことになってはいたが、悪の戒律のアルハイムがそこまでスカルダたちに付き合わねばならない義理はない。そのまま起点に戻り、地上への転移地帯を使って帰ってしまってもいいのである。

"一度ワードナの部屋を見てみるのも悪くないですからね。それに、もし倒せることがあれば私にも報償が転がり込む訳でしょう？新しいメンバーを探しに行くより実があるかも知れません　"

背後のアルハイムの気配を探りながら、スカルダは先刻のやりとりを思い出していた。

こいつの目的は何だ？

あわよくばワードナを倒す、などという理由が嘘であることは明白であった。相手は全ての呪文を身につけ、封印された古代魔術にまで手を染めていると聞く大魔導師である。三人構成の半端なパーティでは、まぐれでも勝てるものではない。

――得があるとすれば、俺たちが完全に壊滅してしまうこと――だとすれば裏切りもある。だが、それなら俺とサラが気絶していた時に、容易にとどめをさせた筈だ。第六の玄室の護衛を突破するために生かしておいたとも考えられるが……いや、このエリアで俺たちを仕末したらもっと分が悪い。

いくら考えても、アルハイムの同行の答えは出てこなかった。

思考に没頭していたスカルダが我に帰ったのは、もう地下道のかなりの距離をこなした後であった。

いつしか回廊は長い直線になっていた。

スカルダを現実に引き戻すきっかけとなった強烈な気配が、前方の暗闇から発散されている。

獣が牙を剥き出しているような、とてつもない殺気である。物理的な圧力すら感じられる、禍々しい瘴気であった。

スカルダの全身が粟立っていた。首筋にぞくりとする悪感が疾る。

気配にうといアルハイムとサラも、同様の殺気を感じているようであった。

ぐるるるる……。

低い唸り声が、地下道の中で反響した。

闇の中、金色の甲冑が浮かび上がる。水牛のような二本の角が鈍く光った。

かぶとの奥で両眼を爛々と輝かせた、巨体の男であった。片手に幅広の長剣を持ち、全身を立派な黄金色の鎧に包んでいる。

その男が、獣に似た唸りを上げているのである。

かっ。

男が、煙に見えそうな息を吐いた。

「仲間を、助けにきたか――」

人の言葉を発音するのに適さない声帯で、無理に喋ったといった声であった。喉の奥がゴロゴロと、鳴り続けている。

ワードナにつき従う戦士たちの頂点に位置する魔法剣士・レイバーロードである。

スカルダは初めて出会う相手だったが、アルハイムたち悪のパーティは、一度戦ったことがあった。

「気をつけて下さい。ハ・キムとゴグレグが二人がかりで倒した難物です」

アルハイムが背後で囁いた。「ワードナの魔力で、何度でも蘇ってくる分は不死の魔人のようです」

「ここは通さぬ」

そう言った瞬間、レイバーロードは唸りを上げて突進してきた。

巨体に似合わぬ速さであった。スカルダの掲げた盾に重い一撃が加えられ、鈍い金属音が響く。

"気"で動きを読んでいなければ、かわせそうにないスピードである。

レイバーロードの剣が、一撃、二撃と振り降ろされる。隙のない剣技に、スカルダは防戦一方になっている。

サラとアルハイムの呪文は、まだ詠唱の半分も終わってはいない。

四度目が振り上げられた時、スカルダは後方から急速に近づいてくる気配を感じ取った。信じられぬ速さで、それは迫りつつあった。

気がそれ、数度の衝撃で痺れかけた盾を持つ腕が下がる。

そこに剣が襲いかかる。

――しまった！

スカルダの横を、疾風が駆け抜けた。

レイバーロードの身体が揺らいだ。そして、崩れ落ちるように床に倒れる。

やや遅れて、跳ね飛んでいた首が落ちた。

「よう」

レイバーロードの屍の向こうの人影が言った。「どうやら生きてるようだな」

ジャバであった。ジャバが後方から走り抜けざまに、レイバーロードの首を切断したのである。

振り向くと、バルカンが立っていた。

「どうしてこのエリアに来てると判ったんだ」

向き直り、スカルダは尋ねた。

「魔法使いどもの血の海から、足跡がこっちへの転移地帯に続いてたからな。で、来てみりゃそこの奴との戦いの真っ最中だったって訳よ。お前にかかりっきりだったおかげで隙だらけ。楽なもんだぜ」

そう言って、ジャバは転がっているレイバーロードの首を顎で指した。

五人は急ぎ状況を確認しあった。

「あの魔法使いが嘘をついていなければ、ワードナの玄室に捕えられているのはベリアルとガディですね」

アルハイムが唇を歪め、笑った。「これなら何も逃げずとも、ワードナを倒せるかもしれませんねえ。忍者に、爆炎も操る魔法使いが加わったんですから」

「むしろ戦わざるを得なくなった。転移で飛べるのは一度に六人までだが、ガディとベリアルを助けると俺たちは七人になる。下手をするとまたバラバラにテレポートさせられ、今度こそ君の中へ、ということもあるからな」

スカルダが言った。

「二人外して逃げる手は使えないわね。転移を使えるのがバルカンだけじゃ。全ての呪文をマスターした魔法使いがいるといないでは大違いだもの」

サラの言葉通りであった。現在この五人の中で、自力で逃げられるのはバルカン一人である。そのバルカンを外しては、この救出計画の成功率は大きく変わってくる。

興奮
単行本「隣り合わせの灰と青春」は
11月19日頃発売予定
定価980円

「戦う」

バルカンのくぐもった声が響いた。「勝てぬ戦いではない。呪文から逃れた吸血鬼さえ何とかできれば、あとはワードナのみだ。解呪はそこのアルハイムとやらが得手であろう？」

スカルダの目に、地下9階の玄室での光景が浮かんできた。確かに、アルハイムの解呪は見事なものであった。

肚は決まった。

「よし」

スカルダは一同を見回した。「戦おう。ただし、誰も死ぬな――」

一行は、ワードナの玄室に向けて進み始めた。

だが、先頭を切るジャパの表情には、わずかな曇りがあった。先程から頭の隅に残っている違和感が、更に膨らんでいたのである。

何が変なのか判らねえが、とにかく妙だ。絶対におかしいって気がするぜ。こんな時の俺の勘は、決まって良く当たりやがる。

それも、数秒のことであった。これから数分と待たずに訪れるであろうワードナとの決戦に、ジャパはその違和感を気にかけなくなってしまっていた。

ガディの五感は、聴覚を除いて完全に麻痺させられていた。

精密な器具のようなバンパイアロードの爪で、ガディはありとあらゆる神経に麻痺性の毒を注入されたのである。

皮膚の感覚も全て失われているため、もはや空気の流れも読み取ることはできない。

まともに機能しているのは脳と耳、そして声帯だけである。尋問に必要な器管以外は、執拗なまでに丁寧に、その働きを殺されていた。

その唯一残った感覚器管に、バンパイアロードの声が聞こえてきた。さしもの不死怪物の王も、その口調にいらだちの色を隠せなかった。

「これほどしぶとい人間を相手にしたのは初めてだ。たかが劣等生物とはいえ、その点に関しては敬服せねばならん」

「光栄だね」

ガディは全く動じていないといった調子で答えた。

「普通なら、もうとっくに悲鳴を上げて許しを乞うているところなのだがな。精神の弱い者なら、視覚を奪われただけで耐えられなくなる」

「へえ」

「私も貴様らのような種がどれだけの間、その聴覚だけの状態で持ちこたえられるのかを確かめてみたい気がする。しかし残念だがこれ以上遊んでもいられなくなった。それより今はあの黒いローブの男のことが知りたい」

しゃっ！

何かが鋭く空気を裂く音が聴こえた。通常ではガディもとても聴き取れないほど小さな音だったが、生きているのが耳だけの今、その聴覚は恐ろしく鋭敏になっていた。数m先で針が落ちた音さえ、拾えそうな気がする。

それは、バンパイアロードの爪が伸びる音であった。

「これが最後の質問になる。もう何回繰り返したかも忘れたがな。だが、これまでのようにとぼけた答えが返ってきたら、爪で貴様の心臓を貫く」

「――」

ガディは無言だった。まるで何かの思考に没頭しているかのように、息すら殺している。

――そうだ、まだ気づいていない。その調子だ。

「ようやく恐ろしくなってきたか。それでいい」

バンパイアロードの声に満足げな響きが混ざった。「さあ、答えを聞こう。あの男の名は？」

少し前から、ガディの耳は異音を捉えていた。次第に強まってくる異音は、バンパイアロードや、吸血鬼たちの耳には届いていない。

その音が何であるか、ガディには判っていた。

――もう少しだ。

キキッ？

吸血鬼の一匹が、音に気づいたようだった。しかし、ガディに尋問中のバンパイアロードに知らせるべきかどうか、まだ迷っている。

「男の名は？」

声のトーンが高くなった。

感覚はなかったが、どうやら爪の先端は既に身体の中に潜り込んでいるらしい。

異音が、玄室の扉のすぐ向こうから聴こえてきた。

――よし。

バンパイアロードの怒りが、頂点に達した。

「よかろう！　ならば永遠の眠りにつくがいい！」

爪が突き出される寸前に、ガディは叫んだ。

「奴の名は、バルカンだよ――」

同時に、扉が蹴り開けられる音が響き渡った。

間髪を入れず、五人の足音が玄室になだれ込んできた。

SCENE24
§ WERDNA §

スカルダの視界に、薄暗い玄室の全景が飛び込んできた。

直径が20mほどの、がらんとした空間であった。スカルダたちが蹴り開けた扉の他、出入口らしきものは見当たらない。

玄室の中央に、六匹の吸血鬼がいた。不意をつかれ、まだ戦闘態勢を整えては

いない。

右手奥の壁近くには、群青の礼服とマントに身を包んだ男――バンパイアロードが立っている。振り返った端正な顔に、驚きの色が浮かぶ。

その足元に、壁にもたれるように座らせられたガディとベリアルの姿があった。麻痺症状特有の虚ろな表情であったが、ガディの口元がわずかにほころんでいるかに見える。

そして中央奥――殺風景なこの玄室で、唯一設置されている豪奢な玉座。そこに薄紫のローブをまとい、長い髭を生やした老人がいる。

それだけの情報を、スカルダは瞬時に読み取っていた。

――あれが、ワードナか。

スカルダの目は、全て玉座でうつむいている老人――ワードナに向けられた。

先頭を行くジャバとスカルダの役割は、この名だたる悪の大魔術師を仕留めることである。ワードナほどの魔法使いともなると、悪魔や不死族の持つ呪文の無効化能力を身につけている恐れもあるため、剣による直接攻撃のほうが有効だとの判断からであった。

すぐ後ろにつけているバルカンが、凄まじい早さで呪文を詠唱する。魔法風が放射状に放出され、スカルダを追い越した。

ワードナと吸血鬼たちの中間で、爆発が起こった。炎が四散し、その一帯は地獄の業火に包まれる。

この日三度目の、バルカンの爆炎であった。

「地霊よ」

アルハイムが叫んだ。真横に開いた右手に紅い稲妻状の光が宿る。

「大地の底深く眠れし地霊よ。土に生まれ土に還る生命の理を妨げし闇の力を絶ち、地を穢す穢れし者どもを清浄無垢なる塵となせ――」

炎の海が勢いを弱めた。その中から、三体の吸血鬼が現れる。呪文の無効化を成功させた連中である。

それを片づけるのが、アルハイムの役割であった。

掌の中で、球形に封じ込まれた電光が踊っていた。その右腕が、大きく後方に引かれる。

「紅雷浄化！」

腕が振り抜かれた。光球が弾け、紅い稲妻が球に吸い込まれる。

吸血鬼たちが炎の中から飛び出そうとした瞬間、地中から噴き出した無数の雷がその身体を貫いた。吸血鬼は淡い炎に包まれ、一瞬のうちに溶け崩れる。

神の力によって呪いを断つ通常の解呪に、各地に残る精霊信仰の呪法を取り入れた、アルハイム独特の解呪である。通常の方法では高等な不死怪物ほど神から縁遠い存在であるため解呪の成功率が低下していくが、大地の精霊の力を借りたアルハイムの呪法は相手がよほど強力な不死族でない限り、ほぼ確実にその呪いを解く。闇の魔力を伝導する大地ごと浄化してしまい、不死族の活力源を完全に絶ってしまうのである。

炎が消滅した。同時にジャバとスカルダが前方に突っ込む。

吸血鬼は完全に塵と化していた。

バンパイアロードはようやく大凍らしき呪文を唱え始めたところである。玉座への進路を阻む者はなかった。

玉座には、予想通り爆炎の炎を退けたワードナが立っていた。

疾駆するスカルダを、レイバーロードのものとは比較にならない圧力の妖気が激しく打つ。

先行するジャバのスピードがみるみるうちに鈍った。ワードナに近づくほど、妖気の抵抗が大きくなっていくのである。

あと二歩で玉座が間合いに入るという地点で、ジャバとスカルダは一線に並んだ。走るというよりもう速歩に近い。

その時、初めてワードナが顔を上げた。

――むっ!?

その眼が、妖しい光を放っていた。

ワードナの顔を目の当たりにしながら、それがどのような顔であるのか、スカルダには判らなかった。その双眸に視線が釘づけになり、他の部分が全く目に入ってこないのである。

視線だけではなかった。気づかないうちに全身の動きが止まってしまっている。

金縛りであった。ワードナの眼を見た瞬間から、スカルダは術をかけられていた。ジャバも同様である。

指一本動かせぬ身体に、バンパイアロードの大凍が襲いかかった。氷雪の嵐が容赦なく二人の体力を奪う。

それでも、吸い込まれるような邪眼から目が離せない。

――もう、駄目か。

スカルダの頭を、諦めに似た想念がよぎった。

あと数秒と経たぬうちに、ワードナの爆炎が炸裂するであろう。そうなれば、パーティは間違いなく全滅する。

――守るべきものは、判らずじまいだったな。それぐらいは、知りたかったが――。

スカルダは、邪眼への抵抗をやめようとした。

その時であった。スカルダの心の中に、誰かのイメージが浮かび上がってきた。

金色の髪と緑色の瞳。もう長いこと、それは心の奥底にしまわれていた。

それは、サラであった。

――サラ！

にわかに眼前の妖しい光が弱まってきた。

――サラを死なせやしない！

邪眼の効力が消え、金縛りが解けた。

見ると、全身がもやで包まれたようなぼやけたワードナの姿が、まさに爆炎の印を結ぼうとしている。

渾身の力を込め、二歩前に出る。盾を投げ捨て、両手でカシナートの剣を握りしめた。

「つあっ」

上段の構えから、一気に振り下ろす。“気”の光輪がワードナの身体を突き抜けた。

おおおおおおおおおおおおおお……。

ワードナが叫び、その姿が揺らぐ。結びかけた印が解けた。

ジャバが、正気に戻った。

「けえっ」

ジャバの剣がワードナを裂く。

次の瞬間、ワードナから吹きつけられた圧力で、スカルダとジャ

バは大きく弾き飛ばされた。

バンパイアロードは、二人に二度目の大凍を浴びせようとしていた。

両腕を振り上げて詠唱を終える寸前、バンパイアロードの肉体の中心で異常が起こり始めた。

腹の底が焼けるようであった。

「これは――」

一瞬の後、バンパイアロードの肉体は消滅した。礼服がばさりと地に落ちる。

サラの喉から、高い歌声のような詠唱の余韻が響いていた。サラがバンパイアロードに魔法を浴びせたのである。

窒息と同じ魔道系第六レベルに属する呪文・壊呪であった。窒息では死ぬことのない不死族に対抗するためにあみ出されたもので、高位呪文には珍しく単数の、しかも不死怪物にしか効果がない。

しかしその威力は絶大で、不死怪物一匹の肉体を根こそぎ破壊し、消滅させる。

全ての不死族の頂点に立ち、僧侶の解呪もまず通用しないといわれたバンパイアロード――ワードナの片腕にして、伝説の中でフラックと並び恐れられてきたこの闇の貴族も、壊呪の直撃に耐えられるものではなかった。

残るは、ワードナ一人――。

しかし、スカルダとジャバは体勢を大きく崩しすぎていた。

ワードナが揺らいだのは一瞬であった。床に倒れ込んだ二人が体を立て直すより先に、再び爆炎の印が結ばれる。

前方から、魔法風が吹き抜けた。もはや間に合うタイミングではなかったが、スカルダは床を蹴り、突進を始める。

その横を、信じられない速さで黒い影が追い抜いた。

バルカンである。凄い速さであった。

フラックに操られたハ・キムの傀儡のような、肉体の限界を越えた動きである。

爆炎の効力が呼び起こされる瞬間、バルカンの攻撃がワードナに届いた。

妖気が、爆発した。

黒いローブをズタズタに裂かれながら、バルカンは大きく弾かれた。爆炎の爆風だけが至近距離で浴びせられたのである。

スカルダの頭上をかすめるように、バルカンの身体は玄室の入口方向へ飛ばされていった。

その隙に、スカルダは再度間合いを詰めていた。

ワードナの姿が、大きく揺らいでいた。両手で顔を掻きむしるようにして、悶え苦しんでいる。

スカルダとジャバの攻撃を受けてすらわずかにひるんだにすぎなかったワードナが、魔法使いであるバルカンの一撃で大ダメージを受けているのである。

奇妙ではあったが、考えている暇はなかった。

妖気が弱まっていた。身体を押し戻す圧力もなく、ワードナとの距離は一気に詰まる。

最後の一歩を踏み出した時、スカルダの"気"は極限まで凝縮されていた。

ワードナの中に、一本の光る糸が見えるような気がした。

それめがけて、スカルダは剣を振り出した。

たわめられた全ての"気"が、薄い刃から噴き出す。幻しの刃が寸分違わずに、その細い光をなぞった。

がっ。

短い声があがり、ワードナの動きが止まる。

それが、断末魔の叫びとなった。

玉座に腰を下ろすように、ワードナは後方に倒れていった。

スカルダはさらに一撃を加えようとしたが、もはや微動だにしないのを見て、剣を下ろした。

その時、変化が起こり始めた。

ワードナの輪郭が、ぼやけ始めたのである。

――何だ？

全身を緊張させたスカルダの前で、ワードナの肉体はローブごと、みるみるうちに霧状になっていった。

完全に実体を失った時点で、紫色の霧はゆるゆると収縮し始めた。次第に速く、それは玉座の上の一点に集まっていく。

皮の敷布もない水晶の玉座に、冷たい光を放つ金属片が置かれていた。スカルダは見たこともない、薄紫色をした金属である。紙のように薄く、丁度掌に収まるほどの大きさの楕円形をしている。

霧は、その中に吸い込まれていた。

最後は大地に落ちる雷光の速さで、全ての霧が金属片の中に消えた。

理解し難い現象であった

ワードナの屍が一瞬にして消失し、あとには不可思議な金属片が残ったのである。

警戒しながらも、スカルダは吸い寄せられるように金属片に手を伸ばしていた。

それを手にした瞬間、大凍によって生じた凍傷の痛みが消え去った。そして身体の中心から、軽い熱に似た活力が急速に広がっていく。

「こいつは――」

スカルダは驚きの声を漏らした。

だが、すぐ後ろにいたジャバはその声も耳に入ってはいなかった。

第5エリアの玄室でバルカンが歩き始めた時から抱いていた異和感が何であるか、ようやく判ったのである。

――全ての魔法を使えるってだけで勘違いしてたが、確か奴はこの迷宮は初めての筈だ。城塞にも来たばかりだと言っていたしな。なのに何で迷いもしねえで次の地下道に飛べる転移地帯に入っていけたんだ？　それに奴がワードナに斬りつけた時、やけに細長い剣を持ってたように見えた。ありゃ、魔法使いに扱える代物じゃなかったぜ。

「おいスカルダ、どうも変だぜ――」

ジャバが言いかけた時、背後で二つの叫びが上がった。

「がっ」

「きゃあっ」

アルハイムの叫きと、サラの悲鳴であった。

二人が反射的に振り返った。

その目に最初に映ったのは、紅の法衣を更

熱狂

単行本「隣り合わせの灰と青春」は
11月19日頃発売予定
定価980円

に赤く染め、息も絶え絶えに転がっているアルハイムの姿だった。胸から腹までを鎖かたびらごと大きく切り裂かれ、血が大量に流れ出している。

その向こう——玄室の扉を背にして、サラとバルカンが立っていた。バルカンの腕が背後からサラの首に回され、身体の自由を奪っている。

もう片方の腕に、アルハイムの血に濡れた剣が握られていた。

細いが長剣並みの刀身を持つ、わずかに湾曲した片刃の剣である。少なくとも腕力の劣る魔法使いに使いこなせる重さではないように見えた。

「サラ！」

「バルカン、てめえは——」

叫ぶと同時に走り寄ろうとする二人を、くぐもったバルカンの声が制した。

「それ以上動くな」刀がついと持ち上げられた。

「この女を死なせたくはなかろう」

数歩近づいたところで二人はその場に凍りついた。

「それでいい」

バルカンの喉から、低い喘笑が響いた。

「その時、半ば意識を失いかけていたサラが激しくもがいた。指がバルカンの口元を覆う黒布にかかり、引き下ろす。

バルカンの顔が、露になった。

サラが高く悲鳴を上げ、失神した。スカルダも短く叫びそうになっていた。マスクの下から現れたのは、もはや皮膚が溶け落ちるほど腐乱しかけた、死者の顔だったのである——。

SCENE25

§NACLAV§

「驚いたようだな」

骨の露出しかけた醜悪な顔が、笑ったようだった。くぼんだ頬にへばりついている腐肉が今にも弾けそうになる。

「今の今までパーティを組んでいた者が、この姿だからな」

「死霊に操られていたのか——」

スカルダが低く呟く。

ぐっぐっぐっ。

バルカンの喉が楽しげに鳴った。

「そうではない。儂には儂の意識がある」

「腐り始めた屍に、その者の魂は戻れぬ筈だ」

かかかかか……。

おかしくてたまらないといった風に、髑髏に似た頭が上下する。

「封印された太古の魔法の中には、お前など想像もできぬほど強大な力を秘めたものがあるのよ。数年の間地底の岩塊の中にあった儂に仮の生命を吹き込めるようなものがな」

バルカンの眼が、床で喘ぐアルハイムを見た。「それでも今は不死族に等しいのでなあ。息の根を止めるつもりだったが、こ奴うまくかわしおった。それでもこのざまでは解呪はできまい」

視線がそれた隙に、ジャバは軽く身をかがめていた。膝を曲げ、すぐにでも突進できるよう筋肉を緊張させる。

ジャバの目算では、バルカンとの距離は10m強であった。今のジャバなら二秒とかからずに駆け抜けられる距離である。

バルカンの肉体の腐敗はかなり進行している。感覚器官はほぼ、機能していないと見て良かった。

その反応の鈍さにつけ込んで、サラを助けるつもりであった。

しかし飛び出そうとした瞬間、その動きを予期していたかのようにバルカンが向き直った。

タイミングを外し、ジャバはよろめいた。

「馬鹿め。お前のようなにわか忍者が何を企もうと、全て“気”となって伝わってくる。今度そんな考えを起こしたら、女は刀の錆となるぞ」

「てめえ一体——」

「侍か！」

スカルダが叫んだ。「侍だったのか！」

「ようやく気づいたか」

バルカンの薄い唇の間で、どす黒く変色した舌が蠢くように蠢く。

スカルダの目は、バルカンの持つ長刀に注がれていた。それは転職の道場で手にした日本刀と、ほとんど同じ形状であった。

——まさか。

「何が目的だ？　俺たちにずっとこうしてろってんじゃねえだろうな」

ジャバが言った。

「それだ」

バルカンが、スカルダの手に握られている金属片を見た。「その魔除けを、こちらによこせ」

「何！」

二人は同時に叫んでいた。

「これがあの、魔除けだと——」

「そうだ。それさえ渡せば女は放してやろう。あとはお前たちなどに用はない」

バルカンの眼が鋭く光った。

「これが目当てか」

スカルダは掌の中にある魔除けを見つめた。——奴を太古の魔法で蘇らせた何者かが、魔除けを欲しがっているという訳か。

必読
単行本「隣り合わせの灰と青春」は
11月19日頃発売予定
定価980円

確かに素晴らしい力を秘めた品であった。金属片の持つ治癒効果のおかげで、この短時間にスカルダの体力はほぼ回復しきっている。一時は死の淵にあったというのが、嘘のようであった。

更に噂ではあらゆる攻撃を跳ね返す強力な魔法障壁をも生じさせる能力があるという。トレボーならずとも、手に入れたがるのは無理もなかった。

しかしスカルダにとってこの魔除けは、それほど執着を感じさせるものではない。持っていればあらゆる戦いにおいて役立つであろうが、所詮は身についていない力である。彼が欲しかったのは、自分自身の肉体に宿る力であった。

サラの命を救うためなら、こんな魔除けなどくれてやっても良かった。

――だが。

バルカンの要求をのんだところで、サラが開放される保証はなかった。

いきなりアルハイムを斬りつけるような相手である。魔除けを受け取った途端、爆炎や窒息の呪文を浴びせかけてきても不思議ではない。むしろ、その公算のほうが高かった。

「さあ、早くこっちに投げろ」

バルカンがスカルダを急かした。「侍のお前は判っているだろうが、わざとそれるように投げたとしても“気”で伝わってくる。その時は遠慮はせんぞ」

刀が気絶したままのサラの首筋に当てられていた。

――刀を持つ腕を、切り落とせれば。

それさえできれば、ジャバが距離をつめるだけの時間が稼げる。しかしそれをするためにはあのサムライ・マスターのものに倍する居合と、バルカンの気を一瞬でもそらす何かが必要であった。

ガディは耳だけで、何が起こっているのかを逐一把握していた。

侍のバルカンが“気”を読むため、スカルダもジャバも身動きがとれないようだった。

今日のスカルダを見た限りでは、“気というものは生物が行動を起こす際に圧縮された気配であり、その“気”の動きは即ち、後に続く肉体の動きであるらしい。

スカルダに天分があるとはいえ、レベル1の侍があれほど見事に敵の動きを読むのだ。かなりの高レベルであるらしいバルカンは、わずかな“気”の乱れも察知するであろう。

しかし、そのバルカンがわざわざサラを人質に取り、魔除けを要求している。背後から強力な呪文を浴びせれば、スカルダたちを簡単に葬れる立場にありながら。

ガディは、その理由に気づいた。

――バルカンは呪文を唱えられないほどの深傷を負っているんだ。

痛覚のないゾンビ故に表面には出していないが、ワードナとの戦いでかなりの傷を受けている筈であった。そこに、肉体の回復能力を持つ魔除けを渡したとしたら――。

「どうした、早くしろ」

バルカンの声が響いた。

――この一瞬を生かしてくれ。

ガディは立ち上がり、バルカンに襲いかかろうとした。麻痺した肉体は、無論動き出しはしない。

しかしその“気”だけは、強烈にバルカンを撃った。

「ぬっ!?」

バルカンがひるんだ。予想もしなかった方向から、鋭い“気”の動きが伝わってきたのである。

バルカンの注意が、スカルダからそれた。

――今だ。

スカルダの心から、瞬時に雑念が消え去っていた。

目の前のバルカンも、手にした魔除けも、そして斬るということすら頭の中にはない。あるのはただ、透明な無限の広がりであった。

その時スカルダの心は、無の境地にあった。

一瞬が無限となり、空間の隔たりは無となった。

凝縮された空間の一点に向け、無限大の“気”を放出する。

気がつくと、剣を振り下ろしていた。

バルカンの刀がそれを手にした腕ごと、ゆっくり床に落ちていった。

刀が石床に当たる音で、ようやくスカルダの感覚が通常に戻った。

ジャバが突進する。

サラを突き飛ばし、バルカンは横に飛び退いた。ジャバはサラを受け止めるのが精一杯で、切りつけることができない。

バルカンの顔が、憎悪に歪んでいた。ひきつれた皮膚が破れ、膿のような腐汁が滲み出している。

「お前のようなひよっこが、居合だと――」

かあっと、喉の奥が鳴った。

「二人では死なんぞ」

バルカンは残る片腕を己の顔前にかざした。窒息の呪文を使う構えであった。スカルダたちを一人でも多く道連れにするつもりらしい。

だが、それよりも早く、どこからか呪文の詠唱が響いていた。

高く、魅せられるような旋律であった。それがバルカンの腐敗しかけた鼓膜にも届く。

「誰だ？ “気”が、感じられぬ――」

次の瞬間、バルカンの肉体は原子の塵に分解されていた。

――壊呪！

スカルダは呪文の聞こえてきた方向を見た。ガディたちがいる辺りである。

床から、人間の生首が生えていた。その首と床の接点が、ぐつぐつと細かく泡立っている。

瞳が紅く煌めいていた。

「吸血鬼か!?」

「待て。もはや戦う意志はない」

その間にも、泡は激しく噴き出していた。それが次第に、人型の肩と胸を形造っていく。

バンパイアロードが、再生していた。

最後の玄室。冒険は終わらない

「私はワードナ様の命により、魔除けを手にした者との再戦は禁じられている。真の不死者である私が相手では、きりがないだろうからな」

「どういうことだ」

剣を構えたまま、スカルダが尋ねた。

「再生を終えたら、教えてやろう。この迷宮の意味と、あのゾンビ――ナックラーヴが誰の手の者であるかを。今の壊呪で私は少々無理をし過ぎた」

バンパイアロードが目を閉じた。にわかに訪れた沈黙の中、床の上の湾曲した刀が白く光っていた。

御愛読ありがとうございました

本年度Vol.5で連載を開始してから、あっという間の8ヵ月でした。まさに光陰矢の如し、今号終わればすぐ次号の原稿という調子で、生活のリズムが完全に2週間周期になってたからね（笑……ごとじゃないか）。しかし、その日々を支えてくれたのは他でもない、読者の皆さんの暖かい声援でした。改めて、ありがとうございます。単行本には400字詰50枚分の加筆がありますので、そちらもまた、よろしく。（ベニー松山）